

川柳塔

平成元年一月十五日印刷
平成元年二月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷七四一号



日川協加盟

No. 741

二月号

黒川紫香

尼崎市文化功労賞受賞 記念川柳大会
句文集『むらさき』発行

日時 三月五日(日) 午前十一時開場 正午締切
場所 尼崎サンシビック三階大ホール

(阪神尼崎駅南側線路沿い歩いて五分)

・祝辞 小林由多香氏
・お話 橋高薫風氏

課 題 (各題二句)
〔第一部〕事前投句、出欠を問わず、乞多数ご参加
〔喜〕黒川紫香謝選
〔友〕正本水客友情選

〔第二部〕当日出席投句 席題なし
〔絆〕春城 年代選
〔文〕小出 智子選
〔和〕西尾 栞選
〔山〕八木 千代選
〔岬〕野村太茂津選
〔風〕森中恵美子選

当日会費 二千元 (軽食、作品集、句文集『むらさき』星

・ただし第一部の事前投句は締切日二月二十日までに左
記へ、投句料三〇〇円(六〇円切手五枚)を同封でお
願いたします。

投句先 千原尼崎市武庫荘五―二五―一七
春城武庫坊(電〇六―四三―一一一五二)

主催 尼崎川柳同好会

(アトリキ、おろは)

後援 川柳塔社

句文集

『むらさき』発行ご挨拶

黒川紫香

このたび、思いもかけないことから句文集『むら
さき』を出すことになりました。

拙いものではありませんが、私の川柳人生五十年余
のこころを綴ったものです。一度ページを開いてご
覧いただければ、この上ない幸せと思います。

なお本書は三月五日の記念大会の節、お渡しする
予定ですが、ご遠方その他でお越しいただけない
方でご購読下さる向きは、その旨お知らせ下され
ばお送りします。

頒 価 千五百円(着本後送金)

句文集『むらさき』

裁 B6判美装・本文約二百頁

内 容

・句(自昭8〜至昭63)約五百句

・旅の句帖(日本よいとこ)

・北海道から沖縄まで約三百ヶ所の句と一行案内

・随筆「川柳塔」その他に発表したもの十数編

大行天皇の崩御を悼み 謹んで弔意を表します

川 柳 塔 社

春の艸

西 尾 栞

春の艸代議士などに踏まれるな

右の句は、恩師路郎の句である。

昨年の十月以来の国会のリクルー
ト劇は、まことにお粗末で、嘘の上
塗りの揚句、大蔵大臣の辞任と、改
造内閣の出来たとたんの法相辞任と
いう新聞を見るのも胸糞悪い許りで
あった。然し大臣をやめても、代議
士をやめない情けない代議士亡者で
ある。

やつと芽を出した春の草よ、犬に
踏まれても、代議士などに踏まれる
などは、流石、恩師仲々うれしい句を

作られたものである。私事で恐縮だが、旧臘十一月に男の曾孫が誕生した。名付にはいずとも同じ苦心するものである。そこで私は童年であるから、龍之介という名を出すと、若い親達は大賛成で即座に決定したが、祖父母達は龍という文字が、大変むずかしいので、代議士に出るのに困るんじゃないかというクレームがきた。

代議士に出られない、むずかしい
画数の文字のそこが、みそである。
そこが狙いである。恩師の一句が頭
に沁みているから、私の思いが通つ
て欣快の至りであった。因みに、私
の名は巖である。今更、親父の先見
に感激している。もう一度、

春の艸代議士などに踏まれるな

座右の句

足跡を残そう砂のあるかぎり

(惠二朗)

私の句

忘却という休息は老いのもの

池田半仙

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

春の艸

西尾 葉 …… (1)

「私の昭和史」

田中正坊 …… (2)

川柳塔(同人吟)

西尾 葉選 …… (4)

自選集

東野 大八 …… (31)

■川柳太平記(129) 川柳の群像 高橋月南

東野 大八 …… (34)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(二十九丁)

黒川紫香選 …… (36)

水煙抄

藤井 一二三 …… (38)

秀句鑑賞

同人吟

松下 たつみ …… (57)

89年度 路郎賞・川柳塔賞候補作品中間発表

橘高薫風選 …… (58)

愛染帖

小出智子選 …… (62)

〈女性コーナー〉 茴香の花

小出智子選 …… (68)

「私の昭和史」

田中正坊

新年の読書始めに、『私の昭和史』(岩波新書別冊)を読んだ。著名な評論家で一〇年前岩波新書としてユニークな昭和を生きた自分史『羊の歌ーわが回想』正・続二冊を刊行した加藤周一編、岩波書店編集部が広く読者の文章を募り、応募六四九編の中から選んだ一五編を採録している。応募作品の筆者の圧倒的多数は六〇歳前後で、この本は昭和時代と生涯を共にした人々の貴重な証言ということになる。

その一編一編が感動的であったが、戦争中治安維持法で検挙され、取調べにあたった特高の警部補に戦後、再会するという話を書いた「つかの間の明るさ」と、戦時の軍隊生活占領下のレッド・ページと法廷闘争、最近の胃がん闘病という三点に集中して、その体験をつづつた「戦争・レッドページ・がん」が印象的であった。特に、後者の筆者は一九二三(大正一二)年生、私と一歳違いであり、その経歴があまりにも私のたどった道と似ていて、身につまされるものがあった。

大正の末期に生まれた私は、大正天皇の大

63年度 愛染帖賞・茴香の花賞受賞のことば……………	(70)
句評リレー 西山 幸・河井庸佑・都倉求芽・工藤甲吉……………	(65)
言いまわしの個性(八) 続・自分史に連れ添う語彙……………	(72)
初歩教室……………	(76)
「枝」……………	(78)
上田翠光選……………	(78)
真喜内 實選……………	(78)
川崎秋女選……………	(79)
「昏」……………	(80)
河内天笑選……………	(83)
〈特別募集吟〉「電気製品」……………	(84)
各地柳壇(佳句地10選/河瀬芳子)……………	(84)
■句集紹介 坂本仙吉郎句集『ふたり旅』……………	(96)
吐田 公一……………	(96)
柳界展望……………	(97)
■2月各地句会案内/99……………	
■編集後記/101……………	

座右の句

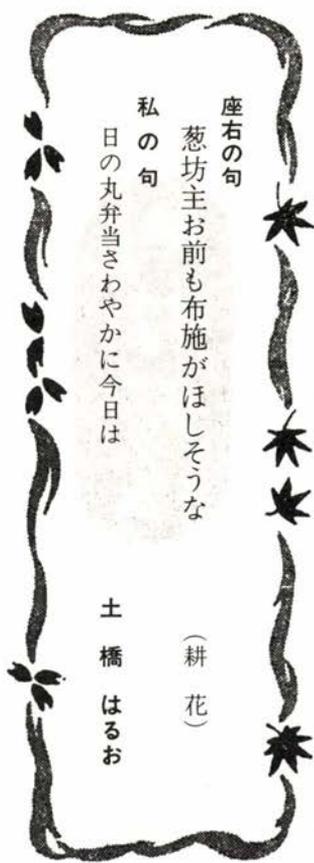
葱坊主お前も布施がほしそうな

(耕花)

私の句

日の丸弁当さわやかに今日は

土橋 はるお



喪については知らないが、昭和天皇の即位式は、当時の新聞・ラジオ、あるいは奉祝行事によって記憶の片隅にある。その後の昭和史は、恐慌・弾圧・テロ・クーデターと激動が続き、十五年戦争へと突入する。戦争には、私も含めて兄弟六人全員、多くの学友が従軍し、異国の土となった者も少なくない。戦後記者生活に復帰した私は、新聞の民主化運動に青春の情熱を傾け、天皇の関西巡幸にあたっては、記者団の一員として随行した。だがそれは、「つかの間の明るさ」であった。戦後の日本の方向は、レッドパージと朝鮮戦争の一九五〇(昭和二五)年に選択され私も職場を追われるに至るが、その間の状況は、かつて同僚であった大森実がまとめて講談社から刊行した『戦後秘史』(全二〇巻)に実名で記録されている。また、戦前・戦時については、戦争体験を記録する会が編んだ、『私たちと戦争』(全五巻)に、「私の卒業アルバム」「私の軍隊手帳」「橋一四一五四部隊」の三編を執筆している。

それから四〇年、私は私なりに社会の一隅でひたすら生きてきた。栄光もなかった代わりに、大過もなかったように思う。そして古希もさほどに遠いことではない。新天皇の即位によって元号は変わったけれども、私はやはり「私の昭和史」を生き続け、時々、思いを川柳や随想に托したいと願っている。

川柳塔

西尾 葉選

米子市 林 荒介

ビー玉の転げ続ける身の証し
音の無い部屋にわたしを置いてみる
連綿と昨日は今日に続くなり
裁かれて一人ずつ去る水鏡
鳩尾のあたりに溜るピカソの絵
一斉に歩道を渡る列にいる

兵庫県 遠山 可住

木枯しへ出て行く恋が燃えている
尼さんの手にかき餅がよくふくれ
糠袋十ほど若く見てもらい
変人と言われ家業を継ぐと言う
そして二人盆と正月だけの家
姑と暮すおかしな嫁が来る

桜井市 岩 本 雀踊子

单身赴任みそらあめんを買いだめる
脱皮する少女は午後の花畑

明日の返事を待っている女

灰皿に小さくすててある未練

無言劇女もその気になっていた

美人薄命うちのかあちゃん大丈夫

和歌山市 西山 幸

自負も自我もいっぱいあって生きている

北風にことさらガムを噛みしめる

言葉の裏を受話器に知られないように

おおさむこさむ肩書のない名刺

口紅を濃い目に今日に立ち向かう

造花いっぱい咲かせて春を待っている

岡山県 嘉数 兆代賀

上昇気流に乗って人間喪失す

目を病めば音の世界が見えてくる

踊る阿呆になってピンチを切り抜ける

世渡りが下手でおみくじばかり引く

残照の駅に疲れた傘がある

大いなる落日天地極まれり

松原市 谷垣史好

侍医団の徒勞を思ふ尊嚴死

衣食足りもう群衆は見当らず

同じ話を肴に酒をのんでいる

喜んできみの僕になります

芋虫の抱負いまさら聞かいても

加速度がつかぬ二月のペンの先

竹原市 小島蘭幸

一番いい顔が鏡に出来ません

漬物石の重さは妻の重さだな

お父さんは百点取ったことがない

保険屋に負けてしまった十二月

宿題とある一枚の白い紙

魔法がとけて二人は二人だけになる

堺市 中川滋雀

楷書から行書へ心張り棒をぬく

片方の耳から愚痴は抜けていく

きのう今日あしたに続く棒グラフ

嘘一つ閻魔の死角で許される

木枯しにむかし咄の好きな夜

警官と視線が合うたすれちがひ

西宮市 林はつ絵

風邪癒えず金柑なかなか彩づかぬ

仮の世のホテルと観じうさぎ小屋

雨に濡れ尾灯の消えるまで送る

父よりも高い車を乗り回す
人形の首も時には横を向く
星光るきのうの涙美しい

大阪市 西出楓楽

マナーには遠くひとりの昼ごはん

吃水線守るお方でつまらない

肩の荷がおりたら寒い肩あたり

優先座席に座る勇氣はまだ持たぬ

スリーサイズみんな同じで着物好き

風除けの言葉をさがす舌の先

松原市 玉置重人

家計簿の枠をはみでたスケジュール

暖房の部屋で水虫動きだす

本心は平和を願う兵馬備

ピリオドはまだまだ打てぬ二幕目

ヤジロベエ訣れ話を持って余す

中流の炬燵に盛ってあるみかん

島根県 堀江正朗

頼るのは耳 聞き違いしても耳

闇のみち照らしてくれる妻の声

愚痴すこし臉を濡らすのは軍歌

一服を濃くして茶碗春を待つ

空想は今日が終ってまた生まれ

欲ひとつひとつ数珠繰る脇へ置く

平田市 久家代仕男

農協の端株くらいは持っている

二の足を踏めば背中を妻が押し
水炊きにされて哀れな鶏の足

暖房に夢からさめた冬の蠅
シंकロの足は自在な貝杓子

放蕩のはて盛り場の蛸焼屋

堺市 高橋 千万子

洪柿のすました顔にしてやられ
相談にアホーとひと言返される

コスモスのゆれ偽りの影を責め

ダイヤ選るささやき夫婦でないらしい

冬至かなストンと話打ち切らせ

水替えて松竹梅と春を待つ

米子市 林 瑞枝

オブラートに包んで語る血の絆

ひたすらに神の甘露をてのひらに

流れの中で一服したい杭を打つ

端末機わたしの夢も予測する

カタカナに弱くて翔べぬ鶴の首

酸欠の脳を洗いに旅に出る

藤井寺市 吉岡 美房

来年の仮面を探すいろはには

家中の靴を揃えて初春を出る

年玉に相続税がかかりそう

女房から見ればせいぜい奴唄

河豚鍋や浪速の夜は俺のもの

まむし酒信じる者は救われる

今治市 矢野 佳雲

あれたしか薬だったかセメン菓子
杭打ちの手伝いすぐに手を放し
お祭りのあと露店商掃いて去に
本人は名文の気の誤字脱字

コスモスの弱さを男放つとけぬ

会者定離夫婦で欠ける日を思い

弟の涙で明けて暮れた年

尼崎市 春城 年代

除夜の鐘男ひとりに響けとや

去年今年手足まといの無いもよし

三日月の淡い陸橋暮れなすむ

ニュアンスが少し違ってきた話

妻と渡る橋のなかほどだるくなる

和歌山市 福本 英子

甲羅干す亀もわたしも追う陽射し

自販機で一寸ためらう缶ビール

下駄の音聞けぬ京都の石畳

顔見世の看板だけを旅土産

意地悪な話はしない縄のれん

おでん鍋男の愚痴が煮えている

京都市 松川 杜的

文庫本も一度漱石読みなおす

戒名へ雅号の一字も頼みます

先生とおんなじように墨が減る

母も病み陛下も病んで十二月

頭から足までブランドの頭文字
アメフトに負けんばかりの肩パット

米子市

小西雄々

七度二分ひと息ついた夜が白み
販売機よりもお世辞の言えぬ夫
ラストダンス微熱でるほど余韻抱く
一碗の芋粥うまし小雪舞う
風紋へ恋の痛手を埋めに行く
亀に負けそうな記録で人生路

豊中市

田中正坊

独断が偏見だとは限らない
返り花忘れた歌を思い出し
丸腰が不安で鞆提げている
石二つあれば火種に事欠かぬ
止り木で半端な知識振り回す
聞きとれぬ言葉相槌打っておく

唐津市

久保正敏

菊日和叙熱に映える男の灯
止り木で餌を取られてばかり居る
一げんの客で成り立つ葬式屋
腕組んで溺死見ている公務員
黄昏のホステス株に手を染める
ノーと言わぬ女が一人居て悩む

尼崎市

春城 武庫坊

カタカナで第九合唱文化人
嫌なことすぐ忘れるも弥陀の慈悲

洒落わかる女と吞んで温い夜
蜜柑むく女がむくと甘くなる
鬼よ笑うなチューリップ今植える
鯛焼きのあんこが告げる自己主張

大阪市

津守柳伸

迎春の誓いあらたに鶴を折る
いつか来た道で初心に触れてみる
迎春と書いて陽の目を見るハガキ
それなりの誠意で寒の福寿草
デジタルの日付に踊るハネムーン
唇を噛むことばかり師走風

八尾市

宮西弥生

御先祖に感謝忘れない不惑
名簿が狂わぬままで年明け
十二月半ば体力もう果てる
足元が明るい人の聞き上手
結婚せぬ女が増えてくる職場
ありがとう基本の言葉忘れてる

和歌山市

内芝登志代

天と地が味方と思う土に生き
従いてくるばかり頼りにならぬ影
ひと言がこんな嬉し老いとなる
回れ右できればしたい事ばかり
折角のセットが似合わぬ冬の空
一期一会美味しいみかん食べましよう

和歌山市

松原寿子

誘い水へ秘めた本音を流そうか
やまいだれ何ゆえ胸に棲みつつか
封切ればあなたの鼓動あふれ出す
面影をせめて心に受胎する
優しさごっこ風の微笑うけておく
黒髪と傾いてゆく熱い胸

宝塚市

丸山よし津

ゆりかもめ群れて孤独を慰める

街路灯点りひとりの家の鍵

昇り疲れて寒月を見る歩道橋

虚と実と半分ずつのコメディアン

年を取るのはちっとも嫌な事でない

一病に開き直って生きている

竹原市

森井菁居

情感が褪せて来そうで絵筆持つ

ついで行こう魂胆は無い父の旗

社命とや企業戦士に四季が無し

進学が今年は居ない三が日

節目節目へ親の出番があるのなら

仕送りの最前線で若くいる

出雲市

板垣夢酔

定員オーバー妻を残したエレベーター

へそくりを守り疲れて輪ゴム切れ

先制球 電話言うだけ言うて切る

一緒には住めない人とレストラン

おじさんと呼ばれて愛の芽が伸びぬ

年金になって魅力の無い夫

下関市 石川 侃流洞

ワイシャツの白快調な朝の靴

老獺な狸が狐の裏にいる

財テクへ冥土六文だけでいい

ゴネ得の読みを崩さぬ影法師

年金へ今更赤富士掛けたとて

弘前市 波多野 五楽庵

老眼鏡愚鈍を装う技があり

きまじめで胃の腑が少しづつ縮む

ハワイ焼けでしようと言める憎らしさ

七面鳥雪の見おさめかもしれず

酔い覚めて未払請求見えています

伊丹市 檜谷 寿馬

十二月八日と八月十五日

悲しさは宅急便で来た形見

案外に美人だったなと遺影

干し大根萎びた腕で取り入れる

独立の子へ実印のプレゼント

仙台市 川村 映輝

八十と五歳迎えて悔いはない

四十年前の気骨だけは今も持ち

生涯教育の範となる一二歳

敬老パスもらって足が弱くなり

同じ飯食って育っても善と悪

笠岡市 松本 忠三

夫唱でも婦唱でもよし夫婦仲
乾杯の音頭を下戸がとっている
大丈夫ですかと孫がふりかえる
親子とはこんなにも似る電話口
あきらめの道往年を買被る

島根県

西村早苗

人さまに妻だと言うて不倫なお
折り鶴を娘が折りそうな包装紙
母に秘密つくってお話するコケシ
タイピンのご紋在位の記念とか
風が来る方に灰皿おいてある

岡山県

土居耕花

入れ歯折るアワアワと兎に戻り
莢豌豆は水子を抱いたまま炊かれ
健かな胃がたこやきの前で鳴る
心臓に発禁本は見せられぬ
鉛紙めてしまえばこれも色即是空

高槻市

辻白浜子

懺悔する視線伏せたりなどはせぬ
口数の少ない親切行き届く
苦心して聞き出す酒が酌きこぼし
素人が付けた自信へもてあます
体力はないが達者な口を持ち

大阪市

河井庸佑

昇進の辞令ゆっくり読み返す
生真面目なだけに不安がつきまとう

スイッチの利かぬ頭を持て余す
内緒話洩らして親密感が増し
本心が喋れぬうちに駅に着く

倉敷市

稲田豊作

ゴキブリよお前も子持ち可愛かる
病窓へ嬉しい見舞い鳩が来る
何事ぞ瑞穂の国に米買えと
ハイハイの妻が持つてる羅針盤
貧乏神と長いながーいおつき合

大阪市

西森花村

本年の調子お雑煮三杯目
胃は丈夫よしや頭はうすくとも
冬晴れのすがすがしきよわが財布
獅子舞いも金齒は奥より前にする
何時までも此の世は続く冬の旅

奈良市

宮口笛生

自分しか頼りにならぬ十二月
天皇様のご平癒祈る十二月
平日も休日もない街師走
かけ足の十二月は止まらない
そう言えば笑い忘れた十二月

京都市

都倉求芽

道草を許してくれる温い風
細帯の女が水打つ灯の三和土
火の中でその瞬間を栗は待つ
二代目の評判病院さびれてる

つまんだら白髪抜いたら黒い髪

寝屋川市

稲葉冬葉

ひと癖もふた癖もある手を洗う

ふた回りして大根の切売りを買い

いつもトツプで面白くないゲーム

文無しで歩くと石に蹴躓く

水仙が咲いて竹踏み数え唄

大阪市

本間満津子

出番だよ寒いのに蛇起こされる

安定剤飲んで吉報待ちかねる

ひっきりなしに喋るとつても淋しくて

カレンダー明日起こること判らない

雪の朝早起きをする用もなし

名古屋

越村枯梢

ギャグ少し過ぎたか女そっぽ向く

涙流して別れていったのは人形

世の中を丸く住んでる嘘の中

胸襟を開くと風邪をひきそう

小春日和ときには飴を嘗めさせる

西条市

片上明水

旅の本京都の冬を先に読み

カレンダー吊る位置替えた定年後

胴上げの差し手の中に敵がいる

杭打った線から地価が動き出す

街近く散歩の道を変えて冬

呉市

林野甦光

自慢話がとっても下手な母の靴

傍線を消すとつまらぬ字に戻り

解釈の仕方で丸が角になり

畏くも地蔵の鼻の霜柱

雲からの伝言を聞くタコの糸

倉吉市

渡辺独歩

褒めてやることに出直す子の躰

立ちすくむ思い遮断機降りてくる

瀬戸の橋一億人目の渡り手に

いつからか嫁の色着る姑でした

耳よりな話は地上げ屋が呉れる

鳥取県

川崎秋女

倅せになろうなろうと葱坊主

菠薐草やつとこさつと芽を出した

隣にも受験子がいる今朝の雪

割り切って話す笑えるかも知れぬ

貧しさが素直に言えて飢えてない

富田林市

藤田泰子

自棄酒も吞めずパツサリ髪を切る

垣間みた表の顔と裏の顔

気が付けば人につられて走ってた

振り向くともう渡れない丸木橋

だんごより花を愛して飢えている

大阪市

江城修史

桶となる妻にすまない日の焦り

ぬかるみのどこまでつづく夫婦坂

亡き父の歴史に特高つきまとい
忘れられ忘れて風化する絆
腎不全それでも燃える命もつ

柳井市 弘津柳慶

元氣かと医者にバツタリ出会ったり
老人会出しゃばりが又しゃしゃり出る
献体の事考える年になり
クリスマス今年は自肅致します

呉市 横田英詩

誤解とけてふたりに磁石効いてくる
腕組みを解く言い勝って言い負けて
檜山へ弾まぬ毬を捨てにゆく
水甕がときめきながら満ちてくる
父老いて歯医者で牙を抜かれてる

唐津市 田口虹汀

同じ手はもうプライドが許さない
虎の尾と知れば二の足踏む齡
肩書きがすっかりとれた露天風呂
のっけからあつまり来られたらあかん
鳩が来る餌をやるなど書いた窓

唐津市 仁部四郎

掌中の珠出し合って高砂や
ハネムーンけし粒になる親の顔
定年の日から夕陽怖くなり
成人の日から猫まで声がふえ

一日を飾るネクタイ妻が選り

兵庫県 辻文平

腕組んで終った恋を眠らせる
言い切つて後へ退けない酒が要り
母さんの笑いの裏にある涙
迷うだけ迷うて母の組む十指
失言を笑いの渦にする演技

寝屋川市 江口度

ふくよかに笑まう貴女の泣きぼくろ
つつましい愛たこ焼きを食べながら
満員車停まり感電する乳房
書棚から返せと言えぬ本が消え
新薬のけむり冬のくる匂い

寝屋川市 平松かすみ

大の字で脚下照顧とお書き初め
ほほ紅をピンクに変えて福は内
手を染めて本物好きのフキの皮
むつかしいご講義でした遷都論
居眠っていても冗談インプット

大阪市 神夏磯典子

日記帳今日の憎悪は今日捨てる
晩酌の話題はちばち過去のこと
癖のない豆腐真白い意地を持ち
化けるのが阿呆らしくなり古狸
還暦の蛇尾へしかと従いてゆく

岸和田市 古野ひで

夕茜明日への心満ちてくる
挫折感夕陽の赤に溶けてゆく
雨しとど別れを決めた涙かも
波の花海の情けの温もりか
どの人も褒めて涙の通夜の席

松江市

恒松 叮紅

ランドセル独り帰った鍵の音
マンションで鸚鵡も陥る失語症
手土産を無駄にして来たベルを押す
橋へ来て別れる話つらくなる
水ぎわでやつと落着く淡水化

松江市

柳 楽鶴丸

暖く迎えてくれた箸袋
今だったら毎日NG出してます
一番おいしい悪友と飲むお酒
女性ホルモンを仕舞風呂で吸収し
オールドと逢いたくなくなった嬉しい日

松江市

舟 木与根一

仕合わせは孫の寝言の中に居る
六十はこき使われる老人会
憎めないお方馬鹿とは言うてない
惚け初期か人情劇を苦手とす

十二月我が道を行く万歩計

米子市

石 垣花子

姑に似たみちを私も越えはじめ
句読点半端に打ったばかりに

ジャンケンで半端の半端まで分ける
糸電話母が相手の舌足らず
女には港出る日は知らせない

米子市

青 戸 田 鶴

小春日へきびしい明日をふと忘れ
捨てきれぬがらくたとまた年をとる
おせち作りまだまだ腕はおとろえぬ
いつかいつかと雑巾がけをした総理
ひき出しの一つは亡母のものばかり

米子市

田 中 亜 弥

針の穴明るい方へ向きたがり
新しい風を節分からもらう
無人駅のカラスに逢って聞き出そう
花の数かぞえて暮らす浄土なり
手を洗う罪の一つも消しながら

米子市

菅 井 とも子

断酒から年賀の客もへってゆく
単身赴任の重みを知った娘の涙
行先は絵筆に託し二人旅
それからは突風ごとに汽車を止め
柿喰えば亡母の笑顔とくにの家

米子市

寺 沢 みどり

方円の器に住んで眠くなる
実印を捺して結論ひとつ出す
割り出しへ晒す古墳も寒かろう
退屈なポストを石にせぬように

寄り添ってやがて旅立つ羽づくろい

米子市 政岡 日枝子

六世紀のシンフォニーに唯今酔ってます

果てにかならず答えがあると限らない

喜劇ごっこに息を合わせてくれている

バランスよく鬼も仏も家にいる

販売機敬語使わぬ子がふえる

米子市 沢田 千春

方向をかえて笑いの種拾う

裸木もあしたの話ためてたつ

土ふまず歩け歩けと鞭を打つ

お隣の藤づるいやにのびてくる

渡り終えやがて目に入る花の彩

大和高田市 岸本 豊平次

天皇の意識に昭和が消えてゆく

何もせずほっときなさいと助言され

旅に来て鳶の舞う空残ってた

故里に帰る言訳などいらぬ

手離すのを横目で待つてる特売場

姫路市 人見 翠 記

どの道も峰は重くて遠きかな

おトイレも私にとつては座禅の場

どんぴしゃり金の溜らぬ手相とは

同行は二人苦しみも悲しみも

子の家を渡り歩いて愚痴を撒き

高石市 浅野 房子

華やいで今宵グルメの客となる

考えの甘さ笑っているカラス

家裁から一つの意地を持ち帰る

フルコースよりも茶漬けが性に合い

女になった少女の毬は弾まない

大阪市 大塚 節子

親の子やと言われる親の心がけ

さよならを言うては話かえり咲き

遅い朝カフエオーレを熱い目に

今日だけは愚痴は禁止よクラス会

券売機邪慳な音で釣を出し

島根県 榊原 秀子

ユーモレスク朝の有線から流れ

小春日に肩かしている試歩の道

病いからとき放されて乾杯す

又々誤解されている話下手

薄氷解けて輝く眼に出合う

島根県 錦織 文子

枯枝に花を咲かせる灰が無い

抱いている子が時にこわいことを言う

仲のよい夫婦に見える汽車弁当

ボケ防止の講話が湧かす十二月

掘炬燵愚痴は聞かないことにする

和歌山市 堀端 三男

信号が変わり風向きまで変わり

ラッシュアワー美人の襟足鼻の先

逝くときのおしゃれは遺書に認める
交替のナースは母の顔で去に

町並保存明治が生きている故郷

和歌山市

牛尾 緑 良

柿熟れて帰らぬ人を待つごとく

一コマの写真になった故郷よ

煮込みうどん湯気も無言も温かい

コーヒートの香りを残す受験の灯

鍋底に愛を煮つめる主婦の腕

和歌山市

神平 狂 虎

霜枯れの心の隅に射す朝日

冬の塔男は息を乱せない

想いとや冬の峠を越える風

盃の底に届いた雪便り

一枚の枯葉となつて逢いにゆく

和歌山市

後藤 正 子

しまいこんだ胸の辺りで波の音

問わず語りに小さい疵が痛みます

真ん前で転んで笑わせようとす

行きあたりばったりでない北の窓

待っている心のような冬が好き

和歌山市

桜井 千 秀

齒軋りの音もまじつた愛の鞭

自己犠牲満足感と悲愴感

いい時間ばやつと空を見てすこす

甘酒で酔うただなんて言えますか

鼻っ柱ひとり歩きはせぬように

大阪市

吐田 公 一

あの人の話が好きな右の耳

息抜きのするさと嫁も少し持ち

はみ出しの一人にツアーの輪が乱れ

いらいらが解消できたサクラサク

野仏の綿帽子払うている野良着

大阪市

塩田 新一郎

琴線も逆鱗もあり女です

金持の国で貧しく生きてます

過去の無い文化が作る使い捨て

大正も又遠くなり天子病む

リボンまで付けて粗品と書いてある

大阪市

北 勝 美

喜寿祝年金くらしにさりげなく

リクルート疑惑へどくる巻く師走

地図広げ年金くらしの旅心

思い出をはさむ落葉がなる葉

反対へ我慢している父の自負

大阪市

黒田 真 砂

縁起よい巳年にかける夢多し

働ける俸せ厨の暮多忙

子にかけた夢を今度は孫にかけ

相席して心にぴんと来た出逢い

燃えるものあつて木枯し苦にならず

大阪市

古川 美津枝

カラオケに時の氏神イロハ順

被災地にいずこも同じ火事場泥

毒ぐもの巢で醜態は支配層

百万の肌着へのぞむ義捐金

似ているね小紋うなずく濃紫

科学より地震に勝った石作り

考えは似たか寄ったの具申案

やれるかも無口の本気おそれられ

栄養は有れど食べない好き嫌い

ゴキブリの餓死か凍死か風二月

若さにはついていけない万歩計

横車押すと手痛い付けがくる

人生の岐路で磁石が狂いだす

妻に來た手紙気になる齡でない

カルチャーへ老いの無聊を埋めに行く

出雲市

園山多賀子

千両の朱いささかの悔いもなく

若松に菊うめもどき娘が嫁ぐ

振り向けばわたしの影も瘦せている

壁に耳パントマイムが身について

逢う人を待つ間も微熱続いている

西宮市

西口 いわゑ

一瞬に火花を散らす同じ服

化粧室だけの客にも自動ドア

バッジ一つと男の首がつながれる

七五三やがて炎となる項

湖に沈む夕陽に招かれる

勧誘員目標出来ず手帳繰る

E E Eのサイズがほしい宿浴衣

チャボの餌雀が来ては多く食べ

兄弟でいて大阪弁と紀州弁

均等法に程遠い家庭馴れている

母の死へことさら寒い十二月

呆けボケと言われて呆けが急ピッチ

年金にたどり着くまでその日まで

プレスレットよりも輪ゴムの似合う妻

小鯛の骨エリートの喉を刺し

眠やかな女がまわす風車

大根が美味しい顔で煮えている

もう一度逢いたい人の名は言えず

塩昆布手造りの味父の味

吊し柿民話の里に雪が降る

寝屋川市

岸野 あやめ

已いさんの夢がお告げのよい知らせ

師走來て街の天狗はもう居ない

金箔酒胃の腑を荒らすほど飲めず

セーターなど買うて喧嘩にピリオドを

有田市

松井 かなめ

宇部市 平田 実男

羽野野市 田中 隆二

言にくいことも言わねばならぬ主婦

米子市 小村てい子

ダンデイが黒い割符に息をつめ

いい答出たのに鍵が動かない

都市砂漠あさきゆめみし懐手

フランス人形に花盗人は花持たす

ほほ笑んで優しさごっこ白髪ぬく

岸和田市 原 さよ子

顔合わすまでは強気でいた私

カタログを集めてワープロまだ買わず

孫と行くささんかの径童謡になる

忘年会続く夫の身を案じ

薬より針灸がよい齢になる

出雲市 吉岡 きみえ

遇然のチャンス神よありがと

均等を誇張してます肩パット

秋鯖の美味さにとろり酒の爛

地球上にたったひとり酒のわたしです

妥協せぬカラスはぐれた茜空

京都市 山本 規不風

年金が自動払いに押し切られ

人違いのまま夫婦茶碗を買わされる

無聊という空間にある重み

ラブホテル見学に来て泊る妻

金使いと寿命のバランス崩れ出す

奈良市 天正千梢

永遠の都ローマの名に恥じず

アルプスに酔い自分を忘れそう

恋のナポリ港は晴れ渡り

ライン河古城街道満喫し

ルーブル美術館ミロのビーナスに再会し(パリ)

迷った末北風強い道に出る (スイス)
倉敷市 野田 素身郎

信号待ち不安な運転手の欠伸

OA化されてペンだこ消える

後遺症再就職の夢を捨て

喧嘩には弱い空手部の主将

嬉しい日日記が二枚目まで続く

生きたら競争でなく分ち合い (イタリア)
倉吉市 奥谷 弘朗

何時からか見果てぬ夢に取りつかれ

研究は大河ドラマでしたと言う

建前と本音がいつか狂い出し

食欲の無い日も主婦の台所

お寺から法事をせよと年賀状 (西ドイツ)
島根県 小砂 白汀

視界ゼロ霧にむせてるさねかずら

茶毘に付す温め続けた恋ごころ

上げ底の上に棲んでる東京都

運だめしちよつとお嫁にゆきましょか

正月写真犬も撮られる顔をする

八尾市 宮崎 シマ子

美しい文字でおそおそ返事くる
ハンカチの白さ男のブライドか
子が巢立ち妻の地声が低うなり

豊中市

安藤 寿美子

いろいろとあつた昭和史読み初めに
日が落ちるような別れのあらまほし
一寸だけ濡れないですむ他人の傘
母の忌もすぎて今年も菊を焚く
トンネルを抜けるとどんな国かしら

羽咋市

三宅 ろ亭

地方史の一行にもならぬ存在感
ほどほどにしておけ株のつかみ分け
冬の日には墨汁こぼしたように暮れ
古本箱父への慕情こみあげる
縦書の数学の本伯父の本

鳥取県

羽津川 公乃

観念をした睨み鯛いい姿
過去を焚く煙は風に逆らわぬ
リモコンで踊る便利な世を憂い
心電図乱れカルテが秘密めく
偏食の娘が夢を食べている

姫路市

大原 葉香

食いしはる歯並みは上下総入歯
孫七人恵まれすぎた余生かも
何度でも教えてくれる辞書がある
後列に並んで面をとり替える

七十歳それがどうした之からだ

大阪府

坂口 公子

白壁の下地白とは限らない

白菊の白さが亡母を演じ切る

ぶきっちよで白いエプロンしか巻けぬ

ガード下の哀歌は知らぬ黄金の鯉

しんどいときにしんどいと言える倅せよ

熊本市

永田 俊子

煮豆がふきこぼれている女の幸せ

呵々大笑焦点ぼかしているつもり

休止符を知らぬあなたで近よれず

胃を切ってから婦唱夫随が倍加する

TPOに合わせた仮面を持っている

松原市

佐藤 藤子

山茶花のはらはらと散り更年期

おばさんもおばあさんも強かだ

美容院男に髪を洗わせる

天神様の道ピカピカの乗用車

絡まれて絡んで蛇と暮します

鳥取市

森田 熊生

古雑誌待合室の目でめくる

雪が降る降る思い出話する

風船を割ってやたらに腹が立ち

ふくらんだ風船明日を考えず

ストーブを点けるとみんな寄ってくる

鳥取県

新家 完司

湯豆腐とお酒とメモが置いてある
食べ過ぎてペンもわたしも眠くなる

綱渡り無事に終つて物足らず
つるばらの垣根の外は戦場だ

正直に生きてきれいな土になる

静岡市

渥美弧秀

フルムーン再度取止め妻老いぬ
友からの便り途絶えた二月の計

風邪に寝てFMを聴く生きる幸
老い忘れ詩と音楽にもえる今

十五夜に消えた兎の噂聞く

高槻市

河瀬芳子

読みあげない弔電を打ちさい義理
一幕ものの田舎芝居を金バッジ

株のうま味も怖さも知らず一市民
自己嫌悪媚びた笑いをしたわたし

宝石箱の中に落着かないメッキ

守口市

結城君子

小春日に祝福されてフルムーン
特急車都心はなれた柿の色

達筆の人にみやげの国産の和紙
みの虫の揺るるを見たり露天風呂

紅一点緋鯉もてる池の面

羽曳野市

榎本吐来

悪友がやさしくなつてくる痛み
マニキュアの指が遅し過ぎないか

飽食の大よたよたと吠えもせず
老婆へもう通さない横車

山茶花に捻子を巻かれて朝を出る

島根県

藤原鈴江

泣き面を拭ってくれる雪だるま
犯罪のお手伝いもする金バッジ

会うだけでときめくものをおぼる月
単細胞意外な人に愛される

昼の月どんな話で逃げようか

岸和田市

福浦勝晴

節ぶしの痛む寝床で風の音
青春のときめきわれにもあった過去

適量の酒をクスリと決めつけて
豪勢な昔もあった粗大ゴミ

誕生日单身赴任の缶ビール

玉野市

小谷仙山

考えて居ては吊橋渡れない
長電話あきれた妻も長電話

よし悪しの分からぬ猫が叱られる
これだけは胸におさめてねぎぎむ

幸せの一言で尽きる雑煮餅

和歌山県

寺田裕美

弁解の中から君は出られるか
笛の鳴る前に片足外に置く

少しだけ布団を寄せる記念日に
弁当を頂くまでの空元気

座布団を干すと野良猫来て座る

出雲市 園山良子

奥座敷別れ話を聞く椿

本当の自分になれるお針箱

腹の立つニュースは見えない菊仲間

叱られる事を知ってる膝小僧

朝寒に父権無くした懐手

高知県 赤川菊野

ニイハオが耳の底からはなれない

アドレスを互いに書いて旅を終え

一期一会黄土の中の兵馬俑

白寿まで添う約束だった鏡掛け

一億の中の一人が胸に住む

岸和田市 植山武助

神様の決めた事なら目をつぶる

掛売りはすまなさそうに取りに来る

誕生日もう目出度くもなし六十路

達者なだけでながく長く夫婦坂

昔から言う諺によく出合う

神戸市 山口美穂

宝くじ夢だけひとり歩き出し

明日のことわからないから笑ってる

紅梅の蕾の様子も書き送り

老いとし同じ道ゆく我ながら

冬に咲く花の気品をいとおしむ

西宮市 奥田みつ子

娘一家過疎地に移り住む(三句)

廃屋に住む生き方がまぶし過ぎ

ジーパンも作務衣もかこむ囲炉裏の火

娘には娘の家庭松飾り

車ばかり磨いてマナー置き去りに

項からいっきに羞恥かけのぼる

八尾市 鷲見章

朝市の特価にバスの時刻表

高校を卒業真近神楽巫女

ポケットの小銭を探る社会鍋

マネキンのルージュみな濃き春の宵

父の背母の膝とも慕洗う

奈良県 田中紀美代

女ゆえひそかに木枯らし好きな日も

事件簿の記録に哀しい愛がある

へり下る友にうっかり同意する

一年の計遊ぶ事から出来上がり

重箱に世代をつなぐ味を詰め

富田林市 田形美緒

十六羅漢父の笑顔の永源寺

商魂がズシリ朝刊重くなる

暗いニュース身につまされる十二月

海鳴りを虚しく聞いた捕鯨船

待ちぼうけ届かなかった果し状

岡山県 小林妻子

年玉の少なくなつたのは自粛

驚嘆の中に一こま瀬戸の橋
草枯れて春へ息吹いていく輪廻
いさぎよく枯れて春への身拵え
薬漬けぼつぼつ焼かねば治るまい

堺市 柿花 紀美女

車窓よりふる里に似た野焼見る
声動作亡父かと思う子の育ち
手ずれたる座右の辞書を秋灯下
ひとり居の戸惑いがある日向ぼこ
クラシック説明されて聞いている

松原市 北野 久子

夫の寝顔ちよつと突ついてみたくなる
満ち足りて帰れば夫の仏頂面
焼いもと嫁の心があたたかい
試着室から招く笑顔が高すぎる
聴えぬが一人で行ける医者もある

豊中市 辻川 慶子

ラッシュアワー吊皮持っているいくさ
褒められた日はよく回る風車
御堂筋黄色いじゅうたん敷き詰める
毛糸玉もう遊ばない猫の春
如月のアイラブユーを温める

鳥取県 土橋 螢

感謝をすれば足腰が動きだす
静中動の真ん中に俺がいる
空白を埋めて朝から雪模様

佗助の蕾と雪に耐えている
幸福にしあわせ重ね鏡餅

松原市 小池 しげお

エリートでないが孝行息子にて
泣きごとがまだまだあった毛糸玉
扁平足舶来履いたことがない
即席のしるこおいしい十二月
登山靴まだ釣書を見てくれず

倉吉市 野中 御前

屯堀の店にならんでいる蝮
蛇に似た女が月を浴びている
いつからか息子は嫁の肩をもつ
このオウム亡夫の台詞をまだしゃべる
割り箸よすぐにおまえはすてられる

箕面市 坪田 紅葉

お隣に遠慮の犬が又ほえる
氣にいらのワンピース着て誕生日
偉い人はわるい事が上手です
年寄りも一役留守居たのまれる
クリスマスディナーショーの券二枚

島根県 堀江 芳子

この夫とこの夫だからわがいのち
盲人の妻になりきる肝っ玉
聞きわけの無い日の夫よ孫に似て
手袋をはずして温めあう握手
幸福という字に見える差し向い

今治市 越智 一水

手枕へ果てない初春の夢を追う
寝るところに妻が寝ていて丸く生き
膝の上で女は夢を組み立てる
嘘を言う時に男は目をそらし

美祿市 安平次 弘道

白い地図抱き野心家のひとり言
自由化の波へ無力なむしろ旗
辻褄を合わせて神の目を怖れ
二番煎じが受けてピエロは墮落する

町田市 竹内 紫 鏗

観光旗スリも遍路に化けるとか
ガイド嬢孫をもつころまた回れ
記載例甲野乙郎氏は死なず
黒板へ新任教師サウスポー

守口市 羽原 静 歩

寿の一字に千の鈴が鳴る
神様が見ている陣取りゲームです
業なるか井上八千代今日も舞う
終着駅ピカソの顔で降りてくる

寝屋川市 宮尾 あいき

景気上昇のきざし残して龍が去り
朝がらす天皇陛下がふとよぎり
ばれたら辞職お偉い方のする事か
今年の愚痴ここまでにしとう存じます

松山市 谷 信 夫

一つ一つ石段数えて登りきり
読みたい本沢山あって目の弱り
病床で胡桃握っているひとり
カトレヤに花神にこにこして御座る

諫早市 原田メイシユン

パチンコ屋が時間と金まで奪いけり
馬肥ゆる秋に家計簿の赤字
渋滞へ鼻毛を抜いているゆとり
ひからびて切干大根味をだし

羽曳野市 佐野 白水

偉大なる師の胸像に励まされ
百年展孫弟子曾孫弟子の心意気
金光の信者へ天理教進めに來
割込みは老若問わず女性にて

神戸市 仲 どんたく

小春日の縁で夫婦は栗を剥く
老病の枷家事分担を思う頃
友一人足音遠く遠くなり
ハンドバッグのようにペットを携える

東大阪市 森 下 愛 論

初雪も邪険にされる程に降り
貧乏がなんだ肩張るくそまじめ
マスクして会議に参加してるだけ
組の音は主婦だと主張する

東大阪市 崎 山 美 子

勝つために少しずるい手思いつき
家計簿をたてに反対おしとおす
成人病ひとつずつ持ち共白髪
ふる里へUターンする共白髪

福岡県

横地雅風

東から東地元の史も知らず
疎かにするなと傘寿の風邪叱る
古寺に吊す掃除のほうき草
世の中に非凡は居ない子が校長

鳥取県

清水一保

回れ右して明日へ身構える
温い記事を探して今朝を読む
冬眠をしようかいやいや翔んでやる
中流の財布をのぞく松葉ガニ

鳥取県

森田布堂

鯛よりも鯛にあった栄養価
うれしい時も悲しい時も表情のないパンダ
農薬の汚染でモグラ移転する
亡母の夢目覚めるまでは生きている

鳥取県

松下たつみ

陽の当らぬところで幸せそうな苔
黒い噂に明るいポーズばかり選り
放牧の自由もやはり柵があり
美しい会釈心を置いて去き

鳥取県

林露杖

方寸の筥に耀うゼロの数

気がついてみたら泥舟漕いでいた
一役を退いて安堵と寂寥と
遠き地に果てし友の計星流る

鳥取県

さえきやえ

善人がいつかきつとにだまされる
母癒えて時計がやつと動き出す
みなちがう意見で井戸の水をくむ
流れのよわい処でオタマ生きている

鳥取県

江原とみお

約束を上手にやぶるお父さん
ラーメン屋タレの話はしたがらぬ
結びの神に事後承諾をしてもらう
ワンタツチ傘で未練のない別れ

鳥根県

梅みどり

ぼけ防止何んでもやってみる構え
過ぎし日を思い出させる返り咲き
独り居の心をぬすむ昼の月
あんま機へゆだねる疲れ気の疲れ

鳥根県

石田清泉

老妻の留守でお茶まで飲まずいる
役人のポータス高も聞き飽きる
鈴なりの柿も鴉に見放され
サングラス地獄の沙汰を待っている

鳥根県

松本文子

瓶の底に倅せ少しずつ貯まる
又ひとつ計報静かに墨を磨る

鳥根県

松本文子

スケジュール狂うたままに年迎え
旅のついでに西郷どんに逢うて来た

島根県 松本 はるみ

仕方なく風鎮自若とぶら下り

おもむろに切り出す程のことでない

禁断の実にしたりし虹の彩

耐えてますネックレスなどからませて

島根県 北川 民子

お互いに控目ですとは笑わせる

冗談の言える妹言えぬ姉

らつきよ漬思わぬ客が訪れる

枯芙蓉カラカラ鳴るは冬の音

岸和田市 清野 こう

ジーパンに着替えて新婚ハネムーン

アニメーション見れば孫より好きになり

遠足の孫に嬉しい星月夜

逃げる児を追うてもつれる老いの足

岸和田市 芳地 狸村

こんにやくをほうばり法話聞くお寺(禪定寺)

ヒマラヤに見たてた石があるお庭(田舎寺)

古傷が傷むいくさの懺悔録

ぼっくりと死ぬるくすりを探してる

和泉市 西岡 洛酔

イヤリング揺れる娘の恋心

幸せは日まわり草の職があり

寡婦の影ワイングラスに浮く孤独

漢方の土瓶に生きる俺の今日

和泉市 岡井 やすお

軽率と不徳が寄って国治め

パーテイも株も駄目なら何をやる

給料のほかに弁当がつく仕事

三十五迄と言うから人不足

唐津市 浜本 義美

繫がれし犬と戯る寒雀

底値つく冬のさなかに大根引く

地価上がるぶんだけビルが高くなり

写生子の画布カラフルに山眠る

唐津市 浜本 ちよ

女でない人としての身嗜なみ

身のかげり心のかげり詩もなし

古い二人着太れて見る村時雨

雑草も花をつければ花となる

唐津市 山口 高明

懐の具合で風が身に凍みる

ことさらに耀る両の手卓に置き

胃の腑までいって負け鶏だと知らせ

人垣を割って堂々時の人

姫路市 丁坪 サワ子

遠雷に株の話をきく年金

ジェラシーが私から女を捨てさせぬ

家庭円満男は聾棧敷がいい

日進月歩残されてゆく老いの脚

新内の系になじんだ勘所
太鼓判押された嫁に泣かされる
それからを本音で言わす聞き上手
控え目な仕草気になる隣の娘

姫路市 中塚遊峰

車椅子小雪も街の風も押せ
先輩の情けお早ようから貰う
人参を食べぬとお年玉やれぬ
ありがとう髪黒さに言つて梳く

弘前市 真喜内 實

手話続くスパイクタイヤの音の道
出稼ぎの父にコピートの通知表
偏差値の話はよそう木の実独楽
肅肅と乾盃して生ジュース

弘前市 斉藤 劾

雪しんしん人の心をあたためる
ああ雪よ今年も君とつきあうぞ
雪は詩人心の棘を消して呉れ
地吹雪の底から津軽三味が哭く

五所川原市 加藤 彩人

女性には拍手をしない女客
デュエットをする時だけの夫婦仲
水虫にやつと好かれた文化人
親善のつもりが遂に修羅と化し

黒石市 相馬 一花

敬礼の合間にもれる白い息
飲む友の電話がそろそろかかる頃
コスモスはかく文字通り咲き乱れ
鯽網の中は今夜の宿の膳

茨木市 井上森生

男三人たわいないかしましき
緋もうせんもてなし言葉京の春
黒門市場昼から電気ついでいる
西鶴のはなし聞いている鬼瓦

茨木市 堀 良江

押し入れの中から思い出出る師走
石庭でずっしり石にある心
宝くじの夢の長さよ十二月
その主へ夢を広げている古墳

和歌山市 垂井 千寿子

水仙の香り烈しきめまいかな
裁き待ち白いカクタス咲きつづけ
斬られ役上手になすお母さん
両の手にあまる幸せ数え唄

和歌山市 福井 桂香

鬼ごっこ宿の鼻緒を切つてくる
諸粥は負けた戦の夜で終り
病院の窓焼芋を待っている
客のない日の提灯に寒の風

和歌山市 玉井 豊太

古希過ぎて妻のリズムで踊る日々

静岡市 安本 晃 授

翔べないが泳ぎ上手な母がいる
雑音を上手に裁く父の耳
生返事認めたことにして平和

静岡市 永倉 僕 川

北京旅行(二句)

野次馬が多い北京は暇な人
北京秋天雲など見えず旅終る
古里の味噌汁匂ういい目覚め
妥協して女ほほえみ取り戻す

岡山東 荻野 鮫虎狼

春の海羽織袴で拝みたし
抵抗は無駄と判った蟹の爪
セックスに遠い女が髪を染め
やつと首回る鈍行の音がする

岡山東 二宗 吟 平

小犬まで眠ったふりでいてくれる
私には味方いっぱい五七五
有難い耳も聞こえる目も見える
戦死した弟が浮かぶ甥の肩

土佐市 中内 朱 坊

辞任劇どこまで続くリクルート
年金になって減らぬ酒の量
税金の無駄国会が又延びる
五線譜の悩みギターの指の傷

高知市 北川 竹 萌

味噌汁の熱いうちにと起こされる

錠剤を見せ合い共に医者帰り
呼び声に捨てたブランコ揺れ止まず
烏瓜赤くて祠さがし当て

大阪市 板東 倫 子

幼なきも老いも若きもサバイバル
恍惚が教育勅語空んじる
病院は八連隊のあつたとこ
飼主に似て飼犬もせわしない

大阪市 井上 白 峰

定退に妻が上げた守備範囲
喝采を錯覚してた長談義
行先を三面鏡が知っている
撒餌だけ食っているのも自由主義

大阪市 北山 悟 郎

煩惱が軌道修正をさせ続け
肩書が取れてから天の高さ知る
ルンペンが王者に勝る持つ自由
愚痴話洩らし過ぎるから嫌われる

八尾市 山下 美津 留

湯豆腐が待つてる方へ動きだす
菊作り手まめな方が勝名乗り
あまるべの岸洗うてる冬の波
文なしになると息子は帰省する

豊中市 上田 登志 実

年越してなおも咲いてるシクラメン
手袋を捜せば左ばかり出る

山寺で焚火にあたり話聞く
ペランダで鳥の囀り聞く平和

高槻市

竹内花代子

クレイン車の首振りも忙しい十二月
あの日から家計簿無縁になって老い
お好み焼いつも一緒の友がいる
仏さま辛抱してねとお粥責め

米子市

金山夕子

悪口がとても嫌いな松葉ガニ
冬近しポチのセーター編んでます
友達をとでも大事にするポスト
怖いから鸚鵡は鶴と話せない

米子市

川上より子

姑逝って庭の椿がひとつ咲く
七七忌母の鸚鵡を囲んでいる
バックミュージックが切り替らない第二幕
姑の喪があげて風車がまわり出す

出雲市

竹治ちかし

開運も幸運もまた金が好き
明日は晴れただそれだけの幸で寝る
算盤のすべりが悪い暮れの指
有休を取って女房と冷えてくる

河内長野市

井上喜醉

夜の雨つい誘われた女傘
冷や汗をかくのはおよし若くない
ほろ酔いが子供相手に人の道

目ざわりな教養が派手な身のこなし

寝屋川市

堀江光子

甘口のワインに潜むはかりごと
落葉焚く背に落葉を受けながら
花やぎもどこか静かな菊の庭
虫籠に入れられてから虫鳴かず

藤井寺市

福元みのる

旅先の土産梅田でみな揃う
巨悪もう眠ったままで年を越し
はしがきとあとがき読んでから決める
息抜きのバーで部長とまた出合う

富田林市

片岡智恵子

仕合せになろうと言っただまし舟
おもちゃ売場知らぬ子に手をつながれる
笑い茸入れて忘年会の鍋
ひと皿のおでんで和む不発弾

羽曳野市

吉川寿美

都市砂漠新春には春の風の彩
紅椿大人になった娘の帽子
逆転へ見せる男の多面性
父の背を何時か越えたい竹とんぼ

倉吉市

渡辺菩句

彼女よりも蛇が動転して逃げた
何してもひとりは無言劇である
裏通り裏通り風流韻事
銀杏の実が降る地球の音がする

根回して固め余裕のある贅否
東京都 吉川 一郎

飲み過ぎる今夜の酒は自己嫌悪
ゆらゆらと気球が泳ぐ秋日和
さざ波に朝が輝く伝馬船

境港市 細木 歳 栄

埋れ火はそつと埋めて置くつもり
面白くない日は外孫抱きに行く

今日もまた事件はセンセイ警察官
煌々と照つても月は温めてくれぬ

尼崎市 奥山 美智子

りんと咲く花に自惚れなどはない
乗れそうもないが幸せ切符買う

計算の下手な男にある度胸
いつまでも野心はすてぬ豆のつる

吹田市 栗谷 春 子

この辺で会うた思い出心齋橋
気ごろの知れたどうして法善寺

又いまのどこの誰かと会いそう
うそつきの鏡を今日は信じよう

大田市 藤田 軒太楼

一応は家長の顔をたてて呉れ
年寄りの呆気だと知らざる忘れ癖

世直しへ自然の豊さまくしたて
加賀市 細呂木 魯 木

観光の美名の裏にある汚濁

更年期女盛りの影想う
赤ん坊の寝顔で知った仏さま
七尾市 松高 秀 峰

兎小屋に住んで外車を乗り回す
粗衣粗食喜寿を迎えた老夫婦
いい歳をしてと軽くあしらわれ
岡山市 井上 柳五郎

ブレーキをほどよく効かす低い腰
腕組みをほどくと手持ち無沙汰なる
ちっぽけな野心へ生きる髪を染め
和歌山市 山川 克 子

気の弱い鬼で仏に憧れる
人間の弱さお金に計られる
疑えばそれなり目付きまで変わる
出雲市 石倉 芙佐子

六十の後姿がふと佝びし
背を向けて眠るこれも又人生
雪の宿帰したくない人ひとり
西宮市 瀬尾 六郎太

サラブレッド血はあらそえぬ肉躍る
等しくに与え賜わる時大事
年とれど心の艶は失せまいぞ
倉吉市 淡路 ゆり子

ライバルにチャンスを譲る度量を持ち
愚痴などは言わぬと決めた朝の愚痴
檜山の日暮れはきつと美しい

鳥取県 乾 喜与志

耳元に燃ゆる誘いのあつい息
恐縮と云うて恐縮しない顔

ふる里の土に躍っている生命
沢庵をかじつてみたい齒の寝言
柏手の意味知つてるか針供養

大阪府 町田 達子

大阪府 宮下 とし

新鮮が見たく食べたたく旅に出る
発車まで二時間も待つ祖母の旅

北風が喪中便りを持ってくる
つかの間の青春拾う古書の町
噴水の虹が包んでいる平和

大阪府 渡部 さと美

高層ビル寺は平然元のまま

空輸した花にその座をゆずるバラ
猫するり走つて闇の深き増す
冬の章影が走つた雪おんな

和歌山県 山田 高夫

米子市 白根 ふみ

北風を吹き込ませない母の意地
スランプの人と人間づきあいす

自転する地球に人の浮き沈み
業を負う女にも似て冬の蝶
一生の不作同士のめし茶碗

唐津市 筒井 朴竜

おうむには愉快な話きかせておく

大臣も揺らぐコスモス株分ち
汗の手間枝折る蜜柑に酬われず
里帰り土産に手折る枝みかん

米子市 光井 玲子

貝塚市 行天 千代

年寄りもじつとして居れぬ十二月
新札も替えお年玉の用意出来

ひび割れた壺のつぶやき聞いている
橋渡り切つても答出てこない
善人の椅子には寒い風が吹く

鳥取県 津村 八重子

日めくりが少なくて少なくなりました

ころんだ児おこしてわつと泣きだされ
自己主張まげず梓からはずされる
愛の矢を父は一言だけはなつ

豊中市 一瀬 福一

箕面市 椎江 清芳

開運の暦相性見る親娘
バスタオル胸を隠して電話口

守口市 森川 まさお

パチンコの隣に老舗見付けだし
無人売場ひょうたん仕方なく揺れる
木造の宿フルムーンにお世話する

抜群の美人不思議とまだ嫁かず

くず箆に娘の初恋捨ててある

鳥取県 津村 八重子

豊中市 一瀬 福一

くず箆に娘の初恋捨ててある

鳥取県 津村 八重子

鳥取県 津村 八重子

くず箆に娘の初恋捨ててある

鳥取県 津村 八重子

鳥取県 津村 八重子

くず箆に娘の初恋捨ててある

鳥取県 津村 八重子

鳥取県 津村 八重子

奈良市 宮川 古都路

木簡が歴史を変える筆の跡

筆の先メスより恐い記事がある

君と逢い君と別れた土手やなぎ

岡山県 岩道 博友

持ち駒はまだあつたはず辞任劇

金銭が絡んで土産を持ち帰り

故里の詩へ補聴器かけて聞く

河内長野市 植村 喜代

休職の夫へ一日の長いこと

降るでなし晴れるでなしの冬の顔

母の電話喋るだけ喋らせてあげ

広島県 藤解 静風

片方の耳だけ聞いている返事

晩学の夫婦は辞書を別に持ち

雑魚哀し比べる癖がまだぬけず

竹原市 信本 博子

異常なしされど薬は飲めと言う

親だから愚痴も言えます泣かれます

つくほどに過去に戻った紙風船

大阪市 松尾 柳右子

本当の忘年会になる熟女

カシミヤの靴下に合う靴探す

一泊の朝まず電話から子を起す

弘前市 小寺 花峯

学校の帰りは妻も遅くなる
咲くことを知らない花に口を寄せ

鳥取県 田村 きみ子

引越しへ少女鳥かご忘れない

妥協せぬ鎖でいつも二人連れ

ポチの鎖はわたし好みの色にする

岡山県 山本 玉恵

逢いに来て別れの指がはなれない

悔いなどはなかったおいしい夕御飯

裏口をあけると温い風になる

富田林市 新開 千代女

鼻歌が聞える今日はいいい天気

庭手入ドラマの時間走り込む

背かかっていると知らず送り出す

倉敷市 田辺 灸六

恩師からもらう情で背が伸びる

継ぐ役目見事果した竹の釘

独立独歩風が後押ししてくれる

鳥取県 土橋 はるお

二十一世紀の地鳴りが日々近くなる

後指さされる傘を傾ける

駅長と最終列車待っている

姫路市 都里 遊光

病んで寝て涙もろさにふと気付き

妬心よし生きる励みの糧ならば

嫁の聞くお経へやさしい姑の顔

新幹線の話は早い話でない

竹原市

岩本笑子

売れ残りの魚は切り身という運命

あこがれが大阪駅で保護される

高知市 小澤幸泉

狩人の胸におまもり札がある

師の未だ若きなりけり手をたたく

鳥取県 谷口次男

知りすぎたことをくやんではならぬ

娘三歳父が大好き母もスキ

鳥取県 谷口次男

静岡県

園田文子

旅の足一日伸ばす一揆の碑

キレイですグラビア飾る人の妻

出雲市 久谷まこと

年の瀬は夏から判って居たものを

霜やけの手に握られた横断旗

御詠歌の列も乱さぬ粉雪舞う

注ぎ口が欠けた急須で茶をすすめ

楽しさが胸一杯の回り道

風強し隣の留守に耳を立て

おいしさの幸せというかもなれば

一呼吸置けばはつきり見える的

散り急ぐティーンエージャーにも主張

ポイントセチア部屋いっぱいの花言葉

気の利いたママは相槌だけを打つ

過去帳に父の死亡を書く輪廻

川西市

池田半仙

軒下に干草魚があり島の宿

中国の旅青春に逢いにゆく

転落の歩幅故郷遠くなる

お粗末な親を見て来た粗末な子

自然をば愛でて老い

有刺鉄線泡立草の保護をする

北風を防ぐ隣に家が建ち

筆持てば子に負けて

岡山市

茂見よ志子

温もりを分け合い夫婦円く生き

家相など聞かされてから気の病い

子育てに亡母の軌跡が見え隠れ

姑をじらす小言の不発弾

病根を拝み屋先祖へ結びつけ

大阪市

花田たけ志

大阪府 直原七面山

病根を拝み屋先祖へ結びつけ

大阪府 兼治郎

自選集

山内静水

悪口を聞いてしまった社のトイレ
買い過ぎた年賀ハガキで出すクイズ

有働芳仙

天気晴朗日の丸に風がある
透けるよな空に未来図描いてみる
初詣二十の時の着物着て
元旦の顔確かめる初鏡
他人でないにふれたら私も

米澤暁明

十二月活字へ少し遠ざかる
大王の鏡へ嘘はつけなんだ
通り雨ですよと失恋慰める
お色直し食べ残されし握り飯
童女の瞳男は恋を打ち明けず

大矢十郎

久々に引きしまるもの冬の月
汚職辞職初心忘れたリクルート
ぶらんこの揺れも春風らしいゆれ
リクルートどこまで続くぬかるみぞ
久しぶり静か故郷の三ヶ日

黒川紫香

陛下病み給う昭和を引きずって
お医者さんにかかりなさいと医者言う
罪つくる札を握った投票所
集金のただ貰うごとかしこまり
十二月八日を知らぬそれも良し

金井文秋

出雲そばぬくい話を聞きながら
寒の道わたしの歩く音がする
いいことがあって二ヶ月の風を切る

皺は嫌いと両替機が返し

痛い足歩けあるけで追っ払う
脆くなった足に発破をかけてやる
晩年の道連れ趣味と健康と
ポルノ誌も読んで若さを維持しよう

工藤甲吉

前代未聞幾つかあつて年暮れる
世の中を厭うが如く出る欠伸
血糖値グルメ志向を叱られる
猿回しの猿とは知らず駆け回り

深悼・川村好郎氏

秋雨の降る日追悼号とどく

小出智子

紅白も観ず元日になっている
夫とは喧嘩をしないように生き
お金に頭を下けているのを見てからは
草臥れて浦島太郎の夢をみる
六十三年今年最後の句を書いて

小林由多香

お歳暮が届いたわけを考える
二兎追うて苦しみふたつ背負いこむ
捨てぬのが美德菌のない母の櫛
どん底できれいな心見てもらう

自販機に値上げの額を教えこむ

児島与呂志

大阪でやっぱりうまいきつね食う
立飲みで沈黙出来る場所見付け
もうとうに妥協したまま疎遠なり
おばはんはやっぱり近所で当てにされ
計算の出来ない男でお人好し

月原宵明

ポケットへ両手入れている不満
自販機の朝を素顔の女駈け
火消壺涙で消した跡がある
風の街屋台でさつき逢った人
公園のベンチで貧乏ゆすりする

野村太茂津

秋味ドサリはるばる紀州へ泳ぎつく
雪籠り今最中か春を恋う
見送りの車窓を追うた影がない
本音ズバリと冬の無言と饒舌と
寒々と身を引き締めて隙見せぬ

藤井明朗

感謝のくらしへ守護霊を信じとく
くじ運の弱い夫婦の宝くじ

人間と同居ペット薄命かも知れぬ
泰山鳴動してリクルート先細る
国民の知恵と工夫も消費税

藤村 女

一本の糸が命の奴風

急変に身内の涙すぐに出ず

おみくじが大吉と出て宝くじ買う

思い出が揺れる土橋に積る雪

写経一卷果し静かに筆洗う

本田恵二朗

臨時休診仲人席に座らされ

生きる道照る日曇る日あつて佳し

腥い疵痕 心の隅で枯れ

せい一杯咲いたが寒波に噛みつかれ

空缶のポイ捨て国辱ものである

正本水客

散りしいた紅葉ふむまいとして友を待つ

安らぎの時間を枯木待っている

木守柿 空の遠さを見せている

冬木の向うにもう冬はいない

ちんまりと冬芽は雪を待っている

水粉千翁

ひとり居へ語り尽くせぬ目玉焼き
靴ちびて結び直せる日々があり
ご破算でお願いします生きざまよ
待つことの久しく熱燭さんになり
水茎に語る佳人になりすまし

八木千代

山茶花を咲かせて秋もいとまごい

秋の鏡に雲は流れてそれつきり

童話などいかが無口な鏡さん

くちびるにほほえみ癖をおしえよう
大事に結ぶひとつおぼえの蝶結び

阿萬萬的

たかが正月 詩人むつり懐手

十二月母のお味の落し蓋

仏縁とか申してお寺の寄付が来た

十二月猫に余裕の日なたほこ

古代ブームかぎろいを見る会もあり

橘高薫風

去年今年仕事疲れや旅疲れ

紫の色には所詮位負け

老司祭黒にも無垢の衣あり

坂本仙吉郎さんを祝し

行く雲と今も続ける「ふたり旅」

川柳の群像

高橋月南

東野大八

昭和のはじめ頃の大陸川柳界は、植民地大連を中心に、満州各地から華北の北京、天津を加え、二百誌からの柳誌で賑っていた。

この大陸川柳界の重鎮三羽鳥は、高橋月南・大島壽明・石原青竜刀であった。この三羽鳥は、いずれもその立場・肩書をフルに活用し、身銭を切って内地から陸統とくり込んでくる各有力柳誌のリーダー達を親身になって箸の上げ下ろしまで世話をした。その面倒見を堪能した柳人は数多いが、主なる著名人は麻生路郎・前田雀郎・楳元紋太・川上三太郎・井上剣花坊らがいる。

まず水府だが、昭和三十八年春のこと。大阪千日前の北極星で、月南・正夫・木丹・青竜刀・大八ら大陸川柳人数人が集まり、大陸

同窓会結成を話合った折、水府も齋藤清幸を同伴して「大陸旅行で世話になったので」と特別参加した。その雑談の中で、月南がこんな話を何気なくした。

「昭和四年八月だったか、貴方が大連に来られたとき、旅費がないといわれるので百円也を用立てたままです。覚えておいでか」

水府はぎくりと顔を固くしたが、何も答えなかった。あとの別席での月南の話によると、福助たびの販売促進会議かで朝鮮の京城まで出張し、社用も済み大連まで足をのぼしたが旅費がなくなり、大連埠頭事務所にいる月南に相談した。「何分、当時の百円は大金、あとの金策に弱りましたよ」と月南は、持前の村夫子然たる顔付で苦笑していた。

次は雀郎。大東亜省派遣で作家と詩人の三人づれて満州開拓団の視察慰問に出てきたが、三人分の旅費を持った雀郎がスリに有り金全部をスラれてしまった。昭和十七年のこととて相談をうけたのが新京の壽明と正夫。苦力に払う金を回して与え、帰りは大連からにして月南へおはちが回った。

次は紋太。大連から新京まで超特急アジアの展望車。食事は白系ロシア娘が食堂からうやうやしく運ぶのだが、連京線の豪華列車のこの旅も実は無賃不正乗車。これも大連の月南や満鉄系柳人がよつてたかつての工作で、紋太ご本人は全くご承知なかった。

三番手の話は路郎。満州土建協会理事長の肩書をもつ壽明が、これを使いなさいと満鉄優待乗車券の一等バスを送り届けたのはいいが、安東の税関と警備隊につかまった。職業は著述業、しかも姓は麻生、無産派の闘士麻生久とまぎらわしい。加えてバスの記名人は壽明の実名大島太平。安東駅長室で一日がかりで調べられたが、壽明が軍と満鉄を馳けまわつてやつと無罪放免。帰途は船便なら大連埠頭事務所のある月南の担当。壽明から月南へいち早く手配が回った。

最後に三太郎だが、これは満鉄副参事の青

竜刀が担当。つききりて満州の主要都市を回って回ったものだが、「よく飲み、よく遊んだので、足を出すどころか首までなくなるほどだった」と青竜刀のボヤクこと。これも拳句の果ては大連埠頭の月南へと申し送り。

このほか剣花坊にしても、信子夫人まで抱き合わせて大連の川柳人はキリキリ舞いさせられた。戦後の話だが、月南はこう語る。

「六大家や剣師御夫妻までノホホンと来満し、接待はよろしく頼むといった顔で、自分の吟社の版図拡大につとめ、あとはよろしくハイ左様ならには参ったよ」

川柳人と肩書がつけばピンからキリまで、在満柳人連をあてにしてくるぶらり観光旅行の無責任な連中には、筆者も大いに手を焼いて、終いには適当に逃げに回ったものである。

月南は、本名高橋多佳次。明治20年1月山形県生れ。明治43年渡満。満州日日新聞記者を約十年つとめ、大連海務協会事務局長で、渡満から終戦まで終始大連から動かなかった。大連は大陸の玄関口、しかも大連埠頭事務所在勤。本職より来満川柳人の接待にあけくれたのも成り行きであるが、温厚篤実そのもののこの人の限りなき川柳愛による。

アカシアの大連として植民地ムードに溢れ

たこの地に、明治43年いち早く大連川柳会が生れ、川柳樂楽雑誌『漣』を発行。大正4年には『紅柳』と改題したが、二年後休刊。同年には瀋明の『娘々廟』が発刊されたのを機に、群雄割拠するかのようになり、『碎水船』『太子』『大連富士』『黄海』『戎克』『満州』等が大正期から昭和の初めにかけて続々と刊行された。

大連柳壇の大きな特質の一つは、各柳誌リダーの転勤転職移動によって常に盛衰をくり返したことだ。この中であって、大正12年4月に発刊した『白頭豕』はA5判20頁ながら本格的柳誌の貴格を備え、柳壇成長期の満州柳壇の代表誌と目された。この創立同人15名の筆頭にしたのが月南である。

大正15年8月に剣花坊が大谷五花村と満鮮の旅で来遊したのを機に、大連川柳会は、東亜川柳大会を催した。これには全滿各地に華北京津地区からも柳人が馳せ寄り、百人近い盛況をみたものの、これを機に瀋明、佐々木三福、井上葉吉（剣花坊の子）が、革新川柳派の赤黎会を組織したため、中沼若蛙、小林茗八、月南らの伝統派は句帳会を作りこれに対立、『白頭豕』は二つに分裂した。このため同誌は、葉吉、三福、柳陽の古参同人若蛙の

同人除名をもち出したので、ついに31号をもって終刊した。

「新興川柳の史的歩みを叙して白頭豕に望む（木村半文銭）」「月南君の態度を難ず（井上麟二）葉吉改号」の二論文が廃刊の導火線となったわけだが、このごたごたの最中、岸本水府が登場（昭4）『大連番傘』が伝統派にくさびを打ちこむ導因を作った。

かくて若蛙、青竜刀の非詩川柳派の『青泥』が生れたのを筆頭に、再び群小柳誌が一斉に蜂起したのである。

「私は満州柳壇を形成する人々には心底から愛し育成する事を考えた。もとより革新川柳派も。然し反戦問題を起した『川柳人』事件には衝撃をうけ、川柳は滅亡するのではないかと思つた。だが私はこの川柳の灯を大陸で消してはならないと懸命に頑張つた」

この月南の決意によって彼が出した『川柳大陸』は終戦前夜まで頑張っていた。

終戦引揚げ後、神戸老人連合会長を勤め、昭和55年2月13日、老衰で死去。享年九三。寿山多宝信士。句碑三基が大連川柳人の手で作られた。大連柳壇の文字通りの重鎮だった。

★次回は「片山雲雀」

誹風柳多留廿六篇研究

(三十九丁)

石田成佳・大屋六郎・八木敬一

鈴木 黄・石田晋一・南 得二

小野真孝・本多正範・多田 光

故岡田 甫

674 名代ハ禿にすこし毛がはへる

石田成 名代は、女郎が病氣の時、馴染客がかち合ったとき、あるいは余り気の進まない常連の客が来た場合に、自分の代りに妹女郎を出すことをいい、毛が生えるはやや年功を経たもの、ややまさったものたえをあらわし、句はおいらんの給仕役で十二、三歳位の少女である禿より名実共に少々毛の生えた新造をよんだもの。

振り新ハ禿に三本毛が多し

五八四〇

多田 贊。

675 義理に禪をはつすハ三会目

石田成 諺言「義理と禪がかされぬ」「義理と禪がかねばならぬ」による、いわゆる傾城買三会目の句。

初会と裏ではまだ遊女は他人行儀で飲食せしめず、三会目になって客もその禪をやつとはずすことが出来ることになり、互いにあたためられつあたためつという次第と相なる。ぎりぎりふんどしはづさせるおもしろさ

天七・八・一五

大屋 「ふんどし」は、男の禪だけでなく、女子の腰巻をいう。本句の場合は、女郎の腰巻でしょう。三会目となれば、義理にも腰巻をはずすという事。

よふくと中結びをとく三会目 安八梅?

多田 大屋説に賛。

676 腰よりハおれが立ぬと下女か宿

石田成 下女が暴行をうけ腰抜状態となり、やつとのことで身元保証人である請宿へ泣きついて行った結果、おかみが下女の醜態に対して、その様な始末ではこの俺の顔が立たないとい叱っているところか、あるいは加害者に抗議している状態でしょうか。

大屋 「腰がたつ」面目がたつ、意地がたつ。

「お前さんは面目ないといわっしやるが、このワシはどうなると思いなさる?人請宿として、ワシの立つ瀬がねえ」というところか。八木 大体同じようなことであるが、ちよつ

と違ふ部分もある。下女が輪姦の被害にあい請宿へ行つて「このようなわけで腰が立たない」と訴える。請宿の主は「お前の腰も立つまいが、そんなことをされてはこの俺の顔も立たねえ」といきまいてる。

「腰が立たぬ」は腰が抜けたの意であらう。
多田〓八木氏解贊。

672 桐の木を切ら頃娘すいか明キ

石田成〓「桐の木」は既出。桐の木が成長し娘も年頃になると、大事なところの穴があくことを木とすいの縁語仕立てよんだ句。

南〓「すいが明く」は、肉体的に結婚条件備わるを指すか。

小野〓一人前の身体になった、それだけのことでしよう。

多田〓同。

673 句を疵にして店賃が百安し

石田成〓長屋を借りる段になつて、部屋が総後架に近くその匂い故、他の部屋より家賃が大幅に安い、交渉の上でそのことを理由に店賃を値切つて契約成立といったところ。

百やすで首をくくつた店へこし 二二四
大屋〓贊。

夏の月蚊を疵にして五百両 其角

の句を踏んでの作。蚊を句にかえ、夏の月を裏長屋に振りかえてある。

八木〓前贊。其角の句のきかせがあることは動かない。

多田〓贊。

674 豆はまめだか下女のみめハ納豆

石田成〓淫奔とされている下女の陰部を豆の並列により、その湿润さと粘着性を納豆に見立てたバレ句。

納豆を叩て呉れと好きな下女 一六七

多田〓贊。

675 秋一ハ天上はれた御出合

石田成〓旧曆七月七日の夜、七夕祭、天の川をかささぎの橋によつて渡る牽牛、織女の二星が秋一回の逢瀬を楽しむ出合は天下晴れるのことであり、天空もそれにふさわしく晴れ渡つていてこそ子女の願いをも叶えてくれるといったところ。

秋ウ一ツの出合牽牛織女なり 一一一

秋ウ一ツの真先がけは天の川 四六三

多田〓贊。

次号から「四十丁」を掲載いたします

第38回

西大寺会陽川柳大会

とき 2月26日(日)午前9時開場

11時兼題ノ切

ところ 西大寺向州西大寺市民会館

(観音寺北隣)

兼題と選者

「命」 延永 忠美選

「眠る」 安藤まさ代選

「巢」 水粉 千翁選

「影」 八木 千代選

「そろそろ」 片山 巷雨選

「爪」 西川けんじ選

席題 2題 当日発表

特別席題 1題 同 各題2句吐

会費 一五〇〇円(発表誌・記念品)

投句 五〇〇円、2月23日までに岡山

市西大寺中2-7-8

宮川陽仙宛

主催 西大寺川柳社

後援 岡山県・市教育委員会ほか

水煙抄

黒川紫香選

浜田市 中尾 まゆみ

理屈では歩めぬと知る二十歳です
適わない想いを抱いてマーメイド

約束の小指に迷い絡みつき

臍の緒を辿れば母の海がある

ああ青春 視野いっぱい虹が起つ

尼崎市 児玉歌子

再会の男を許す通り雨

もう避けて通れぬ風と向い合う

責任の取れぬ荷物が眠らせぬ

身勝手な罪を責めてる水子像

口にした意図が半分見えて来る

今治市 野村京子

お別れはシグナルのない回り道

二者択一光らぬ方を選んで見る

ストーリーはいつも女が主役です

これ言えば嫌われるかも知れぬ愛

樹海からきれいな蝶になつてとぶ

八尾市 高杉千歩

笛吹けばわるいやつまで蘇る

飽食の街赤い鬼青い鬼

水に流そう平気で言えるのは男

老斑の手から生れた紙人形

町が榮えて表通りが歩けない

熊本県 大川幸子

次の世も添うかともなげに夫

今日よりも明日幸せが満ちている

余るなど絶対言わぬ家計簿だ

マネキンの服が似合うと思つてる

待たされる側に變つた風の向き

名古屋市 藤井高子

遠き訃へひそと土鈴は音を放つ

抽斗にアイ・ラブ・ユーとある化石

春になつたら赤やピンクの詩も書ここう

沈黙考 男はマグマためている

猫の手つきで顔を洗うている老後

広島市 流 奈美子

桜茶へ老母少しだけ粧いぬ
ここからの謎解きはせぬ夫婦橋
霊泉に愛のコインを浸らせる
すぐ転ぶ足から冬の詩を聞く
神様の掌の中にある明日の地図

西宮市 秋 元 てる

ふんぎりをつけた眼に青い空
この頃は苦味の味も判りかけ
以下同文でもいい孫の晴舞台
鬼ごっここの鬼の首筋から暮れる
いやいやと風に首振るねこじやし

富山市 舟 渡 杏花

沈黙の家紋流れに逆わず
ひとときを王侯となるひのき風呂
筋書きのない日の足が棒になる
おしくらまんじゅうはみ出る尻尾二つ三つ
破れ傘の骨だけ遺した父でした

高槻市 笠 嶋 恵美子

神様の掌よりこぼれる愛を受く(初孫誕生)
恥じらいの仕事少女に隙が無い
ふんばってみても枯れ木のふくらはぎ
嬰兒の握りこぶしが天を突く
つるし柿母への便り長々と

富田林市 池 森 子

一言の重さで滝を落ちてゆく

コタツの温度^強にして人を恋う

本格派ではないがあなたがいてワイン
駄菓子屋で温もりを買うハイヒール
大きな息子 父の布団をいつも敷く

鳥取県 小 谷 美 っ 千

燃え尽きてゆつくり夕陽落ちるだけ
卒業したら真っ赤な服きて恋しよう
二ん月の雪にマフラー巻きなおす
喪が明けぬままに賀状がやってくる
雪解けてポタリと落ちた春の音

堺市 桜 沢 あかり

笑わない人形電池が切れている
不謹慎な笑いを溜めている木魚
B面の唄が静かに売れている
アイドルの古い写真が笑ってる
黄門さんのビデオ見ている旅帰り

熊本市 宇 野 昭 代

大筆小筆金釘流が持て余す
多数派に賛成をして肩が凝り
洗濯がすんだとブザーが呼んでいる
旧式のストーブ豆がよく煮える
夕食の仕度忘れて読み耽る

島根県 加 本 義 良

矢印の罫を承知のプログラム
ライバルを先に行かせる日のゆとり
得点にならぬ余生の安堵感

山の夢詰めて眠っているリュック
一ランク下げ安全策をとる余生

長岡京市 木本如洲

月桂樹確かに飢える森がある
駅前ポストは遠い旅をする
働いて暮しても駄馬である
罌雲火見櫓を追いかける

都落ち妥協にうとい父の椅子

静岡市 沢田きん

六感が早回りして狂い出す
切手にも役目があつて翔んで行く
ささえられ僅かな知恵で生きている
何もかも終わって深い息をする
目をつむることも一つの生きる道

徳島市 宮武まつ女

病室の窓へ斜めに匂うバラ
腹黒い殺し文句が往き来する
ぜいたくな友が吐息を捨てに来る
逢うときは昨日と違う貌になる
手も足も傷つきやすい樹に登る

兵庫県 森脇和子

弱点を握られ仮面修理する
合鍵を渡して肩を軽うする
焼芋を供えて仏を笑わせる
甘党が来て話し込む姑の部屋
衣食住足りて内孫欲しくなる

一筆が生きる名刺の紹介状
式終えて広い世間にほり出され

吹田市 井上照子

朝市の老婆の瞳が澄んでいる
父の夢何かの予告かも知れぬ
好きですと言われた夢のあとを追う

静岡市 久保きぬ

子供より弱気な母が鈴を振る
豊かさが物の命を軽く見る
うっかりと口すべらして知る不覚
再職に名刺のいらぬ役につき
祝福の余韻二人に発車ベル

久留米市 鶴久百万両

火まつりを見たくて風の子になろう
自分史の巻尾に微熱まだ残る
春の絵のどこかに亡父が亡母がいる
目を洗って父の偉大さ解けてくる
鬱の日は比叡を縦走してみたし

近江草津市 久保和友

猫のシャルルがダイエットする日向ぼこ
ブティックが出来て村にもある都会
峠はトンネル廃道は草のなか
首のない地藏の雪も怨霊か
木守柿眺めて夫婦共白髪

静岡市 片平静代

味噌汁の味へ新妻苦戦する

留守居番夜風の音に起こされる

普段着て御平癒祈る初詣

童唄聞いて素直に眠る森

外孫も帰りばあちやんくたびれる

大阪市 上田柳影

依怙地とも思うが裏が見えるから

振り向かぬ訳は未練が断てぬから

無神論やっぱり最後手を合わせ

味しめてから銘柄に買い替える

旭川市 朝倉大柏

気心がしみじみわかる無駄話

赤信号幾度も越えて来た自信

八起きするチャンスへ矢尻ひとり研ぐ

灯を消すと振子の音が責めて来る

出雲市 金村青湖

プライドも見栄も入れてく募金箱

鐘一つ一つに今年去ってゆく

まだせびる子だが帰省の初春を待つ

初春や初春健康ばかり妻が言う

藤井寺市 高田美代子

意地悪をされても秋は人恋し

花束のバラに刺された日の油断

エプロンが少し疲れて小正月

雪月花今年もやっぱり飲むだろう

和歌山市 森 茜

シクラメン愛でて冬の陽あたたかい

ひとすじに思いつづけてぼたん雪
愛されているのか心配してくれる
淡々となろうなろうとペダル踏む

鳥取市 萩原美雪

片袖を通して亡母の香にふれる

世渡りが下手で無冠のまま老いる

人が皆信じられない日の孤独

まだ際で辞める潮時考える

佐賀市 江口万亀子

さようなら曲り角からまたお辞儀

水仙は袴もはいて行儀よく

旅に出て色即是空の文字を見た

海の旅船尾の方から陽が沈む

京都市 木村たけし

秋日和借金もなし友もなし

秋刀魚焼くけむりと生きる凡夫婦

都会にもこんな夜がある虫が鳴く

逃げてゆく男と走る雨模様

兵庫県 奥野テール

窓いっぱい開けて朝日をほしいまま

宅配を解けばこぼれる里の秋

一人居の淋しさもよし詩の道

意地悪な風が箒目消しに来る

尼崎市 明壁敏之

傷ついた心を包む母の胸

人なれた鳩が道をゆずらない

貧乏神呼びもしないに這ってくる
新風を入れるがやがて同化する

岡山県 土居 ひでの

ほろ苦い逆境にもある人間味
残業を終えて一幅の絵に憩う
片ことが大きな下駄を履きたがり
札のしわ伸ばして巳年の福を呼ぶ

島根県 松本 聖子

発想をあらたに今朝の靴をはく
バイオリズム信じてみたい時もある
寝ころんでやはり虚しい日曜日
きのうまで走り回った友が病み

尼崎市 森安 夢之助

自画像へ髭でもつけておこうかな
塩せんべいぼりぼり食べる義歯の夢
急かされて名所を走り抜けただけ
ライバルが味方の中に居る怖さ

和歌山市 山口 三千子

渡れない川の向うの虹を追う
弁解をするなと母は目でおさえ
眼鏡拭きかけた焦点確かめる
打つだけの手は打ち後は運に賭け

西宮市 松本 一郎

老練な刑事は情でまずほぐし
和やかに赤いチャンコの父囲む
荒削り円空仏のその魅力

城のあるこの町が好き孫も住む

岐阜市 渡辺 杏村

早咲きの梅にうぐいすとんでくる
節分を過ぎても余寒こたえる身
折り合いのつかぬ話でこじれだす
女から別れ話をつきつける

尼崎市 野瀬 昌子

女王になった気になる美容院
鍵穴の向こうは知らぬことにする
カラフルなパジャマ明るい新家庭
手作りの綿入れ贈る年の暮

東子市 小山 悠泉

指切りの指に約束せめられる
初春のプランギっしり初暦
学士号母校の職が待つ帰省
望遠鏡月のロマンを消す素顔

尼崎市 吉永 伊三郎

ポケットの論吉も寒い師走風
大根を釜でふつつ癒封し
松葉杖やつぱりバスに乗り遅れ
風呂上り素顔に惚れた此方の人

酒田市 永沢 裕子

肩書きをはずして夫がまるくなり
ライバルの若さに負けぬ色をより
宅急便夢の速さで届けられ
友情が義理に変わった年賀状

米子市 新 正子

キスしても落ちぬ口紅バリ土産
お隣の屋根からいつも陽が昇る
うれしくてポツケ覗いてばかりいる
敬礼がとっても似合うまねき猫

岡山県 千 原理 恵

ばあちゃんが好きよと可愛い投げキッス
生々流転命あるものみな動く
修業僧の素足に沁みる寺の鐘
狐と狸一匹ずつ住む兎小屋

和歌山市 堀 畑 靖 子

転職の夫に厳しい冬の道
模様替え寂しさ排除するために
根絶やしにしたくない愛話し合う
特色はなしスマイルで勝負する

米子市 足 立 由美子

淋しくて犬と小鳥を飼っている
ひび割れた指でこの世を渡り抜く
いい便り駅のポストに入れに行く
この町の暮しが好きと言うポスト

岡山県 土 居 みさえ

抱き上げた母の軽さを忘れない
逢いたくて日記に亡母の顔を書く
喝采をあびて娘の初舞台
這い這いへもう待ちきれぬ赤い靴

兵庫県 東 浦 砥 代

握り合う手の手に溶けてゆくこころ
夢とうに捨てた女の束ね髪
まだ炎える指にからまる恋懺悔

好きですと言われ老いにもある鼓動

熊本県 高 野 宵 草

ビルが建ち小さくなった寺の屋根
妻といる幸せ罰があたりそう
異常なという診察が頼りない

お隣のコケコッコを食べている

尼崎市 山 田 保 蔵

コスモスが気がねしながら咲いている
秋深し柿の実たわわ寺の庭
譲られて気がねしながら座ってる

力では負けても母に愛がある

尼崎市 鈴 木 良 征

効き目のない効能ばかり書いてある
三界に帰る家なき女とは

四コマの漫画で判る世の移り
学歴の高さに惹かれバラが散る

尼崎市 的 場 十四郎

カニ食べる話で急ぐ旅支度
落葉焼く禅寺和尚の人の好き

踏まれても雑草春を忘れない
ライバルに見せてはならぬ左遷の荷

岡山県 大 石 あすなろ

バス旅行同じ袋の並ぶ棚

決断がおそくチャンスに乗りおくれ
思い出の小槌しっかりふってみる
本心を少し見せてるようなメモ

寝屋川市 豊福路子

ぼっくり寺自分の心が見えますか
約束が三つ溜って銀の箱
よろこびを零さぬカップ探してる
怠慢のこころ哭かせる秋の筆

熊本市 北川一進

二人だけわかるサインの退社ベル
影二つ一つになった別れ道
一人身になったら途端派手になり
人影に留守番の錠たしかめる

熊本県 岩切康子

小春日に一直線の飛行雲
受賞を共に喜ぶ友が居る
講演を聴き入る時の身が軽い
カレンダー同じ型が欲しい暮

和歌山市 田中輝子

知らなければ済んでいたのに人の口
少し危うい結婚なれど好き同士
生きていたら逢える望みの灯は消さぬ
早春の息吹き菜の花畠から

大阪市 吐田純子

霜やけの思い出遠い落葉焚き

子を嫁に遣って淋しい母の膝
孫の手にサンタの靴が鳴っている
空くじが舞って今年も除夜の鐘

河内長野市 大西文次

ファッションとなれば背中も胸も見せ
なるようになるさ糸瓜がぶら下る
嫁き遅れ他人が心配してくれる
為になる話ちつともおもしろくない

岡山市 中嶋千恵子

巳の年に金運たのみ初詣で
十年の年輪きざむクラス会
現役を離れてみれば粗大ゴミ
車間距離おいて見つめる愛もある

尼崎市 尾宮弘治

一輪で軽く食卓飾りつけ
太陽を味方に病妻の布団干す
靴べらが要らなくなった二度の職
病んでから薬草の本買ひ漁る

堺市 神原文

幼な子の道に描いた画とけていき
夫には言えぬ寄り道して帰り
手作りは少しいびつで味がある
この女を酔わしてみたい好きだから

貝塚市 池田寿美子

プラットフォーム祝いと喪服隣り合う

電話なら言いたい想いつぎつぎと
以心伝心ついでに寄つたと現われる
紅葉してひそと息づく羅漢さま

出雲市 金 森 知恵子

信じ合う友あり心の窓開く
主逝きて盆栽哀しみ深くする
少しだけ頂く珍味に見えてくる
無意識の溜息壁が聞いていた

鳴門市 八 木 芳 水

終列車すでに鎧を脱いでいる
反骨の父権現わすふところ手
配達の苦勞しみ込む朝刊紙
留守番へ裏から叩く北の風

高槻市 芦 田 静 江

嫁の留守料理に飽きた大根焼き
天秤場すぐきが秋を走らせる
軸変えて師走が弾む娘の新居
洗濯日和弾んだ嫁に脱がされる

松江市 豊 田 巡 歩

歩が一つ働いている僕の家
とんぼ帰りしても故郷いいもんね
過去の事みんな忘れて杵の音
この年でピンクの色が目にはじく

鳥取県 太 田 幸 枝

よろこびを呑んだポストが赤くいる

口笛にまだまだ若い詩がある
吊り橋をゆすると孫が近づかぬ
三途から約束一つ思い出す

鳥取県 乾 隆 風

風雪に遭うてきれいな椿だな
狎れっこになって男の腹探る
涅槃西風やがて枯野も目を覚ます
押し売りがくると咄嗟に惚ける姑

堺市 井 上 たかし

背を丸め二月の風をやりすごす
声変りした子大きく伸びをする
宝くじだけが頼りで落ちこぼれ

京都市 小 林 英 子

女の縮図似たようなラブストーリー
喝采の過去も重荷になってくる
雪原に羊蹄山の肌迫る

静岡市 三 井 三津子

主婦業を譲り無欲で生きている
味噌汁が出ると旅路でほっとする
酒少し呑むと度胸ついてくる

藤井寺市 楠 昭 子

笑わせてピエロに空し風が吹く
向い合って一番遠くにいる貴男
秋風と共にデートの数が減り

岸和田市 三 輪 通 彦

栄転で夫婦別れを強いられる
均等法弱い男が増えてくる

我が家より立派な家具が捨ててある

兵庫県

西脇 富美

自分史が時々消しゴム借りに来る

古時計見捨ててからの正確さ

飛び降りる高さは椅子の高さだけ

豊中市

村 上 とく子

声色のうまい男にだまされた

昨日見た夢に酔ってる三面鏡

鍋の中まだ反抗してる車エビ

青森県

福 士 ト キ

出稼ぎの苦情も聞いて賄婦

古里の話題飛び出す俄か雪

新しい靴で新雪踏んでみる

静岡市

宇佐美 寿 美

箸を手に話つきないクラス会

濡れ衣をあびて猫まで遠くいる

ネクタイをきりりとして初出勤

尼崎市

木 下 義 嗣

力にもなった我が子に別居され

民謡の唄になりそう里の秋

善人になった男の喜寿の春

尼崎市

中 澤 向 西

茅葺きのさびた山里恋しくて
切り餅が里から届く年の暮れ

大阪市 亀 井 円 女

孫の顔見れば財布が口を開け

戦跡でVサインするギャル悲し

クラス会みんないい笑い笑顔

守口市 森 川 春 子

紫式部少し判った漫画本

土瓶むし注文をして汗をかき

男の子ままと遊びにかしこまる

寝屋川市 宮 崎 菜 月

好感を持ってば相手も通じる眸

好きなのに親しき言葉交わされず

ようやく夕日を溜めている畳

大阪市 今 西 静 子

お茶漬けというもてなしの温い味

あの人の多弁が少し気に入らず

犬に語れば答える顔になり

和歌山市 田 中 み ね

そんな目で貴方に見られていたシヨック

笑袋たんと土産に嫁が来る

お疲れさま伝言板に妻のメモ

岡山市 清 水 悠 貴 女

小春日に気ままに転ぶ毛糸玉

そのことに触れず駅まで来てしまい

夢一つふたつを提げて春の旅

岡山県 松本元江

つんば棧敷でばんやり芝居観ています

手にあまる母の荷物を子が支え

忍従の土からのぞく露のとう

鳥取県 西川和子

止まり木にとまってゆるむ靴の紐

方向が見えぬ樹海の中にいる

節分や亡父が祓ってくれる鬼

寝屋川市 井上すみれ

名を呼ばれ唾のみ込んで診断室

大正はやつぱり惜しい使い捨て

あの方と会ったドラマの歩道橋

枚方市 中山おさむ

スリガラス越しに団地の日が終わる

通せんぼあつさり避けて縄電車

触れ合いは何処にでもある一人旅

八尾市 椎尾公子

魚嫌いの孫に食べさす料理本

雑魚寝するたのしさがありおんな旅

休日の朝は気兼ねもない欠伸

富田林市 山原昭水

箱型のポスト愛想おまへんな

おまわりがゆっくり歩く街静か

大阪城島津の紋を見いつけた

吹田市 山本希久子

おしやべりを片耳で聞く運転中

遠くから先に来ている待ち合わせ

名案を出して沈黙返つて来

新潟県 高野不二

呑むための薬も売れる年の暮

後で読むつもりの本を積み重ね

相談したばかりに足したのし袋

岡山県 富坂志重

注目のまともになりつつ気付かない

良い便り郵便箱を拭いて待つ

ストレスを捨てに行きますバーゲンに

大阪市 川原章久

贅肉が取れて身軽な冬木立

日向ぼこ無念無想とはいかぬ

デートかな後姿にシャネルの5

静岡市 西村千代

いい年をしている同士の仲の好き

早寝には惜しい夜長の秋の月

ゆずる物みんなゆずって好きに生き

河内長野市 岡崎実

義理固い手紙はいつも墨でくる

無位無冠空港に立ち淋しいね

金と地位できて家族の和が乱れ

香川県 上藤多織

無為徒食河馬の欠伸をうつされる
転がった土地で静かに根を下ろす
暗号を解くと虚しさだけ残り

川西市 野村 静雄

少しだけ妻が威張っていて平和

部下が出来少し深目に掛けてみる

病人の弱気へナース美しい

今治市 渡邊 伊津志

美味そうに飲める特技を持っている

税金のかからぬ山の空気吸う

上向きの時は制服良く似合う

富田林市 大澤 三四子

力説をすればする程疑われ

リクルート笑いを止めて青くなり

落葉まで流れに背きたむろする

愛媛県 石手 武

無器用な指が手品に懂れる

ぬれ衣が晴れぬまんまの寒い背な

台所のやりくり母の五つ玉

広島県 森川 抜智

礼服の寸法合わずに参列し

披露宴他人の司会あっけなし

入院はもう考えずビール飲む

枚方市 森本 節子

おのほりさんの様に歩く馴染の街

夫婦ぜんざい気長に並んで客は待ち
写真撮る夫に付合い紅葉の句

大阪狭山市 桜井 莊次

誘われた影がしぶしぶついてくる

飽食のツケが溜った肥満体

亡母の味思い出している匙加減

吹田市 山田 里子

青い鳥信じています木守柿

四季の彩気に入り小さな墓地を買う

坂道を一生かけて登らねば

豊中市 滝北 博史

しあわせを求めてならぶ長い列

海賊と知らずに乗った宝船

富士山に登った夢はしゃべらない

豊中市 三宅 つえ子

水たまりの虹へ踏みこむ車椅子

笑顔みせしんみり話す病み上り

良いことがあったとわかる父の靴

熊本県 増田 一乗

雑念も消えて嬉しくただ読経

シクラメン東京の孫から宅急便

歳の市今日も追加を買いに出る

松江市 原 長三

泣きに行く場も見当らず仰ぐ月

木枯しがアンテナ揺さぶる虎吹笛

木枯しが噂散らしておとし文

大阪市 山北 三三三

岡山県 江口 有一朗

秋風が妻をせかせる針仕事
招き猫客の忘れた帽子着る
女とは計算高い恋もする

岡山県 杉本 伊久栄

愛を知る心にリツチな今日があり
スピードアップしても多忙に変わりなし
もう後へひけない仕事に精を出す

唐津市 浜本 治幸

男とは便利なものよ立小便
唯一つ取り残されて木守柿
スイッチオン孫が洗濯してくれる

大阪市 榊本 落児

あまりにも気が利き過ぎて嫌われる
夫婦ともボケたか鍋がこげ臭い
決断の時は男が光るとき

岡山県 福原 辰江

愛情も程々がよい舞扇

残像を抱いてベンチ黄昏る

十二月ピエロもやっぱり忙しい

静岡市 柳沢 たま

乗りついで鈍行でよし秋の旅
父の説諭時々母もつぎ足して
茶柱がこんなに私をはずませる

出雲市 岸 桂子

食欲の秋にお寿司の味のよさ
鍵掛けた途端に部屋で鳴る電話
朝起きて鏡に写る皺の顔

寝屋川市 河合 時弘

狂い咲く花を責めたりなどしない
惜しまれて明治が遠くなって行く
カラカラと当てなく転げゆく落葉

十和田市 阿部 進

欲のない顔で罫線追うている
味噌汁の蜆に出会う朝の悦
分別が男を丸く変えてゆく

藤井寺市 武部 敦子

後継ぎを生んで嫁さん強くなり
痛いところ突かれざらりと聞き流し
年の暮やりくり知らず子はしゃぐ

八尾市 片上 英一

やんわりと妻の相づち乗せられる

青畳わが家の色に染まります

誘われて歩幅に合す回り道

常識をすこし外して生きている
失言を気にしすぎると木偶になる
髪長いおんなが似合う港町

堺市 近藤 豊子

青空と雀が映る二歳の瞳

溜息をなだめるように靴磨く

雨の街ホテルのロビー灯がともり

八尾市

向井しづ子

ぎっくり腰いたいいたい口をつく

横着な対向車線に出てこける

あたたかいお顔でかかる冬の月

和歌山県

森三枝子

まっ白な器かがやく台所

母さんがマイクを持つと酔うている

いい友を持ち幸せの中に居る

鳥取県

西浦小鹿

地を這ってつかんだものを信じきる

太陽の温みを草は待っている

夕暮れに影をひとつにするかごめ

鳥取県

横山房子

好きだった菓子を供えてひとりごと

古畳の方がやっぱり気が休む

遠巻きに隣の不倫騒ぎたて

高知市

山崎一求

竹トンボ作って飛ばす孫の守り

金余りどこの話か歳の暮

儲けさせ謝っているリクルート

摂津市

もちづき遊美

我が庭と思つて遊ぶ遊園地

年金にボーナス付けば夢のゆめ
年じやない心の青春何時までも

愛媛県

八塚三五島

雨の午後おんなの電話焦ってる

焼酎の湯割りいつもの指定席

ニュータウン雑草さまに住みつかれ

奈良市

米田芳子

車窓にも一幅の絵あり秋の色

ワンルーム再出発の砦なり

みんな留守鼻唄の出る気楽さよ

相生市

中塚礎石

マンションを父母がいるから里とする

水割りを回して聞いた平和論

いつきてもお地藏さんといひ眺め

大阪市

松永すすむ

幸という字忘れていた私

片隅の落ち葉おちばのひとり言

旅日記遠い景色を思い出す

奈良県

横井都姫子

あまりにも突然すぎてNOと言う

ジーパンで着付教師がやって来る

羊羹の端が好物だった亡父

伊丹市

猪原石荘

旅人に道は曲つて柿の村

学校の植木名札を胸に付け

うれしくて父の歩幅に合せる子

藤井寺市

菊地繁男

出不精と言つてはおれぬ訃報受け

亀の背で冬の陽射しが弾ける

急なことまずは喪服のしわ伸ばし

米子市

服部朗子

ひとすじの光慕いて香を焚く

使命負い自分に妥協許さない

天命のまま木犀香りまく

岡山県

福原悦子

別々の想いを包む凡夫婦

結論が出るまで話の外に居る

日だまりに布団を干して立話

宇都市

中村三良

ロボットに悪知恵つけて飼ひ慣らす

自画像はみな鼻負目に描いてある

カラオケがビールの泡をかき回す

吹田市

西岡豊

爛冷めの小部屋が弾む隠し芸

ツーカーで飲めば心もご開帳

どさくさに気付いていないこのスリル

泉佐野市

真崎浪速子

宇和島の牛はビールを飲まされる

幸せは社長と同じ誕生日

音沙汰もなしに無心を言うてくる

山茶花の落花余生に色を添え

真面目だが機転きかぬと弾かれる

明治からなんとか生きて星仰ぎ

(前月分)

懐かしい名もなく誌名まで替わり

ほころびた脳を繕ろう糸を燃る

お互いのボケを笑うて共白髪

静岡市

中西雅

塗り箸で大豆ひろいのぼけ防止

苦労した艶のない手をいとおしむ

風車持つ子へ母の声走る

鳥取市

武田帆雀

名刺には刷れぬ皆勤賞ばかり

方向を替えてピエロが酌に来た

苦勞人らしい書体の字の丸み

鳥取市

岩原喬水

子の電話叱って為替組みにゆき

あせるほど思い出せない人に会い

敬老の集い七十若手です

岡山県

後安ふさえ

戸籍簿に脳の程度は書いてない

雪こんこん孫と炬燵でかるた取り

ほんとうの訳は知らない他人様

岡山県

後安江山

優しさも鋭さもある風の声
一日の反省湯舟で温める
玉子酒祖母と二人の寒い夜

静岡市 滝田 たけ志

破れ鍋の蓋でも苦楽五十年
口コミの情報飛んで惑わされ
世をすねて軽い冗談ひっかかり

静岡市 浅子 まつゑ

オクターブ上げて唄うか旅の宿
はたき掛け音痴誰にもはばかりず
行く医院毎日同じ顔に会い

広島市 名和 喜一郎

厄年の守袋に母がいる
祝電も弔電も同じ事務作業

静岡市 丹羽 定次

悪口も気にしなければ消えて行く
ふるさとがまだ生きている秋祭り

和歌山県 田中 隆積

今一步頑張り欲しいと通信簿
色白の少年街をそぞろ行く

倉吉市 橋本 さつき

亡き父の靴音聞こえて来る日暮れ
終着駅老人ホームと書いてある

八戸市 島田 昭治

爽やかに昇る朝日に励まされ

耐えている何かいいことありそうで

静岡市 大村 正雄

当分は同居の人と言っておく
棒読みで筋書通り答弁し

兵庫県 倉垣 恵美

ふきんかたくしぼって掛ける十二月
犬叱る師走の声のでかいこと

鳥取県 山根 八重

山茶花が散ってさみしい夕暮よ
子離れができない馬鹿な母がいる

米子市 小塩 智加恵

許す気が顔も心も丸くする
どちらかが一人になれば子と同居

和歌山県 岩崎 瑞穂

痴話喧嘩することもない喜寿夫婦
下手な字に真心こもる祖母の文

静岡市 増田 扶美

ふるさとの香り残して客帰る
石焼の笛なつかしく窓開ける

岡山県 牧野 秀香

風当り強い承知で前に立つ
苔むした墓石我が家のルーツ識る

静岡市 小木 久子

秘めた恋凶星さされてうろたえる
暫くは伏せておいてといひ話

米子市 門脇晶子

いつからか星が私の道しるべ
火ともえた花の最後は黒い種

静岡市 三浦つね

歎びも悲しみも秘め城の石
特価品探して祖母の輝く目

岡山県 伏見すみれ

押し売りを断るのにもいる度胸
変身にしても蛙は蛙の子

大阪市 喜多佐津乃

御両家の愚痴も呑み込むお仲間
ペランダを少し陣取る吊し柿

神戸市 岩田信義

初恋の思いが浮かぶシャボン玉
抽斗を一つ片づけ今日終る

青森県 波ただお

教え子がまた一人逝き星仰ぐ
それとなく教養見せる薄化粧

羽曳野市 福田満洲子

賑やかなお通夜遺徳が偲ばれて
次男なら嫁の候補がたとあり

鳥取市 久野野草

へそくりが貯まりウインドのぞきこみ
夕やけに弾んだ声がとんで来る

米子市 大田みさと

垣根越し隣の煮豆温かい
父さんの気合いはいつも空振りだ

呉市 岡田寿美礼

年賀状陛下偲びて筆進まず
足もろく老いはよいしよでリズム取り

鳥取県 伊吹富恵

冷蔵庫満杯にして一人の膳
日本晴鷲峰山が背伸びする

鳥取県 鈴木芙美

山茶花の可憐さ冬に立ちむかう
メモ一つ残さぬ犯人黙秘権

寝屋川市 北岡波留吉

怒りにきて何か置いとく里の母
神拝む少年の目は澄んでいる

鳥取県 黒田くに子

父と子の距離をちぢめる腕角力
方便のうそで切らせた長電話

京都市 渡辺圭坊

鍋の湯気眼鏡外して酒を受け
糟汁で酔うて管巻く掘炬燵

鳥根県 菅田かつ子

役付にされて息つくひまがない
くつろぎを忘れていました足の裏

大阪市 平山登代

給料は振込みよりもじかがいい

正月はお客を待つて寝もやらす

富田林市

加藤 ミツエ

泉佐野市

大工 静子

忘年会年とは思えぬ美声なり

吹溜り子ネコが二匹たわむれる

唐津市

福島 紀一

ままごとにお風呂御飯と二歳の児
踏みしめれば草履に小石食い付いて

和歌山市

前田 美子

淋しさをかこち落葉を掃き寄せる

お歳暮はせず貰わずと決めており

豊中市

小林 一夫

弁解のつもり手みやげさげて来る
弁解に友の名前が先に出る

奈良市

井上 大

石蹴りの石扱びおり勝つために

マスターがかわりカレーの味変り

鳥取市

西村 黙光

一年の計になかったりクルート
稲干して内需拡大考える

熊本県

立道 善太郎

ストーブが真つ赤に燃えて嫉妬する

カレンダーに叱られている無精者

大阪市

島路 太郎

出来すぎた子の行末が怖くなる
ふるりの孫も顔出すサザエさん

唐津市

入江 喜久夫

鱒酒に酔ったくちびる唄い出す

ころのあるおでんあり吾が誕生日

羽曳野市

麻野 幽玄

老妻が杖を頼りの市場籠
ボーナスが出てもローンに吸いとられ

静岡市

青柳 金吾

タレントにも好き嫌い有り切るテレビ

一期一会の弥陀ヘカメラを向ける旅

藤井寺市

中島 志洋

長電話鍋から煙出始める
愛してるなんてうっかり妻に言う

兵庫県

酒井 靖子

燃えている二人に粉雪苦にならず

榎原に未だ紀元節生きていた

倉吉市

青砥 菊枝

下心あつて一つを我慢する
盃の底から本音浮き上がる

豊中市

額田 明吉

みぞれ降る過去の哀しみつれて降る

雪便り母にカイロをすすめられ

テープカット駅長さんより議員さま
アドバルーン湖の白鳥と戯れる

湖西線小野駅オーブン

出雲市 高橋 きよし

貯める金無いが溜ったゴミの山

イイ女演じそこねて十二月
残る日も恋していたい十二月

腰据えてローンが席とる家計簿

静岡市 大石 たき

入院のここでも三食昼寝つき
リクルート トカゲの尻尾ばかり切り
大阪市 平井露 芳

鍋焼のうどんて温む冬の夜

吹田市 大沢 宙 宙

クリスマスすめば一気に除夜の鐘
すす払いに檀家召集する峰寺
島根県 児玉 幸子

長生きをしてとなくさむ孫娘

計算の範囲で見栄を張る苦勞

一泊二日あつという間の夢の旅

大阪市 堀口 欣一

銀行に縁のないまま五十過ぎ

大阪府 堀口 欣一

休日の洗濯カラフル下着干す
その人の心がわからぬ気の迷い
榎原市 西本 保夫

漫画本読む女房の四十七

島根県 今川 三津江

老いてなお優雅溢れる舞い姿
愚痴捨てて動ける喜び分ち合う
岡山県 森下 正子

年賀状少し自肅の筆をもつ

唐津市 野田 旭 恒

健康の尊さしみじみ臥せて知り
父と顔合わさぬ朝が来ては暮れ
東大阪市 大平 太一郎

年金がバックアップの暮しむき

奈良市 米田 恭 昌

口癖に老兵が出る戦さ疵
榎山へ背負ってくれる誰がいる
大阪市 尾崎 黄紅

二礼二拍杓子定規の初詣で

影武者は秘書という名の宮仕え

ピカピカにみがいた鏡で自己嫌悪

鳥取県 木下 芙 葉

懐を師走の風が通り抜け

コスモスはお偉い人がみんな摘み

本当は酒が飲みたい打合せ
住職が語る仏のような父
大阪市 清水 絹子

弘前市 肥後 和香子

花入れに生きのびている枝の柿

大阪市 清水 絹子

弘前市 肥後 和香子

大阪市 清水 絹子

大阪市 清水 絹子

弘前市 肥後 和香子

大阪市 清水 絹子

大阪市 清水 絹子

弘前市 肥後 和香子

大阪市 清水 絹子

大阪市 清水 絹子

ご近所のおかず教える換気扇

豊中市 田 中道胤

北からの鳥が持ち来る雪便り

老人が社寺へ奉仕の庭掃除
足踏みし年賀はがきが売残り

ストレスも溜らぬ老いを持て余す

島根県 山根峰雪
大阪市 乾 哲 静

青森県 木 村喜衛

柱時計働きすぎと子が止める

音痴にも一杯機嫌の歌がある
午前様靴音だけは気にしてる

二日酔冷水だけが慰める

島根県 岩 田 三 和

川西市 田 中喜俊

一人居の瞑想中にベルが鳴る
冬の花白く咲くから平和村

忘れたい思いを日記克明に

茨木市 藤 井 正 雄

唐津市 中 村 順 子

コーヒーも回数券が得という
老妻はカルチャーダンスの若返り

借金のない人生のありがたし

熊本県 内 山 二 男

神戸市 石 神 草 風

茶柱を嬉しがらせた祖父の智慧

秋風が肌身にしみる左前
虫の音が妻の小言を消してくれ

童顔のまままで心のスクリーン

大和郡山市 渡 部 トキワ

島根県 高 橋 武 衛

紛れでも拾われた句に胸なでる
桜井の駅跡たずね父子偲ぶ

雪の音止んで夜明けの雪化粧

◆ジュニアの部

豊中市 み き わきみ

尼崎市 新 井 朋 子
(中三)

戦友の訃報続きで年暮れる

一年を生き延び医師への年賀状

出雲市 森 山 健 歩

免状を持つてる方が黒を持ち

親子喧嘩やっぱり金のことらしい

こねこ見にも行きたい針中野
あつい湯で背中流してくれた母

大阪市 福 西 範 子

— 同人吟

秀句鑑賞

— 前月号から

藤井 一二三

「私は句の根底に、愛というものがあるかどうかを、頭に入れて選んでいます」と語られた故中島生々庵先生の言葉を思い出しました。二月十七日が先生の祥月命日です。

日めくりめくる一枚ずつにある命

岩本 雀踊子

ある程度歳を重ねると、友や知人の訃報が多くなってくる。日めくりの一日一日にちに、神から頂いた生命の有難さを感じている。

「御座候」に並ぶ善男善女かな

谷垣 史好

あの餌の甘さ、ほどよい軟らかさ、掌に伝わる暖かみ。御座候を求めて並ぶ人々の瞳には政争も裏切りもなく、ささやかな幸せに生きる庶民の笑みがある。私淑する史好さんに道の近きにあることを教えられた

心が寒くて街を出るのか君も

林 荒介

山頭火を思い出すようなリズムの句。物の

あり余るが故に、逆に人の心は乾燥し砂漠化している。悲しいことである。出る者も残る者も、虚しいものを胸に秘めているのである。割引きの元の値段も確かめる

菅井 とも子

思わず笑いのこぼれる句である。値引前の値札を見て、勝利感にも似たような喜び、しかし、売る方も買い手の心理を承知の上で、それを逆手に取っているのかも知れないが。脚病んで路傍の草を避けてゆく

榎谷 寿馬

やがて雪を降らせてくれる舞台だな

後藤 正子

嫁ぐ娘へ父は金魚に餌をやる

福本 英子

糠に釘一生母は打つだろう

浜本 ちよ

限りない母の慈愛は、生きる無量寿仏に他ならない。たとえ届かなくても、絶えることなく無条件に、愛の光を放つものである。馴染み深い秋です柿の色つきも

春城 年秋

年ごとに巡ってくる秋ではあるけれど、そこそそ人生を考えさせてくれる季節である。特に夕陽に映える柿の朱を見ると、又昨年と異なったものを感じる。かくして人生の年輪をまた一つ増やしていくのである。絵の具箱みな塗ってみる冬の海

藤村 宏子

自然の偉大さには、人間どう逆立ちしても及ぶものではない。どの絵の具を塗っても、

暗い鉛色の冬の海を、表現出来ぬ作者の心の奥底には、春の海への願いが隠されているのではあるまいか。

— 近所の売値で我が家値踏みする

佐野 白水

地上げ業者のせいかどうか、地価がどんどん高騰する。我が家はこれだけの資産なのだと喜んで見ても、売れば他に住む所がない。税務署の笑顔が、見えてくるようだ。まっすぐに生きて生傷が絶えぬ

嘉数 兆代賀

世の中とは嫌なもので、正しく生き、正論を吐くと、皆から矢が飛んで来る。損をするのは解っていても、どうにもならぬのが悲しい。

いろいろに結んで解いて春の帯

石倉 美佐子

まだ恋はみのらないのよ虫が鳴く

宮尾 あいき

風が止むたった一つの出来ごとに

川端 柳子

妻の居ぬ夜は詩人の貌になる

榎本 吐来

最高の芸術です妻の皺

柳楽 鶴丸

通ぶって見たがあげ底見透され

本田 恵二朗

大分胃がよくなってきたつまみ食い

金井 文秋

成長の一里塚かもまた背く

田形 美緒

1989年度

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自 88年9月号
至 88年12月号

路郎賞候補作品

黒川 紫 香

明日あると信じて飴を舐めている

平松かすみ

夏だ夏だと向日葵さんのはしやぎよう

田中 亜弥

適当にどうぞと妻が拗ねて見せ

久家代仕男

淋しがり屋に兜町の話など

渡辺 独歩

コーヒーの味にうるさい無職なり

玉置 重人

羽根ペンで脅迫文を書いている

奥田みつ子

ふり返らねば他人だったあなた

永田 俊子

おもちや屋へ軽い財布で来てしまい

本間満津子

長生きをしてネと面倒みる気なし

福本 英子

おねしょ癖修字旅行近くなり

園山 良子

人間に生まれ不粋な欠伸だな

中原 颯人

ライバルが向って来ぬので手が出せぬ

人見 翠記

一行の日記が続いている平和

塗らたてのペンキが付いて人を待つ

すくすくと育って家を出て行った

松川 杜的

田中 叶

野村 太茂津

てのひらを返すと男でなくなるぞ

どんじりを走ると風もやわらかい

川島颯云児

女郎花やわいおとこが多過ぎる

洗濯機に首突っ込んでみたくなる

石ころでもより未知数に賭けてみる

老いるには中途半端な持ち時間

人をさす指は不遜な言葉もつ

田中 正坊

土居 耕花

安平次弘道

河瀬 芳子

吉川 寿美

人間を磨く言葉が肌を刺す

春城武庫坊

手のうちが読めているから口出さぬ

手を抜けば納得できぬ性格で

白旗の高さを潔しとする

老夫よ仏の顔で寝るでない

疼いている辛さは生きる素晴らしさ

堀江 芳子

楯田球より扱いにくいのは女

敵のない人を信用できませんか

橘 高 薫 風

骨壺をせともの市で見つけよう

古書高く古本安し秋が来る

来し方を金魚逆さに振りかえり

隙見せぬ剣客もまだ修業中

刺身切るうまさも父の履歴書か

御先祖の家訓がわかる年となり

Tシャツがうしろまえですお父さん

高杉 鬼遊

福元みのる

小砂 白汀

筒井 朴竜

真喜内 實

柿花紀美女

金山 夕子

リハビリのピアノですかと問われたり

川上より子

浜木綿も機銃掃射の記憶もつ

結城 君子

手の中の螢を好きな掌に移す

久保 正敏

ホークスが配所の月を見ようとは

藤田頂留子

病院の椅子に深くは座れない

植村 喜代

墓石はきれいな金で建てておく

石垣 花子

茫洋と伊河のほとり柳古る

春城 年代

家出でもするの夫妻の旅靴

三宅 保

正本水客

鯨一尾 貴公子然と売れ残り

谷垣 史好

洗濯機に首突っ込んでみたくなる

土居 耕花

どの彩を足しても虹が落着かぬ

福本 英子

自転車に乗ると寄り道したくなる

菅井とも子

父と子の会話男をのぞかせる

政岡日枝子

かたくなな姑がゆずらぬしまい風呂

春城 年代

水音を小さく小さく夜濯ぐ

古川美津子

老いるには中途半端な持ち時間

河瀬 芳子

策のない男策士を慌てさせ

堀端 三男

すくすくと育つて家を出て行った

新家 完司

ポックリと死ねたら長生きしても好い

川崎 秋女

いい事がありそう雀が窓に来る

中川 滋雀

淋しくてそれでも三度飯は食う

辻 文平

八十になったと思う秋の音

遠山 可住

首をつるには高い大島居

西森 花村

西田柳宏子

フライパンいつもホンネで生きている

佐藤 藤子

休火山親しみやすい貌になる

林 はつ絵

どの彩を足しても虹が落ちつかぬ

福本 英子

ソロバンが下手でみんなに親しまれ

嘉数兆代賀

太陽に恋したトマト赤く熟れ

木本 朱夏

日のあたるとこしか知らぬ不幸せ

垂井千寿子

賞められた手相と苦勞してみよう

平田 実男

足跡に一期一会の水たまり

岩本雀踊子

涙涸れてバントマイムが上手くなる

波多野五楽庵

秘書というテトラポットで身を護り

都倉 求芽

葱坊主が阿呆陀羅經を読んでいる

土橋はるお

元号がどう変ろうと御名御璽

谷垣 史好

紙コップとつても寒いひとり旅

岩本雀踊子

七人の敵がいるからこの元氣

吐田 公一

好きだからだましまし舟など折りましよう

松本はるみ

川柳塔賞候補作品

谷垣史好

猿回し集めた金を猿に見せ

友達がいるから医者へ行つてくる

君が代を唱つてみたくなる平和

自慢にも恥にもならぬ縄をなう

船の旅思わぬ方に陽がはずむ

男には男の世界瓶の数

水槽の大魚動かぬ原爆忌

その時は全身マリで逢いにゆく

感情をまる出しにした箇条書き

抜け道を知ったばかりに躰いた

仔犬抱く私も犬になっている

母の手に載るとコロコロ花の種

報復のペンを握つたまま眠る

拾つた恋お巡りさんへ届けたい

千手仏どの手でひしと抱くだろう

尾宮 弘治

野村 静雄

服部 朗子

宮武まつ女

江口万亀子

福士 トキ

小林 一夫

中尾まゆみ

山口三千子

桜沢あかり

亀井 円女

太田 幸枝

小谷美つ千

秋元 てる

山田 保蔵

小出智子

アンテナが屋根で聞き耳立てている

湯上りの老婆なにか塗っている

報復のペンを握つたまま眠る

知つてよし知らいでもよし人の事

杉山 やす

木下 義嗣

小谷美つ千

亀井 円女

梅干によく似た顔になってきた 三浦 つね
赤い舌は切らねば偽証罪になる 高田美代子
町の子の分も飼つてゐる兜虫 福士 トキ
子育てを果した納屋の三輪車 寺脇 三倉
捨てた命 今年七十六になりました 森川 抜智
殺されたわけが蜂にはわからない

偶然をうたがいませんお月様 笠嶋恵美子
折り返し地点を過ぎた誕生日 安田 志津
雨よ降り悪い噂を消すように 山田 妙子
目隠しをされてる事にふと気づき 山根 八重
姉がいたそうなの四十三年目の夏に 小木 久子

河内天笑

運動会隣の夫人おんぶする 渡辺 杏村
どん底へ落ちる覚悟で好きと言つ 北岡波留吉
しまったと思う約束してしまつ 田中 輝子
その時は全身マリアで逢いにゆく 中尾まゆみ
恋ひとつ終り伏せ字が読めてくる 今西 京子
偶然をうたがいませんお月様 安田 志津
老いらくの恋ステップを踏み違え 中塚 礎石
自慢にも恥にもならぬ縄をなつ 宮武まつ女
船の旅思わぬ方に陽が沈む 江口万亀子

仔犬抱く私も犬になつてゐる 亀井 円女
子育てを果した納屋の三輪車 寺脇 三倉
名曲をゴミ屋の歌と子は信じ 神原 文
同業の広告だから見逃さず 北川 一新
切る日だけ決めて少女の長い髪 新 正子
つべんに立つと余計なものが見え 高田美代子

板尾岳人

一つ消え一つ生れる迷ひ雲 安田 志津
約束をひとり信じる月見草 新 正子
苦勞したことは言わない片えくぼ 山根 八重
佇ちつくす迷路で亡母の鈴の音 流 奈美子
渡された火種を消さぬ消しはせぬ 小谷美つ千
それなりの力量なれど山椒の実 田中 輝子
頼杖をつけばうつつにわらべ唄 高杉 千歩
生真面目が取り残されたかくれんぼ 宇野 昭代
臆病になつて無口を武器とする 宮武まつ女
恥いくつ晒して花の首落ちる 寺中三枝子
こころあたり糸を切ろうか奴唄 舟渡 杏花
木杓子と遠いくさの話など 藤井 高子
その先を聞きたいロバの耳になる 高田美代子
養虫の覗いて見れば世は広し 加本 義良
ほととぎす逢いに出たのに見あたらす 岩切 康子

高杉鬼遊

何となくせつかちになる古時計 池 森子
我がままな生きもの夫婦私 堀畑 靖子
まだ少し燃えるものある帯の芯 宮武まつ女
言い過ぎて暫く溶けぬ角砂糖 尾宮 弘治
男には男の世界瓶の数 福士 トキ
神様は正直駄目は駄目にする 朝倉 大柏
見た目より広げた傘へかなり降り

時々は喧嘩するのも鏝おとし 猪原 石荘
目立たない仕事で女忙しい 河合 時弘
約束は守ってくれる人とする 大川 幸子
水槽の大魚動かぬ原爆忌 山口三千子
まだ謎があつて夫婦の面白し 小林 一夫
海ばかり見つめて島は生きている 宇野 昭代

途中から小さいつづらに替えてみる 足立由美子
千手仏どの手でひしと抱くだろう 舟渡 杏花
山田 保蔵

▽訂正△

一月号の「茴香の花」78頁下段17行目の句
を次のとおり訂正いたします。
輪の中に居たくてしやべり続けてる

和歌山市 坂部紀久子
(編集部)

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

松下 たつみ

靴磨く妻に左遷が切り出せず

名和 喜一郎

いつの世も宮仕えは辛い。況してあなたを信じて疑わない妻に左遷の話など。これも作者の実感から生れたのであろう。実感強い。食卓の花一輪も愛ですよ。

小谷 美つ千

ちよつとした心遣いに感動するのが人間族である。喜びも悲しみもこの一輪に、甘い句だが明る。多幸あれと言いたい。

ひまわりのブームで買ったシャツ仕舞う

藪田 猿 杏

似合つても似合わなくてもというのがブーム、来年は着る機会がないかも知れない。最近ではそれを不思議とも思わなくなつてゐる。

週刊誌の口絵に妻を推そうかな

鶴久 百万両

むずかしい言葉をつかわず、愛の様相を美しく、いつわらず表現されている。

物書けばひよつこり君が出てくるよ

宮崎 菜月

なんでもない表現だが、捨てがたい情緒のある句。

しゃれた名のカクテルについで酔わされる

大川 幸子

社会人一年生のあなた、見るもの聞くもの興味いっぱい、つい酔つて見たくなる。巧みな句。

ベテランの中のピリなら気が軽い

福田 満洲子

この場合、自分の立場をよく知つたうえでのピリであるなら、案外、サバサバしたものが感じられる。

疲労こんばい一服の茶のありがたさ

千原 理 恵

一服のお茶と労働のぬぎらいを言つた実感句である。しかし、この句からいろいろな感想が浮ぶから捨てがたい。

都会からブルドーザーがやってくる

西浦 小 鹿

たいした産業のない田舎では、都会の資本に頼るしかない。この句はそういう世相にぶつかった作者の公憤を、ブルドーザーがやってくるのと皮肉つた面白いネライの句。

仲直りしよう木枯し吹く前に

堀畑 靖 子

平素から仲よしの友達同士だから仲直りも早い。木枯して句品をよくしている。

先生がさきに挨拶してみせる

鈴木 良 征

ブライドの塊のような先生が先に挨拶をする。教育が人の価値までかえてしまうという心理を巧みに促した句。

汚されにぼつと出て来た美しさ

野村 静 雄

観客の欲情に訴える映画製作のため、いや応なしに裸にしてしまう。拒否すればスターの座から落ちねばならない。裸になるのにその時間はかからないのである。ぼつとがこの句のヤマ。

浄土まで道を計りに行つたまま

土居 ひでの

みんながゆく浄土だが、今もって地獄はない。又なくてもよい。この句「計りに行つたまま」が実によく利いている。

故あって皿一枚を割りました

岸 桂 子

鉄路の錆となつたり、精神病院の厄介になつたりしては大変。皿一枚で気が晴れるなら安いもの。あとは日本晴れ。心理の動きを率直にとらえた句。

雲灼けて砂漠も灼けて昼寝どき

久保 和 友

何ものをも灼きつくすような陽光を避けたとすれば、そこには夏の生活はない筈だ。この句の場合、灼きつく夏の労働を重点においての言葉であると思つた。

アルバムとかがみの顔とくらべてる

新井 晶 子

愛染帖

橘高薫風選

米子市 川上より子

少し謀叛の墓の畑にバラ植える
ばあちゃんはラッパ吹きたし吹いていたし

米子市 青戸田鶴

本場の事も少しは見え出した
凡々とめくって曆薄くなり

鳥取県 西浦小鹿

手を合わす形となってゆく石よ
水底の希望の石を取ってくる

出雲市 森山健歩

転げ落ちた場所で冬眠してしまふ
落ちるまで落ちて放さぬ舞扇

姫路市 都里遊光

写経百卷彼岸へとどく橋にする
訪中は生れ変って行くつもり

米子市 林荒介

土鈴買ひ足しても幻聴は止まぬ
としよりと女の村の虎落笛

青森市 工藤甲吉

寂しいか鬼が仲間の面で来る
鳴門市 八木芳水

伊丹市 猪原石荘

陸に居る漁師しゃがんで沖を見る
大阪市 島路太郎

唐津市 入江喜久夫

臍くりを口惜しくつかう歳の暮
唐津市 久保正敏

ボケットに働く鍵と遊ぶ鍵
米子市 八木千代

傾いた棚にやさしさだけ乗せる

松原市 小池しげお
糸菊の端は女の嫉妬かも

川西市 松本ただし

折目ある七十歳のラブレター
鳥根県 堀江芳子

静岡市 渥美弧秀

抜きたての大根呼吸して届き
弘前市 波多野五楽庵

戦友と雪には雪の日の軍歌
鳥取県 土橋 螢

仏から紐を一本いただいた
弘前市 斉藤 劔

村おこし池の底より出た古墳
奈良県 横井都姫子

久しぶり夫がいます秋の庭
和歌山市 青枝鉄治

逢うてきた悔いも一緒に洗う髪
吹田市 栗谷春子

夫婦善哉食べてはみても今はいま
鳥取県 江原とみお

裏門に望みをつなぐ綱がある
和歌山市 神平狂虎

海は荒れても膝は崩さぬ方が良い
寝屋川市 江口 度

大津絵の琵琶が昔を弾き語る
和泉市 岡井やすお

冷やならでこそこの香り古酒三昧
和歌山市 福本英子

明日からの肩に重たい喪服脱ぐ
羽曳野市 田中隆二

香川県 上藤多織

逃げのびた男だろうか深海魚
美しい秋刀魚だ人が斬れそうで

鳥取県 新家完司

仏たち黄河の西を懐しむ
怠ると大きな足が踏みに来る

鳥根県 堀江正朗

ふくらんだ万年青鉛玉ほどの粒
寒鮎のうまさは酒のうまさかな

鳥根県 松本文子

朝もやが溶けると嘘がどつと出る
雲海の景色はいつか見たような

和歌山市 後藤正子

昨日という遠さで本を読み終える
まないたと喜怒哀楽を分かち合っ

和歌山市 西山 幸

正確な時間が駅にあるさむざ
競走を見ているそんな吊り皮よ

堺市 近藤 豊子

里がえり「めぞん一刻」褪せぬ棚
小さくも大きくも見え旅の人

二人とも無口になった置炬燵

大阪市

古代への架け橋おもう木守柿

河内長野市

青春の恋帰省してほろにがし

唐津市

昭和史に核という字がよく目立ち

兵庫県

鍵をして一人芝居の場をつくる

尼崎市

善と悪裁けぬ本が棚にある

和歌山市

飽食の裏に流浪の民がいる

和歌山市

こだわればスボンの折目一つにも

高槻市

煩惱が消えたらきつと灯も消える

大阪市

三ヶ日口紅つける日雇婦

米子市

幸せを写す水たまりを探す

大阪市

喜びも悲しみもある黒が好き

川西市

列に居て列の力を持まない

名古屋市

絶ち切った尻尾の跡がむす痒い

姫路市

遊びかた知らぬ振りした作業服

西宮市

横顔を見せて車が走り去る

私の行きたい方へ走る

富田林市

渡り終えやつと目につく花の彩

米子市

鬼千態仏千態香を焚く

寝屋川市

うなだれた顔たて直す朝の菊

八尾市

百人一首を今年は孫のために出そ

尼崎市

大雪や身の丈を越す罪のかす

鳥取市

逢うていていつも汚れぬ指である

鳥取県

噂にはならぬ小さな花の恋

寝屋川市

ネックレス男もつけて均等法

栗市

機械化の田圃に稲架が見当らぬ

唐津市

本棚は柳誌ばかりの潔さ

唐津市

それぞれを認めて座する夫婦岩

京都市

更生へ傷跡だけはついてくる

岡山県

病室の妻想いつつ床を敷く

大阪市

憂国の気魄韓国羨まし

岡山県

藤田 泰子

沢田 千春

豊福 路子

向井 しづ子

春城 年代

広本 文子

さえき やえ

平松 かすみ

神原 文

浜本 義美

浜本 ちよ

木村 良三

灰原 泰子

兼松 宏安

池田 半仙

古久保 和子

悪友の相づち火に油を注ぐ

茨木市

美しく泣いてあなたは女優さん

箕面市

偉人伝手に少年は鳥を出る

大和高田市

シクラメン似合うお方はまだ居ない

有田市

一人居に人恋しさがつのりくる

大阪市

浮き立っているなど思っその矢先

奈良市

フオアグラもついている主婦の忘年会

熊本県

カード見て又カード見て買う指輪

岸和田市

薬より寝る方にする鼻つ風邪

茅ヶ崎市

氷結のクジラを救い人あやめ

姫路市

小便小僧子供が不思議そうに見る

笠岡市

堀 良江

椎江 清芳

加藤 松次郎

松井 かなめ

渡部 さと美

米田 芳子

立道 英子

原 さよ子

山上 元孝

大原 葉香

松本 忠三

片上 明水

伊津志

新 正子

宮武 まつ女

満月に屋根で吠えているのは誰だ

米子市

他人ごと信じすぎたか冬いちこ

徳島市

有田市 生馬 芙美子
独りでも死ぬまで女紅をひく

大阪市 大福 留吉
鏡持つ手がふるえても紅を引く

兵庫県 吉田 明
脇役へ月が淋しく照っていた

鳥取市 小谷 美つ千
冬の月話はいらぬふたりなり

米子市 林 瑞枝
ゆらゆらと新陳代謝の早い街

広島県 田村 新造
失明をした母の掌があたたかい

島根県 小砂 白汀
惜しみなくタイヤちりばめ冬の日

廿日市市 森川 抜智
ラブソング昔の方が品があり

米子市 小塩 智加恵
割勘といえぬ淋しさ係長

高知市 大門 一郎
逝く母に聞いておきたいことばかり

守口市 羽原 静歩
白旗を掲げて人間に還ろうか

守口市 森川 まさお
細く戸を明けて只今準備中

大阪市 山北 三三三
名画展画より落款愛す人

伊丹市 樫谷 寿馬
ストープや冬物語というビル

豊中市 江口 明光
つまりいた人に追討ちかける人

倉吉市 青砥 菊枝

豊中市 三宅 つえ子
おばさんのジョギング人が足止める

和歌山市 山田 高夫
寒椿雪のベッドに春の夢

豊中市 辻川 慶子
膝に頸乗せて寡黙な自閉症

豊中市 藤井 正雄
山茶花は愛のひとひら彩で散る

和歌山市 森 茜
もたもたがとれずあせる気なおとれず

豊中市 滝北 博史
真実をつくしひききわ考える

米子市 石垣 花子
埋火をかきたてられたクリスマス

平田市 久家 代仕男
通夜の客泣いた分程スシを喰い

倉吉市 奥谷 弘朗
なに気なく見すこすことが多くなる

萩屋川市 堀江 光子
待望の結婚式も後二年

米子市 金山 夕子
大詰めに揚がる火花も直ぐ消える

藤井寺市 高田 美代子
枯葉色ちよつと気取ってパリジエンヌ

奈良市 米田 恭昌
微笑んでいよう人生一度きり

枚方市 森本 節子
歯車がきしんでいますよ夫婦

堺市 高橋 千万子
寒空の水かけ不動に水控え

熟してる時を見のがし愛は冷え

海南市 三宅 保州
三行の日記可もなし不可もなし

唐津市 福島 紀一
落ち柿も草に抱かれて熟れました

松江市 豊田 巡歩
コスモスが待っててくれた無人駅

豊中市 上田 登志実
世の矛盾憤慨しては諦める

東京都 吉川 一郎
ゲートボール寂しがり屋の老いの数

西宮市 松本 一郎
残された時間を妻と温める

堺市 井上 たかし
あふれる湯今日の苦勞はこれまでに

豊中市中桜塚三丁目13-15
投句先 下560 * 橋高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「心配」 選者 森中恵美子

締切 2月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局 ふれあいラ

ジオセンター 川柳係

発表 2月26日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

句評リレー

十二月号から

西山 幸
河井 庸佑
都倉 求芽
工藤 甲吉

楳円球より扱にくいのは女

谷 垣 史 好

幸 「扱にくいのは女」は男性の口癖ですが、それを「楳円球より」としたところがこの句の憎らしさで、全く頷かされてしまいます。楳円球は、本当に難しく思う方向へは跳んでくれません。

庸佑 「女の扱にくいさ」は、よく聞かせりふ。なかなか意のままにかぬ楳円球と結びつけられた着想はさすがです。

求芽 こういう句は私には絶対つくれません。目を丸くしてただ脱帽するのみです。

甲吉 「楳円球」だけでもっている句です。「扱にくいのは女」は平凡。史好さんだけにもう少しなんとかしてもらいたかった。こ

れは私の希望です。

幸 平凡な句を「楳円球」で非凡にした、と言えないでしょうか。女の一人として、女よりは扱いやすい楳円球を、めざす方向へみごとに跳ばして見せて欲しいと思います。

庸佑 蹴っても思うようには飛ばない。パウンドさせてはなおおさらのこと意のままにならない楳円球。これよりもっと扱にくいのは女性と、楳円球でなければ句が生きてこない。楳円球に敬服させられました。

求芽 皆さんが言われるように、この句は楳円球が鍵だと思います。それゆえにラグビーなどしたことのない私には、楳円球を扱うむずかしさが、ただ感覚的にしかわからない。尻理屈を言わせて頂くなら、ラグビーの巧拙度によって、女性を云々するのも失礼なことだと思えます。

甲吉 「楳円球」で『満場異議無し』というところ。しょつ鼻の幸さんはじめ皆さんの説で尽きています。

松茸は高値浮いてる松茸魅

久 家 代 仕 男

幸 句ものの高値と庶民の暮らしを言っているのでしょう。秋が来れば松茸の高値も必ず話題になりますが、これはもう新しい発見ではありませんし、松茸魅の句いで辛抱する庶民の悲壮感はありません。

庸佑 秋が訪れ、松茸が出回っても手が出ず、半ばあきらめられている庶民、せめて松茸の香りでの心の境を巧みに表現されています。

求芽 幸さんと全く同感。松茸の超高値はもう例年お馴染です。

甲吉 くる年もくる年も驚きあきれるのが松茸とズワイ蟹のペラボウな高値ですが、これを買って食う。人種。がいるのだから腹が立ちます。この句はそんな。人種。への腹癒せではないでしょうか。

幸 痛快、愉快な甲吉さんのご意見に同じです。安くなるまで待とう、と辛抱している人も多い筈です。しかし、この句からは（腹癒せ）のような気持よりは、庸佑さんの言わ

れる庶民のあきらめの方が強いと思います。

庸佑 松茸への思いをせめて松茸麩に託す人。高値でも食べられる人には庶民の真意はわかりにくいかも知れません。

求芽 産地から料亭へ直行する松茸。地元の人でももう松茸は昔話の存在。その郷愁をエッセンス如きでごまかしたくありません。

甲吉 「腹癒せ」は少し飛躍し過ぎたようです。何せ私はヘソ曲がりですから。それにしては松茸麩とは庶民はあわれです。

F 16 機豚も流産させる音

齊藤 劔

幸 ジェット機のあのキーンという音、本当に音の公害です。「豚も」の「も」にこの句のいのちがあると思います。おもしろくてやがてかなしい世相句です。

庸佑 頭のしんに応える金属音、暮しを脅かす凶器とも言えるF 16機。幸さんと同感でそのすさまじさが、「も」で鮮明に表現されるこの句を支えている。

求芽 当地はF 16も豚も縁遠いところですが、この句で実書をつぶさに感じとりました。

甲吉 三沢基地のF 16は大変なシロモノで関係住民は戦戦兢兢である。私にも「F 16牛!

馬・鶏を驚かせ」という句があるが、豚の流産はもちろん、牛は乳が止まり、鶏は卵を産まないなど、その轟音に農民は大憤慨である。この句モノ言わぬ農民の代弁。

幸 聞けば聞くほど恐いF 16機。劔さん、甲吉さん、お察しします。このような句がこの後も続くことを恐れます。

庸佑 直接経験のないわたくしは、評を読ませていただき、今更のようにそのすさまじさを感じました。どうかして少しでも住んでいる人々の安らかな生活を願います。

求芽 全く同感。幸さんではないが、恐れずにこんな句をもっともつとぶつきたいですね。

甲吉 理解していただいて有難く思います。アメリカの勝手?には腹が立ちます。やはり核の傘の下は悲しいです。三沢では飛行コースの真下の住民は集団移転をします。川柳は抵抗の詩でもあり、こんな面も忘れないようにしたいものです。

墓石はきれいな金で建てて置く

石垣 花子

幸 きれいな金が少なくなつた今、やはり改めてそんな心構えを自分に言い聞かせたく

なります。そのためには、きれいに生きなければなりません。自戒句とも思うのですが。
庸佑 疑惑が飛びかい汚れた金が横行する中、人に後ろ指をさされぬ金で生きて行くことの大切さを思い、自分の生きざまを、率直に表現されたものと思います。

求芽 お二人に全く同感です。墓石はもちろん、毎日の暮らしにもきれいな金しか使えない庶民の抵抗句とも。

甲吉 「建てて置く」というのですが、いったい誰の墓を建てたのでしょうか。また、きれいな金とありますが、ほかに汚れた金もあるのでしょうか。幼稚な疑問ですが、この句は分っているようで分らない気がします。しかし皆さんの評に反対ではありません。

幸 これはもう（自分の墓）を建てて置くとか考えられないではありませんか。つまり美しく善良に生きている私たちには汚れた金も無縁ですが、リクルート成金の世の中だから、この句は貴重です。

庸佑 いつの時代でも汚い金の話は尽きません。誰はばかるところもないきれいな金で生きていく。まして自分の入る墓はなおさらのこと、きれいな金で建てたのでなければ気が承知しない。汚れた金のまかり通る世の中に対する批判の句と感じました。

求芽 汚れた金を憎む気持は十分にわかりますが、甲吉さんに言われてみると「墓石は」にひっかかりを感じます。しかし、人間の終焉に的を絞ったのは妥当だと思えます。

甲吉 成金など豪華な考えをもつ人も無いではないようですが、汚れた金で我が墓を建てる人があるでしょうか。この句当然のことを言っているように思われるのです。

犬か猫か分らぬ犬を飼っている

田中 紀美代

幸 ペットブームの昨今への諷刺でしょうか。飼主が作者自身ではないと思いますが、すこし不明瞭です。

庸佑 犬や猫の好きでない人が、他人のかわいがっているペットに対する批判的な表現と思います。犬なら犬、猫なら猫はつきりせよと言いたげに……。

求芽 犬好き、または猫好きの人から見た警告、盲愛ではなく、正しい飼い方をしてほしいと言いたいのでしょうか。

甲吉 いろいろな犬や猫があるようですが、そんな犬もあるのでしょうか。ペットブームへの皮肉とも受けとれますが、そんなのを飼って得意がっているたわいのない人を思わせれ

苦笑したくなります。

幸 犬や猫の好きな人と好きでない人が、第三者の立場で、飼主を批判しているという皆さんの評で、とても穿った句に見えてきました。主人より大切にされている猫のような犬の貌も見えてきました。

庸佑 ペットブームで見えない犬や猫を見かける。猫に紐をつけて散歩という光景も見ました。犬らしい犬ならともかく、犬か猫かわからない犬ということで、この句にユーモアを感じさせます。

求芽 私にはどうしても、こんな犬の飼主を非難しているとしか思えません。ひいては現今のペットブームのあり方を。

甲吉 庸佑さんのユーモア説と求芽さんの説。どちらとも決めかねるようです。

無為無策りんごの皮を長くむく

野中 御前

幸 句姿に冗長な感じがありますが、それが却ってやるせなさあらわしていると思います。女らしい句です。男性なら、りんごの皮を長くむいたりはしませんから。

庸佑 心のおもむくまま、手にしたりんごをゆっくりとむいている作者。考えごとをし

ながら、気持にわだかまりがあるとも思われ
ます。

求芽 悩みに心は集中されて、皮をむいているのは日頃の習性によるだけのもの。作者の几帳面さが両方の場面に出ていると思われ
ます。

甲吉 りんごの皮を長くむく競争もありますが、閑人にはなんとなく長くむいてみたい気になったりするときもあるようです。素直な句で好感がもたれますが、なにか物足りなさを感じます。

幸 その物足りなさが無為無策に通じているように思うのですが。「長くむく」行為へ、時間の長さも葛藤もせずさせているのはありませんか。

庸佑 無為無策によって、りんごをむいている人の様子や心情が想像でき、長くむくと相まって、読む人に考えを深めさせることができるのではと思いました。

求芽 同感。無為無策と長くむくによって本人が浮き彫りにされ、同時に共感も呼ぶものと思います。

甲吉 川柳は余情の詩ですから、皆さんの説に賛意を表します。

尚香のむ

小出智子選

北風や老いの涙にわけはない
一日をわが彩にする花を活け

大阪市 上江洲勝子

秘めごとの後めたさよ樂しさよ

高槻市 笠嶋恵美子

ご意見を賜るごまも描りようで

母さんが上手に使う螺子廻し

富田林市 藤田 泰子

この前と同じところで蹴躓く

ふところの深さで今日も生きてます

大阪市 鈴木 節子

ゆつくりと行く道ボタンかけ直す

結論を出すのは風呂を浴びてから

大阪市 鍛原 千里

悲しみの中でもお腹空いてくる

蓋しておけば誰かが開けに来る

西宮市 西口いゝゑ

吊り皮に風化しそうな身をあずけ

自らを励ますお早う 今日ば

島根県 松本 文子

なにを探して木枯しの道ゆきくれる

鯛雲姑を許して姑になる

尼崎市 春城 年代
寝屋川市 稲葉 冬葉

せつかな影が私の前を行く

こともあろうに鏡へ媚びはみせまいぞ

岡山市 灰原 泰子
高槻市 河瀬 芳子

单身赴任遠い電話に木枯しが

少年を怖いと思つたことがある

大阪市 島村美津子
松原市 佐藤 藤子

幻想に駆られ雨戸をあけてみる
割り切つて荷物を一つずつすてる

吹田市 井上 照子
米子市 青戸 田鶴

いつの日か逢えるハンカチ振りつづげ

米子市 光井 玲子

ひとりの視野へ怪しく揺れる枯れ尾花

和歌山市 山口三千子

一粒の種てのひらにある安堵

岡山市 清水悠貴女

口ごもる愛の深さを信じきる

和歌山市 森 茜

捨てかねてこの服もまた流行るかな

寝屋川市 岸野あやめ

ロングコート肩の怒りが身にそわぬ

大阪市 田中 弘子

丹波哲郎のあの世とやらが面白い

寝屋川市 宮崎 菜月

輪の中の鬼はうしろの男まえ

大阪市 津守 柳伸

わたくしを軌道修正するさむさ

和歌山市 西山 幸

暇そうな夫へ猫が寄つていく

大阪市 堀 いくの

叱らないこと知つている猫の爪

茨木市 堀 良江

霜柱 父の無口がまだ続く

西宮市 林 はつ絵

寝太郎がまだ起きて来ぬ昼の月

吹田市 栗谷 春子

売り出しの声につられて風の街

吹田市 茂見よ志子

順番が狂うて老母の影愛し

堺市 小西 小雪

毛糸玉ゆつくり回り母老いぬ

堺市 宮本かりん

娘がひとりふたり嫁いで虹が消え

岡山市 土居みさえ

フィクションでまた太らせている噂

東京都 上鈴木春枝

大きくなれ呪文を掛けている叱咤

和歌山市 田中 輝子

雪まんだら約束ことはもう忘れ

出雲市 石倉美佐子

其の投書待てと言いたい日のポスト

米子市 石垣 花子

身の上にやすやすと降る雪の嵩

和歌山市 後藤 正子

悪女にはなれぬ 金平糖が口の中

米子市 小村てい子

逢う日までこの待ち針を止めておく

どのペンで書いても済まぬお詫び状

秋になると時効の傷が疼き出す

橋なかば飾りを捨てて身は軽し

杉並木歩けば素直取り戻し

出来過ぎた嫁へうれしく脱ぐ兜

謎解きをするにも母の手を借りる

鏡台で女に戻る呪文かけ

辞書積んでかしくなれる訳でなし

それからの噂を風が撒いてゆく

白バラに無垢な心を託している

割箸の先で思案がゆれている

脳みそを酷使しながら一行詩

啄木の詩書いているのはまんが文字

八方美人の心つかめぬ日の疲れ

野放図な夢をみている高軒

寒くないですかに熱くなつた胸

響き合うものしかと感じた初対面

障子張り替えて年度しめくくる

ポーナスの味知らぬまま古希も暮れ

靴磨く無理の続いた昨日今日

孫と行くマクドナルドの固い椅子

出る幕でないが許せぬ声をあげ

ありがたや 神の甘露を手のひらに

親のエゴ子のエゴすきま風が吹く

鳥取県 さえきやえ

和歌山市 山川 克子

米子市 茂理 高代

米子市 金山 夕子

大阪市 松尾柳右子

姫路市 丁坪サワ子

米子市 政岡日枝子

和歌山市 古久保和子

大阪市 西出 楓楽

大阪市 稲本 凡子

和歌山市 内芝登志代

羽曳野市 吉川 寿美

羽曳野市 福田満洲子

田辺市 染道 佳明

竹原市 信本 博子

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 堀畑 靖子

和歌山市 田中 みね

堺市 桜沢あかり

大阪市 古川美津子

堺市 近藤 豊子

松原市 北野 久子

堺市 高橋千万里

米子市 林 瑞枝

大阪市 板東 倫子

二で三で割って絆の糸瘦る

弾んでる毬を夫に投げてみる

アドリブでいちにち女ひとりぼち

ドンダリの一つ新芽をふくらます

帳尻の合わぬ歯車軋みだす

あまりにも突然すぎてNOという

白々しい世辞興ざめで聞いている

ネックレスわたしの鼓動聞いている

楳山も近頃過疎になって来る

言いたいや聞かなかつたと老い二人

過疎の駅 駅長室で暖をとる

病院のベッドで夢が消えてゆく

名古屋 藤井 高子

堺市 神原 文

八尾市 高杉 千歩

和歌山市 福本 英子

鳥取市 小谷美つ千

奈良県 横井都姫子

和歌山市 桜井 千秀

西宮市 奥田みつ子

宝塚市 丸山よし津

有田市 松井かなめ

守口市 結城 君子

大阪市 樋口シマコ

ゴシックの一句目、美しく老いるとは、この人のことを言うのか
と思う程素晴らしい作者。何事も善意に解釈をして暮しても、忍び寄
る老いの、どうしようもない哀しさをさらりと詠まれました。この
作者だからこそその句と思うのです。二句目、「楽しさよ」と言い切
れるのは若さ、心の裏側まで表現したのがよいのです。三句目、螺
子廻して時々ぎゅつと締められるのもう子供ではない。きつとお
母さんには一目置いていることでしょう。四句目、蓋というものは
開けるように出来ているもの、何時かは開けられる。それから一悶
着あったとしても、何とか治まるのがこの世。作者はそれを百も承
知。五句目、「風化しそうな」と作者の偽らない心境がうかがえま
す。六句目、逢う人ごとに元気で声を掛けているのは、それは自分
への掛け声でもあるのです。

ハガキに雑詠3句。 2月10日締切。

投句先 〒544 大阪市生野区勝山南1-18-10

小出 智子

63年度愛染帖賞



工藤 甲吉

選者に叱咤激励されながら毎回投句して来ただけの私に愛染帖賞とは誠に意外なことに驚き、一方、望外の幸せと存じて居ります。特にこれという特色も無ければ、独特のものも持たない平凡そのものの自分の句をふりかえってみるとき、恥じて顔に汗をかく思いでいっぱいになります。

しかし、川柳に手を染めてちょうど六十年、すなわち「還暦」の記念として有難くちようだいすることにいたします。

柳 歴
昭和4年 小林不浪人に師事。同5年「川柳 みちのく」同人となる。「国民川柳（川柳研究）」「川柳きやり」「番傘」「せんりう」その他に投句。その後、あこがれの麻生路郎門下に入り、今日に至る。路郎賞は残念ながら準優秀作二回だけに終わっている。

受賞のごよび

63年度茴香の花賞



後藤 正子

「茴香の花」との出会いは、すばらしいときめきでした。その憧れの茴香の花賞をいただき、喜びで胸がいっぱいです。ありがとうございます。

今を大切に、これからをより大切に、未熟ではございますが、一生懸命、勉強させて頂きたく存じます。

今後とも、どうぞよろしくご指導下さいませ。

柳 歴
昭和57年 三幸教室に入会
昭和58年 川柳わかやま入会
昭和60年 川柳塔社同人

言いまわしの個性 (八)

—— 自分史に連れ添う語彙 (続) ——

竹内 紫 鏞

1 造語の歴史と漢字の未来

自分史を書くにせよ、断片的に語るにせよ、読者は句を骨にしたり、着想に肉づけすることが多いだろう。句も文も、その人なりに過去何十年かの間身につけた、和・漢・混種・外来の語種を無意識のうちに混用し、駆使するはずである。持ち句のような「持ち語」がそうして身に添っていく。

読者各位も、二十一世紀に向って、日本の言葉の移り変りを取り入れつつ句を詠んでいくだろう。その推移や予想の資料を集めてみた。まず、日本の造語の歴史にふれておく。

(1) 明治の造語、昭和の複合

外国文化を取り入れ、二字漢語の造語が盛んに行われたのは、福澤諭吉が『教育のすすめ』を明治5年に世に示したところからだろう。小説を介して浸透が進むから、漱石や鷗外の

書物で新造語を受け入れた人も多からう。

その後、大正期から外来語が使われだし、昭和期は、戦時中短期間の「異様な」語彙を含め、既製単語の複合化が進展した。

一九八八年末現在の新聞には「税制改革」とか、「貿易摩擦」といった二字漢語の結合形が多い。広告に目を移せば、新刊図書に関する書名も社名も四字が多い。長い委員会名や機関名が一面に現われ、読者もその語調に慣れたらう。それらの中に、社会詠に使える、背景情報つきの熟語があることは、前にも述べた。

句に使える三、四字の熟語は、仏教や中国の故事に由来する格言風のものから、今日の「記者会見」の類まで、溜まっただけ応用できる。それらの要素語が生まれた時期は、明治以後ではいつ頃か、という調査がある。

昭和31年発行の雑誌90種(五分野に分類し

表1 明治以後の新出語の内訳

時期	和語	漢語	外来語	混種語	計
明治前期	5	24	1	1	31
明治後期	2	37	1	1	41
大正	0	6	10	1	17
昭和	2	1	4	2	9
計	9	68	16	5	98

(注) 宮島達夫：現代語いの形成(国立国語研究所論集、ことばの研究第3集)昭42、による。
雑誌90種の語い調査で使用率上位の1000語がいつごろから使われたかを、18の辞典・雑誌で確認した結果である。

集計)を標本とした大がかりの調査が、国語学者によって行われた。その中で、宮島・野村の両氏ほかの研究報告によると、標本中の語彙数(異なる語数)は三万ぐらい、延べの語数は四一万ほどであった。使用率の上位一千番までの語彙については、品詞別に整理され、手ごろな厚さの報告書になっている。

さて、その一〇〇〇ほどの単語のうちで、九〇二語までは明治以前に生れており、残り九八語が明治以後に新造(辞典で登場を確認)されたという。その経過は、表1から知られるように、明治後期がピークであり、その後、

漢語の生産力は減退してしまつた。昭和期の新登場語は「テレビ」という単語と、婦人雑誌にある編み物用語など九語にすぎない。公害とか団地、科学系では液晶や半導体のような単語は、一千位よりずっと後になる。

新造語が出なくなると、当然、複合名詞が案出され、一方で外来語がふえる。複雑な漢字は秒刻み時代に向かず、仮名で代用するうち書けなくなる人も多い。それでも、短文芸の世界では伝統に引かれて、外来語をつつしむ人は多いようである。しかし、この先どうなるであろうか。

(2) 将来の日本語

近年の計量国語学は、コンピュータも活用して、いろいろな予測を試みている。一九六三年の安本美典氏の論文『漢字の将来』がまず有名だ。それは、半世紀の小説百編を調べて、含まれている漢字の比率を出し、それが年とともに直線的に減少していく経過を確認して数式で表したもので、それから漢字のなくなる時期を二一九〇年ごろと推測している。これは、あと二百年だから、短文芸の過去の年数より短い。

この一九八八年春、つまり安本氏の調査から25年経つたところで、宮島達夫氏が芥川賞作品を対象に同様な統計をとっている。結果

を一言でいうと、大局的には漢字含有率は減つてきたが、減少曲線の勾配もゆるやかになつた……そこで今後の五十年は増減なしと見るのが穏当だろう、という報告(『言語生活』昭63・3)である。

この結果をめぐって、外来語の増加は確実だとか、ワープロの普及が一面では漢字をふやし、一面では漢字の書き方を忘れさせる等々の議論が展開している。

筆者は、小説のことは分からぬが、科学文獻では外来語がますます増え、実業界や政界にある長い複合漢語は現状のように続き、新聞の紙面では減少しないような気がする。

(3) 外来語への移行

川柳も俳句も、定型の音数に取める必要から、長い熟語も外来語も忌避されてきた。しかし、会話に始まる「省エネ」「脱サラ」等の簡略語が流布した段階で使えるだろうし、今年は「朝シャン」が現れたぐらいだ。川柳では俳句より先に生活上の新語が使われそうである。

つまり、和語から漢語へ、そして外来語への切換えが社会全体として進む、その流れを見守つているとよい。これを具体例で考えるところなる。

遠出 — 遠足 — ハイキング

口づけ — 接吻 — キス
まり — 球 — ボール
いろ — 色彩 — カラー
寄り合い — 集会 — ミーティング

などをお願い。もちろん、語義の差異はあるが、そういう変化の流れはありそうだ。野村雅昭氏の近著『漢字の未来(昭63)』の中には示唆に富む記事があり、表2の数字がグラフで示してある。新しい外来語が新語解説書の索引中で、最大の比率を占めているのは、新語の元になる漢字が尽きてきたせいらしい。

表2 新語辞典の語種構成比の推移

	和語	漢語	外来語	混種語	語数
1960年版	3.6%	40.2%	43.0%	13.2%	9,920
1980年版	1.9	28.8	57.6	11.7	23,448

(注) 『現代用語の基礎知識』(自由国民社刊)の両版の索引から語種別に集計したものである。

(付記) 80年度に新登場した語は17,679で、そのうち漢語は4,896語。その中で二字漢語はわずか11%にすぎず、それより三字漢語が、さらには四字漢語が高率となっている。四字以上の複合語は「高齢化社会」のように接辞の形態素を含んだ形が多くなる。

筆者が翻訳文を練っていく時、安易な片仮名の使用を避けて極力表意文字（漢語）を使う方針をとっているものの、二字漢語の限界はとうに來ていると感じる。だから、ビジネスに關係した文章中では、定型詩の枠などより自由に七音、八音程度の複合語が作られ、やがて定着する様子がある。

それに慣れた目で、近年の川柳作品を見ると、結構子余りや破調があり、成語の一部（例えば「晩成」とか「点晴」を使ったり、付随情報の多い人名を持ち出す作者もいる。

(4) 短歌の文節論から

昔の短歌は比較的短い文節から成っていたが、終戦後は長い文節へと、従ってその数は少なくなる方向へ移っている——という見解を樺島忠夫氏が述べている（昭40）。少し詳しくいうと、古い和歌の例で

ハル／スキテ ナツ／キタルラシ シロタ
ヘノ コロモ／ホシタリ アメノ／カゲヤマ
という作品は、文節の数が九であり、その音節の長さの平均値は三・八である。

ところが、現代的な事件・事物を表すときは、文節が長くなる傾向がある。すると三十一音内に収めるには、一首中の文節数（自語の数）を減らすほかはないし、助詞・助動詞を省略して俳句に近くするとか、字余りを

寛容に扱わなければならない、と氏は言う。ちなみに、談話体の実態を調べると、音節の長さの平均は、講談が四・一八、ニュースが四・八八であるという。こういった定型詩の緩やかな変化に、実作者は気付かぬだろう。しかし、音節が長くなる傾向があるとすると、『サラタ記念日』の中に「神奈川県立橋本高校」といった長い一語が出てきたのも肯ける。十七音句では、立看板のような長い名詞は味つけが難しい。詠むべき内容を適当な文節数（四か五の句が一番多い）で示す必要がある。このことも鑑賞を兼ねて一度調べたい。

2 結び

初稿に書いたように、上達のコツを述べるほどの力はなく、自分自身のスランプ脱出のために始めた調査の経過を綴ってきた。科学の進歩でビデオが普及し、ゴルフアームも野球の打者もフォームを調べて反省する時代である。言語問題も、コンピュータを使い、公の機関が集計分類を迅速にやっている。その結論を川柳という狭い社会にあてはめられれば幸いだ、と近ごろ考えだした。

本誌の読者の大部分は実作家のはずであるが、中に少し理屈っぽい考え（これが句作には邪魔になるのだが）を抱く人間がいてもよ

からう。ちよつど小説の作家に対比される国語教師のような「文法屋」が、パターンを調べるわけだ。実は川柳入門の当初から、表現上のパターンはどのくらいあるか、という疑問を抱いたまま二十年もたってしまった。

さて、「硬い」という言葉は、筆者の夢に出るくらいで、いつも気にしている。「幾何学どおりセンターがえし」といった七七調句を出しても、多分没になるだろうと思っていたが、後に読んだ西尾主幹の随想のなかに、笠原路生教授の作品にふれて、「幾何学的といった硬い言葉が使われているのにかかわらず、その格調の高さに感心した」という所感があつた。そのほか、

罌審は塑像の如く腕を組む 路生
とか、漢語と外来語の多い作品が並んでいるので、この大先輩の作風を範としたい気持ちに駆られた。

前章でふれた文様、つまり幾何模様との対比は、閑東にいる友人の着想だが、そういう分析と鑑賞もしてみたい。

東京の友人、松井栄一教授（国語辞典に『言葉』の著者）からは、文法上のかずかずの指導を受けた。厚く感謝する。近いことは良いことである。

（完）

川柳展望

主宰・時実新子

雑詠出句 10句

誌代(年間) 四八〇〇円 (千共)

〒563-01 大阪府とよの町ときわ白三―四―一七
天根夢草方

川柳展望事務局

電話 ○七二七―三三八―一八四五
振替 神戸五―四九七一〇

寒中お見舞い
申し上げます

「川柳占い」

一度お試し下さい

往復ハガキに一句無料
あなたの長所と短所、
運不運当りますか+

〒605 京都市東山区本町
五条上る東

山本殷煌

易学教授 (規不風)

Tel 075-561-3437

● 倅せの自己催眠に

かける秘技

● 貴方にも奇跡は

キット待っている

● お気軽にご相談を

入試合格法・家相、易占、
吉兆印受注、縁談、相性、
生見命名、開運改名、
四柱推命、他一切

● 好評開運手帳

注文承り(千円)

寒中

お見舞い申し上げます

本年も相変りませず

御指導下さい

丹波篠山

川柳ささやま社 一同

代表 遠山可住

初歩教室

題一北国

阿萬萬的

今月の課題「北国」と来れば、先ず旅と湯けむり、そして美女と温かい味が私たちを引きつけてしまいます。そこで旅の句から

つらから見た日本海男鹿の宿 しづ子
北国より風邪を土産にハネムーン みね

(北の旅で風邪貰ろて来たハネムーン)
雪のない北国の山詩にならぬ 金吾

北国に立てば詩人の顔になる ゲン吉
一人旅なら先ずは北の国がいい 円女

北国を終と失意の女がゆく 静子
(女ひとり涙を捨てる北の旅)

薬杵のこけしが北の国偲ぶ 遊峰
(こけしの目北国の旅ふと偲ぶ)

無人駅誰を待つのか雪達磨 義
(雪達磨がポツンと待ってた無人駅)

湯煙りへ雪の舞い込む北の国 遊峰
舞う雪を湯気が吸い込む露天風呂 志洋

北国のロマンが招く露天風呂 治
北国の民謡聞いている露天風呂 とく子

(北国のうた口ずさむ露天風呂)

春を待つ北国の湯に老夫婦

北の宿気楽な余生のフルムーン

旅と来れば当然の如く、ご馳走が出て

北国のご馳走思わぬ路の臺

北国の味覚アレビが旅に呼ぶ

(北国の味覚アレビが旅に呼ぶ)

北国の旅はシヨツツル キリタンボ

(シヨツツル鍋の温みにふれた北の旅)

北国の珍珠に財布の口を開け

(デパートに北国の味売るコーナー)

ご馳走にはお酒はつきものでして

北国の詠りでゴツイ猪口差され

酒と雪一人占めて北の宿

(辛口の地酒と雪の北の宿)

お酒がはいれば、次は唄が出る。

忘年会北国の春で幕を閉じ

北国の演歌が続く年忘れ

北国の春が人氣の飯場の夜

(北国の歌で飯場の夜が更ける)

北国の民謡吹雪と共演か

北国のイメージュじよんがら猛吹雪

(舞台いま吹雪じよんがら節流る)

津軽三味津軽生れて世を風靡

(津軽三味磬女へ哀しく吹雪く夜)

雪の国には雪の国なりの民謡があります。

書き残す民謡の旅を北国へ

(北国の民謡尋ねるひとり旅)

雪女北国ならでの物語

(雪女の話へ軒の雪が落ち)

喜代子

芙美子

章久

志華子

サワ子

ちず子

時弘

太一郎

光子

治

多織

三津江

良三

秀香

美恵子

宏安

北国の民話へ母の背を想う

雪国の子供らにはカマクラという楽しみも

迎春をカマクラ燥く赤い顔

(迎春のカマクラ子らはよく燥く)

北国の民話をかまぐらの灯が囲む

かまぐらの童話思い出よみがえる

雪ふかく積るカマクラ笑い声

かまぐらの中で子らがクリスマス

(クリスマスも同居かまぐら灯はぬく)

北国の雪温もりも秘めて降る

雪の下北国だけの喜びも

(北国だけの喜びもある雪の下)

孫の雪せつせとかいて喜ばれ

(雪かきをせつせと孫のはしやぎよう)

北国も住めば都の花が咲く

北国も住めば都と雪おろし

だが、本当の北国の暮しはきびしくて

北国の悴せ吹雪に鍛えられ

雪景色どころではない北に住む

北国の冬の生活を顔に彫り

北国で雪の重さに耐えて生き

私なら下五を耐えた皺としますが如何

寒から雪にかわつて足の冷え

北国の人は無口になってゆく

北国に女を泣かす雪が降る

(又も雪北国の女無口なり)

北国の詠りで話すひとり言

そんな北国へ転勤とは、サラリーマンはつ

遊光

明吉

保夫

静子

隆雄

ミツエ

艶子

志重

昭治

トキ

しんじ

昭治

志重

昭治

志重

ちず子

富恵

つえ子

小鹿

正子

トキ

結美

美

結美

美

結美

美

結美

美

結美

らしい。

北の果て本音も聞けず流されて
薄氷を踏み音軽く出勤し

美美子
艶子

(薄氷へ今日も勤める靴の音)
北国へ左遷單身赴任する

三千子

北国へ赴任と聞いた夜の冷え
北国の冬は飲んで早く寝る

由梨
菊枝

單身赴任酒も重なる冬の北国
(單身赴任の北国酒の量もふえ)

宏安

北国に居する寒さ重い靴
そんな暮しを気づかってくれるのは

好笑

北国で学ぶ息子に甚平縫う
もう一枚綿入れ持たせ嫁がせる

喜代子
和子

北国に親戚欲しい夜の灯り
(北国の従弟を想う夜の冷え)

すみれ

厳しい北の冬に耐えてる動物たちもいて
北海に三年育ち鮭帰る

秀香

(北の海ふる里恋しと鮭帰る)
最北端にあの幻の猿がいた

円女

(最北端の雪に耐えてる猿もいた)
北きつね人恋しさの目が光り

義

北狐家族となつて春を待つ
北国へ遠い国から鶴が来る

富枝
信一

(北国へ国境がない鶴が来る)
とかく北の国の人は美しい。そして心も

松次郎

遠縁の叔母は雪降る秋田美女
北国を羨む美人と米のめし

勝美
金吾

お生れは北国と言う美人

金吾

(お生れは北国ですと言う美人)
林檎娘が歴史を語る北の国

喜与志
美恵子

北国を想うりんごの美か村に
(北国のうたが流れて来るりんご)

良三

北国の人情伝えて東北弁
(とつと東北弁にある温み)

美子

北国を恋しがつてるこけしの目
こけし人形北国の人そのままに

信一

(こけしの目北国のひとお人好し)
何もかも情があつた北国路

しづ子

(何もかも心にふれた北の旅)
だが南国の都会ツ子には羨ましい面も

好笑

スキー出来羨ましいと子供言ひ
北国の暮しも知らずあこがれる

美子

北国は湯治の客とスキー客
冬の夜はついで北国の夢で明け

三千子
太一郎

追憶のあの日にふれる北の駅
北国の夫子供の頃を懐しむ

みね
ミツエ

(夫の目北国の雪懐しむ)
鶴の舞う夢幻の郷へ旅支度

志華子

風邪に病むテレビに美し北の国
風邪気味へテレビは鶴の舞う原野

すみれ

ラッセル車動くと北国雪深し
(遠くでは絵になるラッセル車が走る)

繁男

北国のテレビ便りに出す炬燵し
(北国の雪の便りに出す炬燵)

明吉

北国は大雪だろうと稲をこぎ
ともあれ北国は何もかもが春を待っていて

光子

北国の野仏も春待ちわびる

サワ子

北国の春を待つてる路の蓋
(雪の下も春を待つ路の蓋)

遊峰

ではおわり、もうそろの北国をどうぞ。
北国の屋根合掌で耐える雪

章久

下五「耐える雪」を逆に「雪に耐え」に
北国の雪に埋めた思い出よ

菊枝

(北国の雪に思い出埋めた過去)
タラップを帽子深目に雪へ降り

とく子

海峡を越える雪が横なぐり
北国の恋も育てる困圀裏はた

小洋

北国の母へ相談する手紙
北国の花にそわない花曆

春枝

故里のサファリンを恋うドキュメント
ガラス越雪を見あきた三輪車

照子

北国の冬が息づく歳の音
北国の思い出なつかし返し縫い

多織

北国の冬に背がまるい
北国の雪に埋もれし捨て案山子

信義

角巻がじつと見送る北の駅
千昌夫の歌じゃないが、北国の辛夷咲く春

章久

も間近です。来月のご投稿を期待しています。

和子

題「花」

圭坊

2月10日締切(4月号発表)

ハガキに5句以内

「坂」 3月10日締切(5月号発表)

宛先 千598 泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿萬 萬的

77

枝

上田翠光選

おみくじを小枝に結ぶ青い恋 和子
 枯枝と知らず首吊り繩をかけ 公一
 野仏に傘さしかけて松の枝 寿美
 枝物を育てて過疎に居る独り 喜与子
 枝別れた家系図に父が居る 杏村
 P T A 枝葉末節だけの議事 倫子
 枯枝を杖に山路のつつがなし 恵美
 風に媚び柳は枝でしなだれる 信義
 枝張って隣の苦情聞くみかん 雅風
 どの枝もたわわな秋に感謝する 重人
 枝に巣箱野鳥へ子等の思いやり 悠児
 枝打ちのショーあり里の村おこし 四郎
 枯枝に銀鈴を盛る風の声 どんたく
 バランスへ一枝足した水墨画 京子
 南天の枝小鳥にもある好き嫌い 文
 剪る伐らぬ怖い話は梅の枝 美代子
 親の血が枝の孫まで似て流れ 秋人
 早春の枝に生命がもえはじめ 元江
 舞い終えて造花の枝をねり戻し 早苗
 鶯も絵になる枝を選んで来る 露児
 姦しく枝を鳴らして冬厳し 洛醉
 飽食の枝は嵐にすぐ折れる 諷云児

鳩にすら三枝の礼はあるものを 虹江
 幸せな枝へ小鳥が鳴きに来る 典子
 天辺の枝に絵になる木守柿 テル
 来年の枝太陽へぐんと伸び 可住
 針金の責に耐えてる松の枝 芳水
 さざんかの枝へ戸惑う花 博子
 木枯しに裸の枝を凜と張る よし津
 一枝を生かす師匠の花 鋏 清芳
 飛びついた枝不覚にも枯れていた 理恵
 枝ゆする猿も欲求不満なの 繁男
 道幅に枝を揃える並木路 明水
 持ちあげて枝振りを見る夜店の灯 古都路
 根のことは忘れた枝の赤い花 正子
 枯野ゆく闇物の怪を宿す枝 高夫
 佐助の一枝が部屋を冬にする 正坊
 枝豆をキヤッシュカード買っている 狸村
 雪づりに枝が過保護を嘆いている 章久
 枝ぶりへ腕組み直し動かない 姫子
 暖冬に心許した枝の悔い 知恵子
 知恵のある枝の主張に負けて置く 雄々
 人
 枝先で尺取り進退考える 多賀子
 地
 花に似ずはげしき性よ梅の枝 さとみ
 天
 北向きの枝にわが身をみてしまふ 保州
 軸
 ここへこう添えよと妻の出す小枝

舞

真喜内 實選

我をひとつ捨てると舞いの型になり ただし
 けがれなき空で子供の風が舞う たつみ
 千羽鶴空に舞いたい夢を持つ 清芳
 生きるすべ舞う外はないコマである 佳雲
 子育てで踊り忘れた舞扇 良江
 舞い戻り賀状はつと疲れ気味 太一郎
 あかぎれの手が豊作の音頭とる 喬水
 牡丹雪舞えばおとうは里を出る 高明
 白鳥になかなかなれぬトージューズ 重人
 一生かけて舞ってみせますあなたには 辰江
 雪が舞う夫婦で舐めているシユガー 喜与志
 舞うことの上手な母の貯金箱 規不風
 笛の音に蛇飄々と舞って出る どんたく
 同じ風舞い上がる風落ちるタコ 志重
 折り鶴はきつと祈りの中で舞う 早苗
 枯葉舞うひと葉が一つ詩こぼす 高子
 見えずいた世辞に舞いますピエロです 遊光
 大空を舞うこと知らぬ寺の鳩 明水
 子育てのてんでこ舞が華だった 多織
 鷗舞う蛙が帰って来た合図 露児
 酔う女今宵これにて舞い終う 秀峰
 小さくても蝶が来て舞う家の庭 弘朗

粉雪の舞う日は豆腐売切れる
登山客迎えるトンビ高く舞う
鬼瓦時には舞いたいこともある
親心陰で大きく舞って見せ
達者です今日も私の色で舞う
舞い終えた神人間の面をつけ
満足の笑顔の底に舞いがある
舞台から降りたピエロは笑わない
おだてるとすぐに舞いだす影法師
放された小鳥舞いつつ去って行く
舞いながら生きる他なし水すまし
花の種どこまで運ぶ風は舞う
恋しさに拍車をかけて雪は舞う
縁談急くな女の果報天で舞う
振り舞うて見たが所詮は青い米

サワ子
進
信義
惠美
元江
秋人
政敏
保州
みね
巡歩
和香子
かなめ
島

佳

脱ぎ捨てて自然の儘に軽く舞う
天手古舞の人間を見る針の穴
母の舞う姿は一度より知らず
子の笛でいつか舞いたい母の夢
いい主人ですよと妻は舞い稽古

木魚
有一朗
三五郎

舞いながら花びら心決めている
妻や子に見せてはならぬ修羅の舞
にっこりとお辞儀をすれば雪が舞う

三十年舞っても余る夫の視野

唇

川崎秋女選

唇が豊かで金婚式迎う
潤いを残してこそその唇よ
ほろ酔いのグラスに熱い紅のあと
国会の唇嘘がお好きまし
唇を試って嘘はつきません
意地悪がシャツに残したキスマーク
唇を自爆しそうな色に塗り
愛のない唇でいいならあげる
唇がお迎えにゆく父の酒

治

唇がわなわな怖い事言うぞ
唇が独り歩きをして困る
唇のもう外濠は埋めたり
財布開けるたびにちびる尖らせる
すぐそこにある唇が奪えない
食べて喋ってその上歌う唇よ
奪われたころの唇なつかしみ
デート三回女に唇奪われる
それ以上言うな唇塞がれる
唇を塗って喜劇の顔を描く
唇を塗ってピエロの顔ができ
それは薄い唇でした風の私語
唇を噛んで情の字に負ける

早苗
サワ子
三五島
はるお
素身郎
美代子
弘朗
みね
都姫子
博友
明水
枯梢
遊光

規不風
喜与志
純子
静子
ただし
主坊
多織

ときめきの朝唇が濡れている
生きて行く唇にうた忘れない
酒とろり女の唇がほぐれ出す
唇にそつとあなたの指をのせ
唇の軽さに負けてから無口
唇に合わぬカタカナ多すぎる
唇にうた 唇に詩は捨てぬ
口紅を引いて女を取り戻す
唇が寒い本音を言えない日
正論が言えず唇乾き出す
唇をかんで次郎が起き上がる
嘘ついた唇真実知っている
言いすぎた唇を噛むほぞを噛む
唇の色まで憎い二枚舌
唇が忘れていないりんこの唄

佳

乳吸うて無垢なるものの重たさよ
唇に何時も唄ある母が好き
別れ話へ真一文字に引くルージュ
唇を許してからの雪さんさ
モナリザの微笑 唇閉じたまま

あやめ
テル
公一
螢
正坊

唇を噛んで尾灯を追っている
くちびるへ飲みつくせない海がある
唇を合わせてからの物語

勝美
雄々
重人

黒川 紫香
尼崎市文化功労賞受賞記念

本社 一月句会

一月七日(土) 午後六時

メنزブファツションセンター

本年初の一月句会は、天皇崩御の日にあたり、奇しくも「昭和」最後の本社句会となった。着席した出席者一同は、開会に先立って亡き陛下のご冥福を祈って黙禱。恒例の月間賞杯永久保持者(西出楓葉)、本社句会全出席者(38名)の表彰に次いで愛染帖賞、茴香の花賞受賞者に賞杯が授与された。

おはなしは阿萬萬の氏。この日の主役である黒川紫香氏の若き日のエピソードや『川柳雑誌』時代の句を引用しながら長い川柳生活と濃厚で洒脱な人柄を紹介、披露にあたっても祝辞や謝辞が述べられた。

月間賞は若佐タジ吉氏が獲得 (正)
(進行) 柳宏子 (受付) みつ子・いわゑ

(記録) 射月芳・月子

出席者 紫香・小路・笛生・太茂津・悦郎

武庫坊・年代・はつ絵・芳子・柳宏子・佳秋
あいき・博泉・みつ子・いわゑ・柳影・眉水
金太・颯云児・しげお・美房・千秀・正子・
萬的・杜的・白漢子・狂虎・小林英子・喜風
勝美・すすむ・敏・メ女・章久・庸佑・狸村
正坊・重人・恭昌・満津子・典子・冬葉・吐
来・寿美・楓葉・隆二・勝晴・安藤寿美子・
東雲・幸・俊平・好啓・薫風・柳伸・山久・
利武・池田寿美子・智子・憲太郎・章・福本
英子・三男・栞・翠公・文子・射月芳・タン
吉・おさむ・弥生・外吉・規不風・登志代・
仙吉・文秋・英王子・度・昭子・美代子・岳
人・美津留・形水・頂留子・雀踊子・優美・
二二三・月子・天笑・寿子

席題「えくぼ」

松原寿子選

人生色いろ男もえくぼネタにする 佳秋
おたやんの敵も味方もないえくぼ 寿美
浅いえくぼに愛がこぼれて夕焼ける 武庫坊
運のない夫婦の持っているえくぼ 俊平
神様のいたずら一つきりの片えくぼ メ女
大吉のみくじにえくぼが深くなる 眉水
とろけそうなえくぼできついことを言う三男
ありがとつ言えるえくぼがとつある 柳伸
美人でもないがえくぼがひきつける 笛生
指切りへえくぼで返事してくれる しげお
友達を沢山もっているえくぼ 智子
冬母えくぼを隠す事はない 狂虎
日本海かもめがよんでる片えくぼ 文子

おたやんのえくぼに何度も救われる 柳宏子
照れくさくなるとエクボをなでている 博泉
しめつばい話へえくぼ出したまま 山久
片えくぼ男へうそをついている しげお
すねている頬にえくぼが出て困る 俊平
春の子感えくぼの人をあたためる 正子
にくいこと言うてえくぼは笑つてる 博泉
俄雨峠を越えて来たえくぼ 岳人
負け犬になつてもえくぼわすれない 山久
松ぼつくりもえくぼも好かれ年を越す 好啓
傘寿を過ぎて笑くぼつてもチャミング 福本英子
再会のえくぼやさしい瞳が濡れる 正子
愛深くえくぼに溜つて来る血潮 規不風
母ちゃんのえくぼへなにもかも喋る 月子
あとけないえくぼにひどい目に逢つた 外吉
女の野望に騙されてたえくぼ 悦郎
男運よいとは限らないえくぼ 楓葉
どう見ても笑くぼと見えぬのに惚れる 美房
モナリザにえくぼを書いてみたくなる いわゑ
愛を得てからのえくぼに艶がある 幸
女のえくぼに死金つかわさず 雀踊子
或る予感えくぼに心許すまい 翠公
逢えば安らぐ深いえくぼが待っている 太茂津
それなりの希望があつて片えくぼ はつ絵
木枯らしが吹いてえくぼをさらわれる 幸
逢いにゆく森にえくぼを置いて来る 規不風
税務署をけむりに巻いた片えくぼ 憲太郎
受け流す言葉へ笑窪そえておく 寿子

席題「一」

橘高薫風選

哀悼や一椀の水召されずに
 一日の重さ昭和の幕閉じる
 平成に平和を願う第一歩
 一巻の昭和絵巻を語りつぐ
 昭和史よ嗚呼一本の樹が枯れる
 一番先に笑ってしまふのは私
 決心を一番先に亡母へ言う
 一番前にならんでるのはいつも父
 がしたたれ猪口一杯に赤くなる
 一番星初心をいつも胸に置く
 一步一歩背に重荷の入試の日
 隣の子いつも一番とつてくる
 一番を喜んでるのはママの方
 一聞いて十知る男に頼まれる
 一步ずつ近づいて来る恋仇
 一の矢は打診の積りのを外れ
 甘い汁一も二もなく蝶になる
 かがり火をたいて一人のひとを待つ
 一番の背中孤独がかくせない
 飲む話一番先に来ています
 一言が心にしみる友の酒
 命名に老父の一字がずっしりと
 哀しい日のネガ一枚が捨てられず
 千羽鶴一羽は黒い彩で折る
 一週間届けそびれた旅みやげ
 釘一つ打てぬ男がついてくる
 首塚へポツンと一つはなれ雲

大茂津 吐来 武庫坊 寿美 芳子 智子
 度 眉水 みつ子 章久 しげお 典子 柳宏子 外吉 佳秋 一二三 いわゑ 楓 楽 安藤寿美子 諷云児 柳影 芳子 俊平 英壬子 美代子 萬的

一本の煙草突きさし戻らない
 一げんの客にも温い酒を注ぐ
 ジョーカーの一枚だけが手に残る
 漁り船一つ一つは生活の灯
 後もどりして一言を置くなさけ
 一番のうしろで野心抱いている
 一本の藁をつかんでから迷う
 負けいくさ櫛の歯一本ずつ欠ける
 妻の留守一足す一を考へる
 一の字を書いて心を鎮めよう
 一と書く睡りを深くする為に
 六十の手習い一になんぎする
 一本の指政治家は金に見え
 一の字が書けて満足して眠る

紫香 おさむ いわゑ 悦郎 女 楓 雀踊子 射月芳 度 智子 狂虎 智子 美房 薫風 外吉 敏 諷云児 荒介 文秋 いわゑ 隆二 満津子 正坊 小鹿 耕花 千秀 白浜子

残り香を残しきれいに訣れよう
 移り香をたのしんでいる宵の月
 シヤネル5 駅で立食いそばする
 香水に縁ない女よく眠る
 薬局で買った有馬の湯の香り
 れもん香る春の子感をあためる
 香水を振って忘れる愛の飢え
 香を焚いて合掌の女美しい
 耕せば手からこぼれる土の香よ
 水仙が香り合格通知来る
 林檎箱の底でりんごが熟れている
 沈丁花春のトップをきる香り
 木屋の香る家だよすぐ分かる
 小引出しにおんなの香り溜めている
 香水もつけぬ若さが売りものだ
 振り向いて美女の香りを確かめる
 香水を変えて男を待っている
 味噌汁の香り戦さの朝である
 お見舞いのリンゴの香りにむせました
 新刊の本の香りを愛すなり
 白粥の香のあわあわと人を恋う
 陽なた臭い香りで孫の内緒言
 妻の香をいとしとおもう傘の中
 年号が変り松の香にむせる
 コーヒーの香り小さな店でよい
 蓋取れば朝の香りの湯気が立つ
 甘い香の中で苺を詰めている
 思い出を重ねひとりの香をたく

幸 吐来 千秀 安藤寿美子 章 正子 瑞枝 勝美 年代 みつ子 千代 文秋 柳影 正子 妻子 敏 武庫坊 ダン吉 敏 智子 俊平 杜的 俊平 柳伸 笛生 東雲 笛生 紫香

兼題「紫」

西口 いわゑ 選

線香は紫色の私語を持つ
うなじにも映える桔梗の染め上がり
片隅で権利を主張する紫煙
蓮華田に寝て紫を皆もらう
むらさきの衣装で赤い爪をとぐ
紫が好きで昭和を見送りぬ
旅の果て紫色の風と逢う
紫着てひととき額田王になる
紫の玉が出ました大当り
紫煙舞う互いの肚をさぐり合う
むらさきの衣一閃無の一字
幽玄の炎が紫色にゆれ
男心は深い紫色にゆた
はんなりと着て紫に身をあすけ
紫の袂紗今日から姑になる
紫の想い出つむぐ一人旅
紫のストール僕の彼女です
紫立つ男一びきなに思つ
亡母が残したたった一つのアメジスト
紫の彩に古代の恋がある
紫の似合う女と御堂筋
紫蘇うえて当分ここに住むつもり
紫が匂う王朝絵巻の美
バイオの世真冬を茄子の濃紫
龍胆に亡母想う日の濃紫
リラの花匂う頃にはまた逢おう
一皮むけた女に紫よく似合う

紫は人を愛するとき匂う
ときめきを秘めて紫静かなり
紫煙吸う風流人は駅の隅
愛された日がよみがえる濃紫
助六の結ぶ紫十八番
紫が似合う女の細面
一人住み冬のすみれと話してる
思い出に紫似合う女が生き
紫の帛紗で国壓受け継がれ
あす平成元年なりし紫よ
一合を炊いても夢はむらさきに
紫の袂紗に義理が多すぎる
うす紫もやの彼方にある明日
紫は鬱と華やく顔を持つ

兼題「川」

河内天笑 選

素晴しい名君だった初春の川
貧しいが空気も川も澄んでいる
旅に出て川の名三つほど覚え
川と海とけ合う場所にしたカモメ
人情の深さで川が澄んでいる
川の名が変わるあたりは雪になる
冬かもめお前も川が好きなのか
川理めて橋の名だけが残る街
故郷の小川綺麗に生きていた
リハビリーに大川端の道歩く
洗濯をする川がないおばあさん
川口で桃を待ってるおじいさん
私も鮭も生まれた川を恋う

お玉杓子リズムにのせる春の川
人生の浅瀬をさぐる気の弱り
ひねくれないが川は蛇行する
桃の流れる川を探しに出かけよう
ふるりに悲しみ流す川がある
成り行きにまかせて渡る夜の川
権力が川を堰止めようとする
滔ととう川は流れてひとつの計
心の川に薄い氷が張ってくる
病葉になって川の長さ確かめに
モンロー忌川は水嵩増えてきた
人間のエゴが悲しくなった川
冬枯れの川に油断をしてしまふ
川涸れて母の言葉が伝わらぬ
川下の噂へすこしうとくなる
川の深さ正直者に聴いておく
川上に上ると真相が判る
男を沈める川が光っている真冬
歩き続けて春の小川にまだ着かぬ
山川草木ウオンウオン泣いて黒い川
古い鱗を剥がす川向うと決める
大阪やここでも川が貌を出す
川ひとつ隔てて絵馬をさげにゆく
川下に棲んでお世辞がうまくなる
六十の不倫は川の手前まで
寅さんの笑いへ川は澄んでいる
川下にうまい話は届かない
悠久の川昭和から平成へ

兼題「黒」 西尾 菜選

黒い噂聞いても好きに変わりなし
先生が気になる黒いクレヨン画
鬱性という訳でない黒眼鏡
粧いは黒しがらみを断ち切って
原点のおしゃれにかえり黒を着る
黒帳簿抱いて幸福とは見えず
黒眼鏡の先生だったという記憶
平成の世に降らせてならぬ黒い雨
黒幕といわれて朝から飲んでる
火の恋をつつむ女の黒すくめ
冬の星黒い瞳を濡らすなよ
黒いからすを黒いと言って都落ち
黒石を握って世事に長けている

いわゑ 翠水 芳水 杜的 おさむ 悦郎 妻子 楓楽 勝晴 翠公 狂虎 吐来

■特別募集吟 電気製品

河内天笑選

「麻生路郎生誕百年記念作品・資料展」会場で募集した川柳作品の投句数三四一句(九二人)の中の入選(三五句)は次のとおり(電気器具いろいろほしいものはかり 中学篤 冷蔵庫目盛を弱にして初冬 コーヒーをたのしむ朝の全自動 電気製品たんと揃えてアポロブース うさぎ小屋テレビ三台置いてます 火燧からテレビを拝む初詣で フリーザーに松茸があるお正月 留守の間に出来ていました炊飯器 ウォークマン聴いてひと駅乗り過ごし

眉水 トミ子 伴子 恭子 志洋 柳伸 楠曠 ヨウコ

黒板に目をそらしする冬木立
スタイルに自信があつて黒を着る
喪服着た帰日もパチンコする男
朝シャンの黒髪おんな匂わない
お目出度い年へ黒豆煮える音
娑婆に出て黒い土に憧れる
人脈が動く黒い渦が巻く
黒いマフラー愛に疲れた訳でない
托鉢の衣にしくれ降る越路
黒帯の裂帛女三四郎
リクルート鳥賊より黒い墨を吐く
黒髪をばっさり落す果し状
喫茶店喪服と喪服よつ喋る
黒を着ているからしゃんと背を伸ばす

正坊 武庫坊 佳秋 年代 美房 弥生 美代子 狂虎 文子 隆二 柳伸 杜的 智子

バナボラを伝い宇宙へ旅したい
CDに押され悲しいレコード派
彼の顔テレビ電話で見てみたい
ワイプロで彼の名ばかり打っている
みな寝てる冷蔵庫だけ起きている
奥さんがあくびして知っている全自動
奥さんに狂のテレビが知恵をつけ
うぐいすも鶏もマイク持ちたがり
ワイプロに夫とられてふて寝する
カラオケで家族紅白歌合戦
胎教に今日もステレオ聴かせてる
これ以上入れることないコンセント
掃除器に愚痴も吸わせて妻達者

義一 幸徳 俊子 良光 正子 頂留子 俊子 文子 孝枝 冬葉 今日子 美智子 よし津 美代子

黒焼にすると妙乗らしくなる
黒真珠悲しいことが多過ぎる
緋を裏にかさねた黒と気付かせぬ
黒持って上手に相手遊ばせる
哀悼や老兵ネクタイ黒にする
家計簿の黒は夫に見せられぬ
言訳はもう許さない黒靴
ライバルの黒髪はきつとアデランス
ブラックジョークがいっぱい溜る冬の街
黒い噂に影武者を飼ってある
黒幕の目に充分な射程距離
肚の黒いのが相槌を打っている
黒幕がやたら握手をして困り
ほのぼのと紫香う副主幹

登志代 隆二 千代 紫香 大茂津 耕花 正坊 恭昌 楓楽 雀踊子 重人 白漢子 丹吉 栗

掃除器も妻もこのごろガタがくる
僕のテレビがほしいと貯金箱 小四ひろのり
ステレオを鳴らすと踊る窓ガラス
留守番電話に胸の鼓動のため息と
新型機種主の閃き組み込まれ
ヒューズとぶほどの恋なら溺れたし
戦争のないしあわせよシャンテリア
全自動買っても母は忙しい
エアコンとこたつ脳みそ腐りそう
コインランドリーで味わう孤独感
リモコンをとるのもめんどうくさいなり
軸 コマーシャル急にポリユーム高くなり

ゲン吉 頼子 純子 寿保 明子 民子 英子 久子 拓生 ヨウコ 天笑

老地神壇

毎月25日締切厳守。一人一句、雅号を含めて20字まで。
担当・玉置重人

八尾市民館川柳教室(1月分) 高杉鬼遊報

山里は騒音なくて寝つかれず
雑音の混じる玉音聴くカンナ
旅の宿いびきの友を憎めない
雑音に受験の親がノイローゼ
騒音をさけて山里滝の音
ブルドーザー遠慮をしない造成地
雑音になるからわたしたまってる
雑音に慣れて三猿拘らず
雑音を嫉妬ときめて葬ろう
雑音も聞こえて来ます親族会
遊園地の雑音のなか菊を賞で
株式の雑音きいて損をする
雑音が無くしてさびしいみんな留守
嫁がせし娘の雑音を受け流す
雑音の中に生きてる老いひとり
雑音に背を向けている石仏
隠居所の母雑音を聞いており
雑音の中でスターの座を守る
瀬戸の島今日も列車の音がする
スイッチをひねると雑音だけ聞こえ

泰成 英一 友一 はる 龍襄 トシエ 市子 初子 百子 道子 春子 幸枝 恵子 君江 弘直 シマ子 信一 一 章 一 子

川柳化粧槽

植村寄遊子選

欲の皮チラリと見せる形見分け
山紅葉操を通す常緑樹
凡人にまた来年があるゆとり
幸せは料理と裁縫うまい妻
お気軽にお越しやすとは買わせる気
肩書が変わる足音まで変わる
好きになった罪は貴女が美しい
馬鹿になり利口にもなりする同居
盃の底で本音が浮き沈み
言い訳はしないが一人では濡れぬ
金蘭寺孫には一向興味なし
見送りの孫へ手を振り涙拭く
タイエツトへ孫の残飯多過ぎる
沈黙が守れず月へ話しかけ
クラス会残り火たぎるバスツアー
砂浜に別れた人の絵を埋める
チャンネルをゆずってくられて孫静か
久方の五色の虹に老い見惚れ
文藝に慰問文胸躍る
リフト乗るだけのスキーに行きたがる

にた川柳会

西村 早苗報

考えおくと役所の専用語
さまざまな仕事ぬすんで芸が出来
叱り度いところ言葉の端で撫で
約束の間にあいそうな空車くる
叩き売り鯖とサンマがよく売れる
リクルート知人がいれば良かったな
義理一つ果して老いの深呼吸
冬が来る風が口笛吹きながら
若い気ているが白髪増えてくる

岳詩 葉香 紅月 秋月 白山 大鷹 三青 礎石 悲子 とし みつこ 遊光 遊峰 輝月 瑞穂 永楽 五幸 客遊子 節郎 節子 よし子 ちづ 忠子 弘幸 重一 哲三 一波

耳かゆい誰か噂して居るらし
講演会前へ詰めてと整理され
ふるりの味配達さんに届けられ
土地売った金が家庭を振り回し
ブライドが職安の門叩きかぬ
詰め込んだ法話の抜け右の耳
スーツ縫う妻 外孫のためだけに
天皇制反対あなたはこの人
子の日記夢いっぱい青い鳥
リクルートどこに飛火がいくのやら
鈴なりの柿に絵になる彩貫う
中年太り勝手気儘の謳歌振り
衣食住足りてぬくもり失せた街
実家には嫁がいいので柿がくる
今度来た課長机の向きを変え
頂上を目指して歩き出す蟻か
育ち行く孫との距離が日毎伸ぶ
残り火を煽ってくれる風を待つ
いざという時に伝統ものを言う
忘れ上手な母の瞳が笑ってる
土曜日のお誘いへのロードショー

城北川柳会

神夏機典子報

民ならは灰にならって居る下血
菊一輪たむけて安らぐ老いの朝
初詣で龍頭蛇尾になる誓い
一枝がちよっとすねてる乙な松
夫が張る帆かけ舟なら乗ってみる
こんないい月を知らずにいた雨戸
フェアブレイ誓って球追う草野球
生きている限り離れぬ欲と影
身内より近い隣に世話になる

紫泉 秀子 冬明 夢醉 花子 きみえ 宗光 巡歩 雪代 多賀子 裕 鉄花人 雪子 登美也 寿美子 愚童 雄々 弘朗 雀踊子 早苗 閑石 閑子 倫子 文子 八重子 テルミ 白峰 陽 一 子

待望の車凶器の不安乗せ

ネックレスつけてすこし若くする
気になった事一つすみ今日が暮れ
悠々自適当人あての無い老後

民話聞く土鈴も秋の顔になる
浮草に埋もれ廃舟の昼下り
駆引が上手でセールス唸らせる

頬を染め霜になじんだ秋うるし
奪われた心へ秋の夜が長い
禁煙の誓い空しく二度三度

急ぐのに公衆電話待つ長さ
結婚の誓いに浮気言い忘れ
誓いは反省多き吾が一生

禁煙を誓ったけれどもう一本
レンタルに話まとめて七五三
住所録出し賀状書くおつき合

ひと言に枯淡の味がくおつき合
約手まだ思案のつかぬ虫を聞く
ロスの娘と話す時計の速い針

風上で野次馬保険の事に触れ
伝え得ぬもどかしさあり五七五
愚痴らない誓いへ疼く親知らず

座禪中仏の私語が聞えそう
川柳塔あおもり 波多野五楽庵報

大正の妻には捨てる物がない
秘書を捨てわが身を守る黒トカゲ
ミスをした仕事の憂さを酒に捨て

捨て台詞どこか憎めぬ人のよさ
捨てられたその地も良しと根張る草
捨て猫の泣き声せわし過疎の村

捨てばちな心にサボテン花つける

トキワ

静子

寿美礼
新一郎
達子

ただし
温子
佐津乃

典子
秀夫
午郎

よし子
輝子
きみ子

市郎
登美子
静歩

公一
満津子
千恵子

純子
右近

ただお
喜衛
花峯

つる
実
つとむ

和香子

捨てばちな言葉が母を眠らせず
捨てられた粗大ゴミにも意地がある
捨てがたい軍手を干している冬日

あの日から図太い貌の秘書となる
町内に一人図太い奴がいる
富田林富柳会

直感で挨拶の裏知りました
仲裁も若い固さに閉口だ
地図もって西国巡り過去を消す

夫も喰わぬ仲裁仲人の出幕
行き先は盲導犬の地図にある
狭くとも平和がつづく日本地図

仲裁へむし返される袖だたみ
温かい母の乳房にある眠り
乳房まで見せてあげくの採用

愛情の極み乳房にある重み
直感が火花散らしている見合
うぬぼれの夫婦に仲裁口出さず

迷路から出ると乳房がまだゆれる
仲裁にはいつてもつれる二枚舌
東大阪市民川柳会

森下
力などない母さんにしがみつ
秋風へ悟空の力はしくなる
照見五蘊うちなる力沸いてくる

英雄は女とまがう美少年
錠剤が一つヒーローの掌の中に
ヒーローの息整わぬままマイク

木枯しも雨もあしたの情け待つ
てのひらの情けを少しずつ分ける
覇者の指す方へながれていく風よ

幻想の中で聞こえる風の柳

五楽庵

一花
彩人
甲吉

池
森子報

花子
静枝
昭水

昭勇
智久
曲ん手

文次
莊次
美久子

花梢
岳人
森子

愛論報
シマ子
白洋

つとむ
帆船
恒明

寿界
美幸
潮風

十歩
敬吉郎

群の中で居すわる大胆な悟り
雑草になれよ群れから逃げるなよ
一番小さな群れがホントの事を言う

あんな良いおひとへなんで捨て台詞
鼻先の札束人の道捨てる
切り札を捨てると女強くなる

秋風に響くジョークを捜さねば
賑やかな男の寂しい私生活
若い気でいても眩しい力瘤

翠洋会
人存んだ海とは見えず波静か
夫の趣味生きるの死ぬの囲碁の石

年越してアグネス論争もリクルート
兼治郎
絹子
美津枝

さと美

佳句地10選 (前月号から)

河瀬芳子報

橋のまん中で本心に気付く
飯食って来たといつも嘘を言う
本当の嘘は閻魔の前で言う

鳥の蟹みな喪に服し啄木忌
柝の音が冴える人生のふた幕目
コスモスが揺れる優柔不断だな

葱をひく遠くに塔のある景色
じわじわと真実蓋を持ち上げる
背後から一番怖い味方の矢

姿見のなかに綺麗な秋がある

良子

元紀
小路
信治

新一
楓
雀踊子

柳伸

兼治郎
絹子
美津枝

さと美

翔んだ娘のコレクトコールの長電話

七五三花かんざしが揺れている

聖書読み神の情けの深さ知る

気にかかること皆残し暮れかかる

白粉吹く晴雨がわかる吊し柿

夕クシーを降りて撮した高野槇

勲章をもろた吉兆に縁がない

リミットへことさら速い砂時計

我が人生可も不可もなく乾杯す

ご平癒を祈り賀状に筆おろす

伸びきったゴムにもちぢむ意地がある

乾杯のグラスを運ぶ無表情

波立ちぬ海を見つめて坂下りる

献血たちの偉大さをとくと知る

妻子にも言えぬ話を友とする

恋文は来ず納税督促書

学校が嫌いで皿を割ってやる

川柳塔からつ佐志教室 浜本

男なら火遊びなんぞやめ給え

白人も黒人たちも同じ影

道草も喰つていろはも覚えたり

真珠玉涙のようであされる

来る人もなく玉豆を独り酌む

初霜やゴムに衣を着せてやり

端然と白扇さして初詣で

年賀ハガキ自粛に迷い買い控え

老いし妻エプロンはずし雑煮祝ぐ

有難や米喰う虫へ稲の出来

リユウマチの薬と真心共に受く

電気毛布に五欲忘れて児に還り

久世川柳クラブ

二宗 吟平報

恭昌

文子

すすむ

春子

東雲

君子

英一

楓楽

為子

良江

照子

光子

みつ子

綾子

登志実

いつを

鬼遊

義美報

百万両

万亀子

茂坊

三枝子

喜久夫

冬子

紀一

順子

治幸

紫泉

ちよ

義美

芒には野菊が似合う窓の月

パソコンの指がワルツを踊ってる

コスモスの乱れ小さな秋たたむ

コスモスの笑顔に迷う花鏡

美しく老いて余生を温める

失意の日不安遮断器をおろす

手の内を教えた弟子に今日は負け

笹茂る屋敷の跡にしばし立ち

布団洗濯田舎の母に来てもらい

美作のルーツ求めて旧街道

このようになったルーツは忘れよう

蝦夷ルーツ ロマンを探る旅に立ち

苔むした墓にわが家のルーツ知る

水枯れたルーツを語るタムの底

病弊のルーツにメスの手が入り

六十になり幸せの夢を追いつ

定年になって六十向きをかえ

親指が六つに使えるセリり市場

六十を過ぎて手習い呆け防止

六感で分かれど追及せず耐え

六高下駄黒いマントで風を切り

メロデーは愛宕の知らず明けの六つ

六十路坂仲睦まじい夫婦独楽

六文銭真田軍記の夢の跡

尾瀬を行く夢六月に目をさまし

押しみてレベールが違ふなと思ひ

静岡市川柳塔同好会 永倉

鍋底の景気年金慌て出す

どんな夢見てるか孫のいい寝顔

控え目の妻へ娘の吹く喇叭

自慢して己の価値を値踏みされ

ひろ子

山人

さわゑ

ふさえ

江山

明子

静香

知代子

邦人

藤江

甫正

保恒

秀香

志重

美恵子

虞人

千代女

禅心

光水

つゆ草

雅紅

吟平

伊久栄

半仙

つた子

賛平

僕川報

僕川

弧秀

晃授

金吾

孫抱いた妻に按摩をせがまれる

叱られた事がない子の不仕合せ

怒っても顔に出さない妻の勝ち

酒の酔い借りに威張るは卑怯者

味付けは祖母が自慢の鍋料理

芸盗み師匠に出来を褒められる

諦めた日に電話くるいい知らせ

ほろ酔いの気分になってみたい酒

情報と札東動く闇の影

雲隠れ気を利かしてか十三夜

酔うほどに空威張りする憎い奴

暫くは伏せておいてといひ話

軽い怪我よかつた他人軽う言う

ゲートボール冒険好きと確実派

二人来て笑いつぱい置いて行き

佐川川柳 赤川

コスモスがゆれて疑惑の風が吹く

北風の中へ駆けてく野球帽

風船の思惑風に乗る始め

火吹き竹未だ現役の過疎の里

別居して他人の顔になつてゆく

本妻とは別居めかけとは同居

親友の別居話がかつてつまる

病む日々へ別居が続く通い妻

別居した親子の谷へ孫の橋

別居する条件つきで嫁が来る

川柳高知 川竹

秋深しまった答案を読み返し

身にいたい子の綴り方読み返し

新聞を何回も読む定年後

松風報

紀代志

芳男

猛

たま

たき

千代

つね

きん

きぬ

まつゑ

三津子

久子

みつ

静房

江

菊野報

千恵子

トヨ子

天花

一求

稔夫

十面子

恒一

憲一

功

一郎

菊野

幸泉

竹萌

一求

朝市で三文の得手に余り
隣から秋が突った声がある
忍従の顔した妻に操られ
筆太に空に向つて鏡を書く
プライトを持ってと鏡に叱られる
灯台をどうどう巡りする夫婦

むらくも川柳会 藤井 明朗報

東大は高嶺の花の希望校
産声に思わず笑顔希望燃ゆ
茶柱に縁起たくして靴を履く
恩師より禿げて笑いの的になり
望まれて嫁に行きます幸せに
パン喰いの競走見て大笑い
出稼きの父が帰って笑い声
進学へ亡父の分まで望みかけ
来る年へ望み大きい晦日そば
朝一番縁起をかつぐ女客
すこやかで笑顔の揃う夕餉の灯
果てるまで足腰達者を希望する
お茶の会すんで賑やか笑い声
ゲートボールうまさまさこに飛ぶ笑い
初笑い孫の笑顔に邪気もなし
追い羽根の音ききながら寝正月
過ぎし日の夢追いながら秋の暮れ
夢も希望もせて風船大空へ
無事祈る空に消えゆく渡り鳥
天気予報まともはずれた秋の空
夕焼けの空は明日へ夢をのせ
音もせずジェット機空に雲残し
大空へみんなはきたい胸の内
コスモスが揺れてさわか秋の空

吉朗 小鹿 八太朗 康子 弘朗 とみお 義良 武衛 ヤス子 文子 カツ子 秀子 巡歩 常子 島子 一葉 林蔵 竹乃 千里 藤子 幸夫 みどり 福子 幸子 梅園 峰雪 ゆき子 三津江 克子 ふみ女

森林浴空から木洩れ陽深呼吸
飛行雲真一文字に空へ描く
運動会太鼓のひびき空に舞い
空高く手を数えて母徳に
空模様手順よく舞う農作業
ワープロのリズム単調秋夜長
山坂をしのいで余生まんなるい
秋夜長思い出たどる夜の雨
火祭りで無病息災祈る寺
町おこしさくら太鼓のひびく夜
山々の紅葉絵心かりたてる
それその秋を拾いに山歩き
一人来てくるり笑いの座にかわり
母さんが笑うと温い部屋になり
十二月笑い納めるそばの味
川柳塔唐津支部 久保 正敏報

清祥 蚊声 なつ美 昌子 昭子 保子 壽 ざくら 八重子 ふさえ 節江 芳朗 明朗 四郎 虹汀 幸夫 旭恒 朴竜 高明 タミ 正敏 勝一 多賀子 一郎 芳子 作二郎

長男にみんな委した庭の石
裏返しぬくい座布団すめられ
最後まで裏方でした母が逝く
裏の裏生新入類さうこれあひーに
岩塩を抜き抜くルージュあーに
清め塩踏んで悲しさ又つものる
塩吹いた蛙の辛さよ母の唄
夫婦仲日毎に塩がうすれゆく
塩蛙が一本つきますバスツア
清め塩ふれば哀しみ風に抜け
言い訳を言わぬ塩が白すぎる
塩つばの嫁に届かぬ位置である
塩の道信濃は早い冬になる
善人の楽しみなせか浪花節
恋は楽しいだけのものではないと知り
少量を楽しみ一人飲んで
夕焼けの唄と歩いて道楽し
山彦へ楽しい声しか届かない
天ぶらうどんエビは最後に残しとく
小紋みる如し紅葉の苔の彩
風のうちに別れて行つたあの二人
火事の鐘下駄とサンダル履いて出る
止まり木に男の愚痴がぶら下がる
嘘ひとつ言えない今日の掌を洗う
昔でない今生きている者同士
弟よ不幸な年もあとわずか
急行通過紅葉が散つただけの駅
お迎えを待っているとは老いの嘘
生き延びてひとり飲んでる誕生日
こない話はないと二度三度
男とは何か読んでる眠つてる

しげお 越子 栄 百合子 稲子 栄子 静江 泰弘 房子 よ志子 美智子 英子 紫香 真笑 俊作 武茂 如洲 白溪子 花代子 行平 春風 紅陽 遊美 年代 萬的 陽露子 とおる 暢子 杜的

妻と秘書居ればこの世は抜けられる
兵馬備前はみんないくさ好き
いかほどの罪を犯せし石地藏

大原川柳社

小林

妻予報

強運な女に両手に百にぎり
四畳半小さな女と共に寝る
ほろ苦い逆境にある人間味
夢買いに魅は弾んで行つたまま
レモンティー冷えて心にすさま風
優しさと強さ女は使いわけ
野良仕事残して師走風が吹く
庄助の唄がなつかし警梯山
濡れ手で粟そんな甲斐性のない庶民
弾んでる声はどうやらいい返事
変らない味へ漬物石になる
はらはらと散る枯葉にもあるドラマ
この家も大根を干す老母が居る
花道へ年金証書という迎え
朗報の舞い込む子感菊日和
動き疲れて時には休みたい振り
百歳でお見合い弥陀と二人きり
さもあらん同じ運命の花ならば
朝の鏡に笑顔が映るかちいくさ
ジャンケンで這う約束の忘年会
コーヒールを入れるお客は嫁ませ
地下足袋はまだ気がつかぬクルート

牛尾 緑良報

川柳わかやま

京童 正坊 鬼遊
あすなろ
正子 ひでの 寿恵子
睦子 みさえ
こふゆ 敏子 正己
巴子 喜美子
たけよ 悦子
妻 子
理 恵
元 江
智 泉
玉 恵
辰 子
宮 子
みづえ
耕 花
幸
狂 虎
正 博
三 枝子

鈴木邸跡形もなし紅葉散る
藤白の皇子を偲んで鯉という
何もかも機械まかせという世代
皇子不運藤白坂に日は落ちる
七癖を補い合つて長い道
プランコに鍵つ子の影長く伸び
開病の長さはいわぬ試歩の杖
幸せの長さを計る妻が居る
長引いて会社の見舞まで途絶え
前置きの長さお金の話だな
十二月長い疎遠が融けてくる
長い道山坂越えて目出度い日
巢立つ子へ絆の長さ考える
宝くじの夢の長さよ十二月
生真面目に歩く男の長い道
八十年嘘もまこと知りつくす
夢多き少女の長い長い髪
長針の焦りへ朝が狂いだす
才長けた美女の魅力に酔う一座
吊橋の長さ途中で思案する
ひたすらに祈る陛下のご長命
親と子の対話久しい鍋の湯気
久々に深呼吸する土器漁港
久し振りに振る日に沸く石港
その笑顔久し振りだねおめでと
正月が来てかすのこと久しぶり
刃が研えて切り絵の白が動き出す
嘘がただよう女の白い頃から
枕カバーだけ白々と老い二人
何色を添えても白は拒まない
白々しい慰めなんか欲しくない

太茂津 三千代 忠
獨り居て心が白く渴いている
白い目を意識しだすと負けている
お隣の干場のシャツが白すぎる
どのように噂されても白は白
顔はどうでも七難隠す白い肌
白菊の白さが亡母を演じ切る
愛つきて木枯らし白く聞くばかり
汚れても心に白を抱いている
白だから白を通して曇りだす
切干大根の白いすだれが冬にする
許されぬ炎を裁く雪の白
元気ならよい白くても思うても
白足袋に馴染めぬ母の座りだこ
父として白い煙の過去に遺す
ひとすじの白い煙の過去がゆく
白足袋の白さ通して疲れ出す
熱も去り病床記憶白くする
白日の古文書武蔵像を切り
白バラを活けて素直さ取り戻す
久しぶりに見るとタイヤが痩せている

八尾市民川柳会 飯田 悦郎報
おでんにおでんの心得満たす味
年の市におでんの匂い風にのり
お互いの味を出し合うおでん鍋
木枯しにおでんが誘う曲り角
言い足らぬ愚痴をおでんと聞いてやる
おでん屋の親爺に惚れて終電車
人生のピンからキリを見るおでん
一つだけおでん残して宴がはて
神様の見えるあたりで手を洗う
友禪を洗う風情が消えた川

獨り居て心が白く渴いている
白い目を意識しだすと負けている
お隣の干場のシャツが白すぎる
どのように噂されても白は白
顔はどうでも七難隠す白い肌
白菊の白さが亡母を演じ切る
愛つきて木枯らし白く聞くばかり
汚れても心に白を抱いている
白だから白を通して曇りだす
切干大根の白いすだれが冬にする
許されぬ炎を裁く雪の白
元気ならよい白くても思うても
白足袋に馴染めぬ母の座りだこ
父として白い煙の過去に遺す
ひとすじの白い煙の過去がゆく
白足袋の白さ通して疲れ出す
熱も去り病床記憶白くする
白日の古文書武蔵像を切り
白バラを活けて素直さ取り戻す
久しぶりに見るとタイヤが痩せている

照子 三男 紫香
シマ子 東雲 公子
桂香 克子 信秋
萬的 寿子 杜的
芳子 白光子 好笑
柳宏子 柳太
みつ子 緑良
喜風 寛然坊
朝子 憲太郎
とみお シマ子
欣之 美津留
曲ん手 和子

吹きたらぬので二次会についてゆく
川柳塔まつえ岡崎祥月追悼句会

恒松 叮紅報

底抜けに笑えば体重軽くなる
さざ波は底のうごきをキヤツチする
底の底よんで動きがとれません
火消壺底に我慢の妻が棲む
負けてきた心の底が揺れている
底ばかり歩いた靴は乾かない
女に迫る台詞は底をつきました
腹の底握り拳が溜めてある
川底でつかんだものは離さない
歳月は人の心も変えて秋
歳月がとかしてくれたわだかまり
歳月にもまれて丸くなった石
歳月へ本音告げたい赤いバラ
歳月を数えて消せぬ火が一つ
歳月が経ってすつきりした事件
歳月がふるさとの風変えてゆく
歳月に色とりどりの風ぐるま
歳月を大切にする母の知恵
カローリをみんな逃がした鍋の焦げ
天高くカローリ表も何んのその
低カローリ食品コーナー店に出来
病み上りついカローリが過剰さみ
カローリ過剰罪と思わぬ富裕国
カローリでなんだ卒寿の母が言う
カローリがうるさい妻は栄養士
朝寝坊カローリ抜き朝を出る
カローリを計算して大福を食べている
夜の蝶にからまれている夜警

田鶴 律子 満江 昭二 弘円 馨子 たつみ ちかし 小鹿 静恵 鳳人 雄々 秀子 愚童 きみえ 登美也 操子 ノブ 静翁 清志 君江 蒼流 妻子 美進 久枝 長三

夜警にもチチロの声は届いている
恙なく腹をすかせている夜警
一服のタバコが美味い夜警明け
吹雪く日も夜警の靴の音絶えず
夜警ふつと翔が家の施錠気にかかり
気紛れに棚にはいない冬の鶯
気紛れな天気今日も左右され
気紛れな糸で釣られる雉魚もいる
家裁来て気紛れだったとも言えず
螢雪の功気紛れが首席取る
気紛れな男憎めぬものを持ち
とほけても真実の矢はさけられぬ
負け犬へ鸚鵡おとほげばかり言う
野仏のとほげ顔にも雪が降る
とほけ耳甘い話は気付け割
古傷にさわられそうだとほげ顔
故郷でとほけた顔の馬に会う
月末になるとほける鬼の面
西宮北口川柳会 松本 一郎報

文子 千代 巡歩 代仕男 荒介 与根一 米子 多賀子 青湖 日出子 舞丸 瑞枝 草丘 幸子 登志子 寿美子 叮紅 一郎報

忘れるという安らぎを許されよ
回り道してたら高い月に会う
忘れないうちに近道して帰る
若さ生む趣味身について余生無事
いたわりをたつぷり盛った白い皿
目玉商品だけでは済まぬ市場籠
ポテトチップス軽いうらみは忘れよう
そこばくの旅情ハコケシ一つ買
火種抱えて飛び出す時を狙つてる
観客が静かて科白忘れかけ
ライバルと出合い鱈を買いそこね
ハンサムな敵へ二の矢をもつ忘れ
火と水の性を沈めて黄昏る
半分の高を弟見比べる
十二月あれもこれもと買いたい気
夢を買う男の足が重そうな
甘栗を刺くとき忘れられぬ人
マイホーム買う奈良三山借景に
火だるまになって政治の是非を問う
年末も買出しツアード息を抜き
半分は覚えていないプロポーズ
忘れない人かまた逢う誘蛾灯
三通も同じ人かまた年賀状
老眼鏡三つ目を買う年の忘れ
湯豆腐で一本つけてさぐり入れ
とくに忘れた子供と出会うすべり台
あの時に買えばよかった株と土地
遠い友から冬の絵葉書温かい
カラオケの伴奏後半遅れ出し
大それた欲は望まぬ鈴を振る
半券が去年の冬のポケットに

はつ絵 伊三郎 千世子 美智子 杜的 萬的 武庫坊 佳秋 園歩 光代 白溪子 春蘭 青春珠 年代子 春子 芳子 圭坊 英芽 正坊 一坊 房一 正子 香子 作一郎 東角 定風

納得の出来ない膝が一步出る

嘘半分混ぜて断わる電話口

半分位牌が迷う遺産分け

埒もない本読む夫のちゃんちゃんこ

忘れんばだから誰とも仲が良い

おばあちゃんも忘れると二大事にされる

空半分彼女と分けた飛行雲

半分は白髪になったクラス会

千円の豆腐半丁買っておしゃれ

筋書の通り忘れて暮となる

遠く来て帰りが辛い万歩計

さらさらと木の葉しぐれか風の音

我が家にも秘書がおればと妻のグチ

敬礼の間合にはつと白い息

喝采を励みに渡る丸木橋

広い空虹半分は消えかかる

買物を駐車違反で待っている

半分を売ってくれないバック売り

屋台には傷口癒やす湯気がある

恩情を忘れる犬は八つ裂きに

巨神戦場内外で五分と五分

いくさ場の汗がよみてる作業服

お父さんお酒をやめてありがとう

揺れてゆれて吊橋私を寄せつけぬ

太陽が半分落ちた美しさ

サークル檸檬

藤田

いち抜けていかけ抜ける影法師

来年は女盛りになるつもり

気がつけば走る事ない暮しぶり

気ぜわしく走り去って行く十二月

人走るみんな走って安心す

三笑子 飄云児

実

栄

みつ子

俊子

信義

一進

文夫

公輔

千秀

ノブ

蜜拙

森生

みね

御前

猿杏

勝美

保

曲ん手

六郎太

ただし

善太郎

桔梢

紫香

泰子報

智恵子

人生を走って走って折り返し

ご不快のニュースが走る暮の街

感情に走り寝顔に詫びている

走ってはならぬならぬと走ってる

デンシモが走る走りたくなってくる

川柳たけはら

ぼはおとうさんになつたらもやしをたます

ぼくのベッドはふかふかたてぬくい

おとうとはライオンとねんねする

木のはっぱいろんないろにそまつてる

じいちゃんのスきなすもすがまたくるよ

お魚といっしょに泳いでみたいですよ

ロケットのつてうちゅうに行きたいな

運動会雨で中止という知らせ

来年は陶芸やるぞがんばるぞ

じいちゃんのおいがするよこの枕

焼きイモをするので落葉あつめます

寒いなあやっぱりこたつが一番だ

菊人形いつか自分も作りたい

ペーボール大会サービスコスびり決め

すくそこに雪が来たよというニュース

童心に還るひととき師よ友よ

ウオーミングアップ逆転打信す

冬木立の自信は愛に違いない

裏口はきらい女関ノックする

秋風が吹くとどれい旅が好き

国策や鯨捕る国救う国

登美子

美緒

良いことは良いこととして憚からず

十九歳係遅しゆうなつてくれ

島のにぎわい人の世界とよく似てる

ポーナスに縁無くなつて法話聞く

集金を待たせています長電話

無私の境亡き人達が来て遊ぶ

目度ささは皆の顔に落成日

ストレスをゲートの球でふきとばす

夕焼けに明日への希望満たされる

腹からの声思いきり出してみる

有頂天他人の笑い知らぬまま

いつか炎になるかも知れぬ文を書く

ちよつといいこと抱いてりんごの皮をむく

絵心をかきたてて行く山の紅

双生児の主張が少しずつ違つ

インターホンなかなか財布見つからぬ

菜を洗つとても楽しいこと思つ

悪政を斬る一本のペンを持つ

迷い道いつかの夢で見たような

ジョギングをして珈琲がうまい朝

気をつけておくれ大黒柱だよ

早出残業僕の病気はどこへいった

三回目いい占いがやつと出た

満月へ愛の告白出来ますか

踏みしめる大地は土のままがよい

女秋アンバランスな位置に座す

休耕田墓石の声を聞き流す

浪子

雪子

千年杖

喜久恵

ふさ枝

清水

光恵

千恵

ヤスエ

一枝

静風

比呂子

太虚

笑子

愛恵

栄恵

のぼら

貞子

千代美

房子

静火

一路

節夫

康子

令子

博子

淑子

川柳大版

山下美津留報

迷うのはよそう私は私です
 柿みかん買うことの無いお付き合い
 菊香る文化に遠きリクルート
 暴走の若さが哀れ路傍の碑
 霜踏んで新聞少年大志抱く
 留守番の鉢植え枯れた今朝の霜
 男前浮いた話もなく肉気
 神様も職業的な色を出し
 神仏そして己も信じ生く
 神様も賽銭次第吉と凶
 生き神も下血をしたら神だより
 キリスト様もクリスマスには駆り出され
 神様へ飲む打つ買うを頼みます
 煙突よ冬の裸は寒かろう
 煙突を一つ残して地上げされ
 大漁の秋刀魚羨む松葉がに
 目が見える故に哀しい事もある
 此の口が自分を哀れにしてしまつ
 すばらしい月が浮いてる水溜り
 洗好み浮いた話も二つ三つ
 人を切る話私も又切られ
 算術が上手で立派な医院立ち
 廃村の哀史を沈めダム光る
 例えばと言う話には要注意
 神様が慌てて逃げだす暴走車
 公害を吐いて煙突嫌われる
 妻の掌にポツカリ浮いている私
 年金で哀れな列に並びそう

重人 与呂志 本蔭棒 洛醉 喜醉 宙宙 鈍泉 喜楽 哲流 神兵 遊心 もとみ 一歩 河南子 柳弘 正之 笑風 亮太 雅集 比呂志 千流 希久志 鉄心 金太 敏 美津留 武助報 喜久子

幸せは喧嘩相手がまだ達者
 柿の木がビルの谷間で老いている
 老眼鏡よけいなものは見ないよう
 六角の死角であくどい爪をとぐ
 思い出がほしく昨日の道へゆく
 ご快癒を祈る自粛の手を合わせ
 接触の傷でもめてる駐車場
 また墜ちた空は嫌です汽車で行く
 指切りの誓いが生きる童唄
 親の役子の役すんで老いを待つ
 解るまで待とう弁解口にせず
 かむろ路を黄金に染めて柿みかん
 泣き笑ひ扇子一本にある落語
 日々多忙のりきる辛を噛みしめる
 マスコミの話題にされて売れて行く
 十円で折る合格虫が良い
 大写し勝利の汗は美しい
 逢うたびに孫の言葉がふえている
 一匹の猿梯子車を手古摺らせ
 地上げ屋がもう値踏みする低い軒

希久志 ダン吉 寿美子 通彦 一弥 春栄 ゆづる みのる 浪速子 すみえ さよ子 こう 狸村 ひで 武助 勝晴 初太郎 富志子 白光子 甘平 滋雀報 柳楽 楓宏子 作二郎 岩信 公一 シマ子 雀踊子 章久 眉水 慶三

菓子箱の中に疑惑がつめてある
 種あかしされては困るリクルート
 それからの疑惑が解けぬ蜘蛛の糸
 疑つてみれば全買黒になる
 へし折れた天狗の鼻を見てしまい
 一升びんの底に沈んでいる自慢
 頭打ち自慢に燃えた日を悔いる
 自慢にしても風呂敷が大きいすぎ
 ごますりが感心ばかりする自慢
 自慢はしないがダイヤチラつかせ
 おちよほ口自慢話が大好きで
 いつくしむ母の乳房に欲しく神
 Tシャツも豊かな胸が欲しくなる
 南無観世胸のあたりに手を合せ
 聴診器乳房の谷間りと休み
 乳房見てもつとはにかむガキ大将
 乳バンド母を隠して立つ舞台
 吸いついて乳房離さぬもみじの手
 たゆまざる努力を知っている人気
 先走る人気へ自分見失う
 そして今重い鎖になる人気
 アイロンの人気ギヤラよしまわり
 票読みで矢張り響いた人気落ち

勝美 シメ子 寿美 三恵子 滋雀 度 喜風 智子 文秋 ハル子 トミ子 憲太郎 久子 善信 覚然坊 和子 雅風 新造 柳伸 庸佑 恒明 頂留子 しんじ 和子報 志洋 きよし 治子 三郎 スミ 吸江 昭子

岸和田川柳会 植山 武助報 喜久子

南大阪川柳会 中川 滋雀報 柳楽 楓宏子 作二郎 岩信 公一 シマ子 雀踊子 章久 眉水 慶三

川柳藤井寺 赤木 和子報 志洋 きよし 治子 三郎 スミ 吸江 昭子

まだおんな恋を恋して秋深く
 煩惱を濁す小さな矢がささる
 水濁る方が棲みよい魚ばかり
 割りきも定価にふくむ二枚札
 どしやぶりで童話の川も濁つとる
 ジメタル定価無だけ夢がある
 枯葉散る女の過去を秘めて散る
 悠久の流れ黄河は濁るとも
 旅一人家を恋つてる秋の虹
 七掛けの余生明るく生きている
 遠来の戦友に会う夜のぼたん鍋
 セーターをほめれば定価も口走る
 トンガリ帽貴女とワルツクリスマス
 雑音が私の白を濁らせる
 くすり風呂すこし濁っている効き目
 俸せな夫の寢息は気にならず
 菊日和孫の手を引く七五三
 菊枕王者になった夢を見る
 それぞれに定価をつけてする見合い
 濁り酒飲んだ梅田もビルの街
 国民の抵抗もはや票だけか
 濁りなく全うしたい人生を
 便り書く横で字引が正座する
 目の前の金で本心濁らせる
 山紅葉の庭へも下りてくる
 天皇の帽子は那須の陽に冴える
 汗を見た貯金は外へ出たがらす
 冥土への旅を夫婦で練るブラン
 どちらとも見分けのつかぬ双子星
 秋の山遠いこだまが空を切る
 秋の田にソフト姿の案山子立つ

美代子 寿美子 美房 作秀 敦子 正枝 雅美 彩美 和美 信子 ときお 婦美枝 本蔭棒 末一 政代 伴子 祐二 みのる 紀子 昌子 繁男 初枝 松亭 好太郎 喜道 初代 美佐 秀伸

光蔭はハタチの兄を置いてゆく
 おとなになろうと清濁併せ吞む
 豊中もくせい川柳会 田中 正坊報
 毒殺の話 歴史に裏があり
 毒承知ビールを舐れたい味
 毒い部屋に正しくひびく掛時計
 病む部屋に正しくひびく掛時計
 正しいと言ひ張る兎にも一理あり
 真正直に生きて夫婦にない話題
 口滑ると友を裏切る事になる
 よく曲る寺の廊下でまた滑り
 よく滑る口だからマスクしている
 人生色々登つて滑つて飛ばされる
 すべり台まっ逆様にリクルート
 先代の墨やと先生揮毫する
 墨をする男の胸にあるざんげ
 風花の舞う日写経の墨を磨る
 急逝の夫の脱いだシャツ洗う
 ハガキだけ買いに師走の渦に居る
 生涯を母が語ると深い雪
 手料理のもてなし夢が小さくなる
 風の街手の鳴る方へ向くピエロ
 冬晴れ電車でおむつ替えている
 何事も冗談ごとでないます人
 正解がとけないままの二十五時
 殺されぬ範囲にしとこ保険金
 家並が切り絵のように明ける朝
 花街も自爾ムードの事始め
 募金箱遠回りして自己嫌悪
 夫の嘘うなすきながら編む毛糸
 炭竈が花生けに化け母の部屋

よう女 和子 萬的 明吉 俊子 登代子 杜的 白溪子 紫香 博史 洋子 つえ子 花村 きく子 正坊 よし子 佳秋 女 曲ん手 慶子 作二郎 登志美 とく子 露児 典子 圭坊 隆 福一 武庫坊

表札の墨ももうすれてあるじらい
 女関で妻の微笑がおそろしい
 京都塔の会 松川 杜的報
 つぎはぎの歩幅で登つた九十九折
 万歩計も少し気まぐれ秋です
 碧い空手繰りよせると海になる
 金毘羅さん花街らしい絵馬並ぶ
 古都の秋女はそつと鈴を振る
 縁切りの絵馬も薄れて冬の音
 栄西を偲ぶ茶の花冬の寺
 お願いの我によく似た絵馬多く
 女断つ願ひ金毘羅宮の絵馬
 勇の句碑初冬の風が撫でてゆく
 紅がらの壁にこぼれる禪居庵
 秋の香が膳にこぼれる禪居庵
 格子戸も芸も女が磨く街
 秋の陽を溜めて一力の赤い壁
 六地藏笠の落葉がおもたそう
 映画村カレが好きな三度笠
 煩惱へひと日ひと日の遍路笠
 笠とみの落柿舎の秋深みゆく
 仏から仏へ暮れる遍路笠
 珍らしい噂はじつとしていない
 珍らしい商売蘇くという息子
 名も呼ばすおいても呼ばす四十年
 珍らしく陰口黙って聞いている
 珍らしく事だ靴を磨りてくれている
 煙草まだ吸うと珍らしそうに言う
 評判のケチに食事を誘われる
 遠くから見ればのどかな柵の中
 朝茶粥あしたは俺が炊くという

富美子 寿美子 杜的報 達子 武庫坊 栄 美智子 諷云児 圭坊 光子 紅陽 美穂 年代 正坊 シマ子 杜的 静代 白李 登志代 萬的 飛鳥 白溪子 江美 芳客 幸 三男 みち子 はつ絵 太茂津

越えた柵もう振り向かぬ冬の蝶
越えられぬ柵を飛びこすのは女
おろおろと柵の向こうの虹を追つ
柵がありだからロミオとジュリエット
お隣の柵から貰う菊の花
柵に顔のせて乳牛ポーズとる
松みどり紅葉のこして建仁寺
柵一つ心に消えずエトランゼ

川柳塙

河内

月子報

正直に生きたくかつら敬遠す
その門をくぐればこわい入学金
アデランス風呂場に置いてある恐さ
父さんのかつらは古いベレー帽
金髪を脱いで普通の子に戻る
盲点のからくりを知る鳩がいる
文無しの人に怖いものはない
身づくろいしてから門の前に佇つ
わたしよりか細い腕にもたれてる
文無しになると帰ってくる小犬
乱れ髪かつらと違うのが自慢
時代劇かつらやくざの顔にする
融通の利く裏門の守衛さん
欄干にもたれ地獄を覗いてる
欲望という盲点にひっかかり
赤門を出たブライドが邪魔をする
裸婦像にもたれていまだ一人者
巢立たせて一人淋しい門構え
もたれてる筈の夫にもたれられ
文無しになって明日の風を待つ
文無しが度胸を決めた十二月
もたれたらつつかい棒の要る男

英子 佳秋 英子 京童 花代子 紫香 静江 求芽

千万子 春香 楓 雪梢 半銭 あかり かりん 正子 泰子 森子 花村 信博 佐久良 素灯 真柳 庸佑 金三郎 頂留子 志華子 凡子 眉水 月子

五時からのかつらは別に持ってます
門限を乱してるのはお父さん
俵せは門構えではわからない
駒つなぎ川柳会
悪友に悪友をだました声でくる
人生は悲しいという宝物
父の打つ釘は終りのないドラマ
わら人形うつ釘握るのは女
落ちたかとはっとした目になる約手
天才の自惚れ猿も木から落ち
目のうろこ落ちて愚かさ身にしみる
用意して照るてる坊主ぶらさげる
まだ若いのに墓地を買つたという用意
竹光を用意安らかに眠る
仲人の席で酔えない酒をうつけ
礼服が帰りの横道許さない
晴姿二十の春の髪飾り
悪友の葬儀委員を頼まれる
棺に釘一層哀しい秋の音
喪があけて釘に主なき衣紋掛け
落ちてから畏の深さを思い知る
泥かぶる用意も秘書は強いられる
恍惚を抱え厳しき用意する
花屋から儀式に合った花がくる
仮面付け替えて儀式の列にいる
父の頃から釘に吊るしてある時計
背かれてポトリと落ちた花の首
焼香順もめてそっぽを向く遺影
悪友が一人も居ない淋しいな
悪友が死んでそれから冬となる

天笑 小雪 文 小路報 東雲 恭太 冬葉 柳右子 しんじ 覚然坊 新造 勝美 白兔 悟郎 善信 幸治 眉水 章久 美乙女 正一 萬的 比沙胡 曲ん手 重人 作二郎 甘平 憲太郎 柳宏子 正紀

かな釘流母の温もりある手紙
無駄口に蓋する釘を強く打つ
落ちこんで月と話せた水たまり
その時は仏になつてゐる儀式
蝦夷に生きるアイヌが誇り持つ儀式
突然のように法事の通知くる
確信がないので二の矢用意する
出稼ぎの用意へ柿が熟れてくる
五時からはみな悪友と限らない
桐一葉尖を抱いたまま落ちる
借りてきた猫白無垢の角隠し
貸衣袋ちゃんと押さえてある儀式

潔 凡子 美津枝 浩一郎 雀踊子 文秋 射月芳 信治 翠公 美幸 柳伸 小路 豊作 珍顔 進一 三香 美乃留 利和 江み 八恵子 柳香 一眺 行江 健太郎 目行 満洲子

ドブロクを茶碗について雪の里
祝い酒母の貝殻節となる
我無念肝臓炎で酒を断つ
祝い酒妻もすこし酔うている
酒売れど酒屋の亭主下戸の口
にこり酒飲めない父は出世せず
味知らぬ下戸がうたえぬ酒の題
湯上りへ疲れも直る妻の酌
甲斐性で飲むなら飲めとこたわらず
振り返る古城の酒は花盛り
酒好きはよしが泣かれるのに困り
酒飲めば世は極楽に見えてくる
下戸なれど上戸に合わせ手を叩く
酒飲むなはケンコツよりもまだ辛し
酒飲みは酔わぬと云うて酔うており
「果たせない誓いを今も抱いたまま
満洲子」
満津子に訂正いたします。

■句集紹介

坂本仙吉郎句集『ふたり旅』

吐田 公一

この度、坂本仙吉郎氏が句集『ふたり旅』を米寿記念として、上梓なさったことと心からお慶び申し上げます。

仙吉郎氏は、序文にもありますように、「八十の手習い」として、ご高齢から川柳を始められた方で、薫風先生のご紹介で初めて当城北川柳会へ参加されました折、正直いって、八十歳まで詩歌の素地もなく、これらとはおよそ縁遠い建築の仕事に一生を打ち込んで来られた方が、果して長続きされるだろうかと思案したのはひとり私だけではなかったかと思う。ところが、毎句会に参加されるに従って、仙吉郎氏特有の素直な句風が私達の心を打つようになり、城北の誰しもが驚きと尊敬を抱き始めたことも事実である。

仙吉郎氏の略歴をみて、愛媛県松山市のご出身と知り、奇しくも城北川柳会から二人の松山人―つまり羽原静歩氏と坂本仙吉郎氏が句集を出版なさった事になり、私たちの会にとつても、本当に喜ばしい限りである。

早立ちの旅はお茶漬けかきこんで

何んの銜いもなくさりと云つてのけた中に、旅への思いを折り込まれ、また、ご夫婦のむつまじさが随所に見受けられる。

細い糸つなぎ合わせて共白髪
およそ仙吉郎氏の風貌からは察せられない
織細な神経をお持ちのようで、
えらかろが辛抱しやと先に言う

また、亡妻を偲んでは、
黒梓の中より一声出して欲し

には読む者をして涙禁じ得ないものがある。
人の一生には必ず起伏がある。仙吉郎氏もまたその例外ではなかったろうに、
幸せに八十年を燃え尽くし

とは、次の句と共に、まさに人生を達観なさつたものと思われる。
八十八年昔こまこま覚えても

このように『ふたり旅』をじっくり読むにつれ、仙吉郎氏の人柄を彷彿させるものが感じられ、この句集の発刊を期に再度川柳に情熱を燃やして頂きたいと冀う次第である。
八十の手習い見事本になる 公一

近畿文字放送作品募集
題「希望」 森中恵美子選

3句 締切2月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい
〒540 大阪市東区谷町2丁目36
大手前ウサミビル3階 近畿文字放送 川柳係

だいとう番傘創立10周年
山本翠公句集『火山系』発刊

記念川柳大会

と き 4月16日(日)午前10時半開場
出句締切正午

ところ 大東市立市民会館 JR学研
阪奈国道・市役所東すぐ
都市線住道駅下車北東へ徒歩10分

句集鑑賞 各題2句(欠席投句拝辞)
片岡 つとむ

宿 題 試 す 田頭 良子選

抱 く 木野由紀子選

約 束 中村 小弓選

席 八木 千代選

元 気 時実 新子選

女 たち 森中恵美子選

フ ァ イ ト 龜山 恭大選

う わ さ 梶川雄次郎選

進 む 磯野いさむ選

火 山 山本 翠公選

事前投句 ※3月20日必着で〒576大東市御供田

会 費 2-21-16 だいとう番傘川柳会へ

三、〇〇〇円(句集、昼食、

記念品、発表誌呈)

主催 だいとう番傘川柳会

柳界展望

集録 敏・武庫坊

★第13回全日本川柳大会
6月11日(長崎市) 宿題
と選者決まる。

第1部(事前投句)

男 小林一声 山梨
つなく 森本清子 石川
旅 池田可宵 長崎

第2部(当日出句)

再会 高橋春造 岩手
天気 龜山恭太 大阪
高い 藏多季溪 東京
折り 高谷梵鐘 長崎

★第4回国民文化祭さいたま89文芸大会は11月11日、浦和市高砂3-1-4の埼玉会館で開催に決定。

★第2回NHK学園全国川柳大会(10月30日・東京)で次の同人3氏(4句)が特選、田中正坊、桜井千秀両氏が秀作に選ばれた。

君子豹変すぐ自画像を塗

りかえる 安平次弘道
相談は何もなかった遺言
書 羽津川公乃

可愛くて孫に打ち出の小槌振る 羽津川公乃
翔ぶまでは孫の風船持つてやる 三宅 保

★川柳塔鹿野みか月社は、「みか月」12月号を結成8周年記念大会号として発行

★「川柳都大路」1月号は都大路川柳社創立10周年記念大会の特集、全入選句と選者の感想文を掲載。

★昭和3年ごろ、麻生路郎の肝煎で発足、清水白柳、川村好郎、八木摩太郎、菊

沢小松園へと受け継がれてきた「南海電鉄川柳部」は12月のサヨナラ句会で休部したが、新年から「南海川柳会」として再出発、1月20日、玉造老人憩いの家で初句会を開いた。

★川柳ふうもん吟社は、「第7回鳥取県没句川柳柳養大会」特集号を発行。

★核戦争に反対する関西文学者の会は、「反戦反核詩歌

句集」第7集の原稿を募集している。川柳は1頁7句(2頁16句)で参加負担額は1頁3000円、締切は3月20日、送り先は羽曳野市8-31-11・塩満敏

★「川柳京かがみ」は10周年を迎えて64号を発行、この号で会を閉じる。

▽同人消息△

■高杉鬼遊氏(八尾市・本社常任理事)は旧冬、心筋こうそくで大阪医大病院に入院したが、経過は良好で1月13日退院、自宅療養中

▽お便り△

■橘高薫風氏(副理事長)「大晦日から3日まで長崎・阿蘇・由布院・国東の旅をし、九州にある国宝建造物の崇福寺・大浦天主堂・富貴寺・宇佐八幡宮の四つを見ました」

■上田翠光氏(奈良県・同人)「朝夕2本の点滴で7時間、ベッドに張付けの小生に課題吟の選、そろそろ柳界へ帰って来いのお呼びと勉強させて頂きました」

句集」第7集の原稿を募集している。川柳は1頁7句(2頁16句)で参加負担額は1頁3000円、締切は3月20日、送り先は羽曳野市8-31-11・塩満敏

と勉強させて頂きました」

ふあうすと川柳社 創立60周年記念川柳大会

とき 4月29日(祝) 午前10時
ところ 神戸市立勤労会館
(JR三宮駅前・神戸新聞会館東)

兼題

「誇る」 安藤まさ代選
「道」 佐藤 一粒選
「澄む」 黒沢かかし選
「姿」 山本 柳化選
「燃える」 藤代 院潮選
「声」 平田のぼる選
「実る」 小松原爽介選
「進む」 西尾 栞選
「若い」 磯野いさむ選

事前投句

「階段」 藤本静港子謝選
各2句詠(事前投句を含め欠席投句拝辞)

会費 二、〇〇〇円(記念官印呈)

事前投句締切 3月31日(ハガキも可)

投句先 〒653 神戸市長田区平和台町3丁目5-1

藤本 静港子方

前夜祭 4月28日(金)

懇親宴(鳥光四、五〇〇円) 子定

宿泊(須磨荘、四、〇〇〇円(朝食のみ))

市内観光 4月30日(日) バス(ワイン城・播磨中央公園紋太句碑見学)

(三、〇〇〇円) 子定

〔東京芸風書院・刊〕

現代川柳選集

(全5巻)

体装 四六判 上製本(ハードカバー)

約二〇八頁

このたび日本川柳協会のご協力を得て現代川柳選集(全5巻)を刊行することになりました。左記執筆者の代表作品90句および作者のことは収録しております。
全5巻をぜひあなたの書架へ

予約受付中!

特価 一冊 一、五〇〇円(送料共)

何巻を何冊とはがきでお申込みください。

〔申込先〕川柳塔社

現代川柳選集 執筆者一覧

第一巻

(北海道 東北 東京篇)

越郷 黙朗(北海道)
齊藤 大雄(北海道)
宮本 紗光(青森)
猿田 寒坊(秋田)
高橋 春造(岩手)
片倉 沢心(山形)
菅原 一宇(宮城)
今野 空白(福島)
佐藤 良子(福島)
佐藤 正敏(東京)
神田 仙之助(東京)
竹本 瓢太郎(東京)
多伊良 天南(東京)
成田 弧舟(東京)
野村 圭佑(東京)
野谷 竹治(東京)
尾藤 三柳(東京)
山本 六道郎(東京)
脇屋 川柳(東京)
渡邊 蓮夫(東京)

第二巻

(関東 北陸篇)

川俣 喜猿(栃木)
白井 花戦(千葉)
西村 在我(千葉)
堀口 北斗(埼玉)
山崎 涼史(埼玉)
篠崎 堅太郎(埼玉)
大木 俊秀(神奈川)
岸本 吟一(神奈川)
坂本 一胡(神奈川)
志水 剣人(神奈川)
関 水華(神奈川)
大野 風柳(新潟)
田向 秀史(富山)
脇坂 正夢(富山)
酒井 路也(石川)
中谷 道子(石川)
細川 聖夜(石川)
前田 義風(石川)
森本 清子(石川)
山田 良行(石川)

第三巻

(中部 近畿 四国篇)

小林 一声(山梨)
藤原 時化緒(静岡)
石曾根 民郎(長野)
佐藤 曙光(長野)
山崎 鮮紅(長野)
野口 初枝(岐阜)
東野 大八(岐阜)
青木 晴嵐(愛知)
加藤 翠谷(愛知)
鈴木 可香(愛知)
丹羽 麦舟(愛知)
鈴木 如仙(愛知)
矢須岡 信(三重)
桶屋 鳴味(福井)
玉野 可川人(京都)
保木 寿(京都)
仲川 たけし(愛媛)
森 紫苑莊(愛媛)
福田 白影(徳島)
宮本 時彦(高知)

第四巻

(関西 西篇)

龜山 恭太(大阪)
西田 柳去子(大阪)
広瀬 反省(大阪)
磯野 いさむ(大阪)
桶高 薫風(大阪)
永田 帆船(大阪)
久保田 以光(大阪)
山本 翠公(大阪)
西尾 榎(大阪)
梶川 雄次郎(大阪)
森中 恵美子(大阪)
岩井 三窓(大阪)
定金 冬二(大阪)
片岡 つとむ(奈良)
野村 大茂津(和歌山)
奥田 白虎(兵庫)
黒川 紫香(兵庫)
小松原 爽介(兵庫)
去来川 巨城(兵庫)
時実 新子(兵庫)

第五巻

(中国 九州篇)

八木 千代(鳥取)
小林 由多香(鳥取)
柴田 午朗(島根)
本庄 快哉(島根)
大森 風来子(岡山)
田中 好啓(岡山)
寺尾 俊平(岡山)
石原 白峯(広島)
岡田 恵方(山口)
森本 医昌(福岡)
樋口 祐海(福岡)
藤田 きよし(福岡)
池田 可宵(長崎)
田口 麦彦(熊本)
吉岡 竜城(熊本)
尾花 白風(大分)
園田 蓬春(大分)
堤 八郎(大分)
田中 伯(宮崎)
虎頭 民雄(鹿児島)

2 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	3日(金)午後1時から 火・拾う・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料60円切手3枚
堺川柳会	5日(日)午後1時から 行方・ゆっくり・譲る・指	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
八尾市民 川柳会	10日(金)夕6時から 細い・欲・贈る・夢	八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川柳塔 まつえ	11日(土)午後1時半から 寒波・下手・日記	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川柳 わかやま	12日(日)午後1時から 振る・増える・二	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時から 瓦・筋書・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
富柳会	16日(木)午後1時から 内職・鍋・波	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
高槻川柳 サークル 卯の花	16日(木)正午から 健気・疑う・チャンス・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児 句会費 500円 投句料 200円(郵券可) 各題2句
南海 川柳会	17日(金)午後6時から 堅い・冷える・流れる・消える	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
南大阪 川柳会	19日(日)午後6時から 防ぐ・無駄・揺らぐ・類	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
川柳 ねやがわ	19日(日)午後1時から 年号・親・相性・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
もくせい 川柳会	20日(月)午後1時から 鈴・映画・揺る・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
川柳 東大阪	25日(土)午後6時から 狙う・マンション・包む・雪	東大阪市社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川柳会	27日(月)午後6時から 得心・抜く・凍る・用意	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-33-11 津守柳伸

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(締切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

● 募 集 ●

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

吟題 (5句) 「箱」 仁部 四郎 選
課 題 「始める」 岸野 あやめ 選

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
愛染帖 (3句) 橘 高薫 風 選
茴香の花 (3句・女性) 小出 智子 選

四月号発表 (2月15日締切)

吟題 (5句) 「切る」 丁坪 サワ子 選
課 題 「公認」 玉置 重人 選

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
愛染帖 (3句) 橘 高薫 風 選
茴香の花 (3句・女性) 小出 智子 選

五月号発表 (3月15日締切)

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友に限らず、どなたでも投句できます。

2月の常任理事会は2日(木)

〒545 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
電話 (06) 691-1691 四番
振替口座大阪 813336八番

発行所 川柳塔社

印刷所 藤原童心社
編集兼 西尾 栞
発行人 西尾 栞

定価 五百円 (送料50円)
半年分 三千二百円 (送料共)
一年分 六千三百円 (送料共)

一九八九年一月二十五日印刷
一九八九年二月一日発行

本社2月句会

日時 二月四日(土) 午後六時
会場 メンズファッションセンター3階
東区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

兼題 「跨ぐ」 吐田 公一 選
「瓶」 佐藤 藤子 選
「住所」 岩本 雀踊子 選
「皺」 西尾 栞 選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川柳塔社

3月の兼題 「古敵」「ゆるり」「ゆるり」

3月の本社句会は7日(火)

『夜市川柳』募集

第9回 「話」 寺尾俊平 選
3句・締切 2月末日

第10回 「字」 中尾藻介 選
締切 3月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町2-9-2
河内天笑方
堺川柳会

編集後記

☆平成の御世となった。しめやかな雨に大阪は明けた☆昭和の最後の日には本社句会があり、選を担当出来たことも思い出となる。

☆大正15年生まれの方は、昭和と共に生きて来た。それ故か、昭和元年は6日間、昭和64年は7日間であったことすら因縁めいて思えるのだ。

☆私たち世代は、昭和20年8月15日を境に別の人生を歩いた。20年(物心ついてからは15年)と43年、歲月は倍以上に戦後の方が長い、実質は同じに思えてならない。現在が延びると、遠い過去の質量が、どういう訳か重さを増すのである。これは、川柳生活での路郎先生に薫陶を受けた7年が以後の25年の重さと変らぬのと同じで、私の、過去に執着を持ち、未来へは積極を欠く人間性の短所のせいであらう。

るよう祈りたい。
☆30日に刷り上がった年賀状と同人名簿を持ち、大晦日新幹線に乗った。長崎・阿蘇・由布院から国東半島への旅は、国東の石仏礼拝が主目的だった。妻は実妹を亡くしてから仏像に強い関心を示し出したのである。その旅で、長崎の崇福寺と大浦天主堂、大分の富貴寺と宇佐神宮の四つの国宝建造物を拝することが出来た。

☆3日帰宅して頂戴した年賀状を見る。「川柳雑誌」時代の句友、西川晃氏から「精神の欠点は、顔の欠点と同じく、年をとるとつれづれ増していくものだ」と、何かの本に書いてあった。人間性の尊厳を保ちながら泰然と老い朽ちたいものと思っています。と、年頭の所感が記してあり感慨を深くする。旅行中、伊藤淳二著「天命」を読んだが、身近な友人の片言の方に胸を熱くする。

麻生路郎は、大正天皇を悼み奉ると題し「草薙の臣かなしみの炭をつぐ」と詠んだ。「煙草に火つけきしたまま雨の闇 薫風」一本の煙草、香煙の如し(薫)▼救急車に乗ったのは二度目である。どんな人が運転するのかと思ったのは最初の時で、朝食の前に夕食を食べている普通の事務職員の人だった。あの忙忙しいピーポーの彼方には、悲惨な絵がちらついてならないその渦中へ直行する運転手は、スパーマンか白馬童子におもえてならない。

候「これは、江戸末期の曹洞宗の禅僧、大愚良寛こと良寛和尚の手紙の一部である道理はそうであってもここまで悟れるものでない。」▼「心臓カテーテル検査・PTCA」を受ける身になって、大袈裟と思われようがこの名文を今を生きる覚悟にしている。医者の言葉よりも、今は亡き良寛さんの言葉の方に説得力があるのはどうしたことか。川柳は教句ではないが、できることなら何時までも生きつづける力のある一句を選じたものである。(き)☆四月には入学、八月には戦争・原爆というように、ある月になると連想する事柄が個人的にも社会的にもあって、句を作ったり、文を書くときのテーマやヒントにもなる。さて二月という、私には一九三六(昭和十一年)年に起こった二・二六事件が思い浮かぶ。☆この事件を目撃したわけでもないのに、完全武装の兵士がザクザクと白雪を踏み軍靴の音までがよみがえ

る。恐らくこの事件に関する記憶が、活字や映像による間接体験によって頭に焼き付いているからだろう。この年は日独防共協定、スペイン戦争という戦前の昭和史を区切る筋目の年にあたり、鶴形は一ざん塚で読む妹を売る手紙」という句を発表している。

☆「原稿の書き方」その2原稿はもちらん原稿用紙に書くわけだが、なぜ20字詰になっただろうか。

雑誌はもともと本誌と同じ大きさ(A5判)であり、6号活字(11級)を3段組みにすると20字になり、これが現在も受け継がれているというのが私見である。

☆そこでこの20の升目に文字をキチンとはめ、その文字の位置も活字になることを頭において書くのが常識だろう。ところが、これが案外、守られていない。さらに決められた原稿の字数と締切日も厳守しない。当り前のことを当たり前にするのが、実は一番むずかしいことかも知れない。(正)

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成元年一月二十五日 印刷
刊行元(毎月一日発行) 直営(毎日一日発行)

KIRIN
21世紀へ乾杯

本格派。
旨さの辛口。

アルコール度数高め
キリッとしまるドライ

キリンビール株式会社

キリンドライ

標準的小売価格は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。



ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ

TEL641-0551